

短歌のこころ

山田輝彦

目次

短歌のこころ

『短歌のこころ』上梓にあたって 日本青年協議会代表 梶島有三 ……5

短歌のこころ (昭和六十一年)

- 短歌創作の意味 ……11
- 連作短歌について——正岡子規(二) ……16
- 子規の世界——正岡子規(三) ……21
- しひて筆をとりて——正岡子規(三) ……27
- ますらをのかなしきいのち——三井甲之 ……32
- 疾風怒濤——川出麻須美 ……37
- 牛飼の歌——伊藤左千夫 ……42
- 死にたまふ母——斎藤茂吉 ……47
- 鍼の如く——長塚節 ……52
- 酒と旅の詩人——若山牧水 ……58

短歌随想 (平成四年～七年)

(平成四年)

- 「相聞」——いのちの呼びかけに和へる歌 : 65 / 「神島の相聞歌」をめぐ
つて : 69 / 三島由紀夫の辞世二首 : 73 / 真珠湾の若桜 : 77

(平成五年)

- 子規の年ほぎの歌 : 81 / 日露戦争の紙碑『山桜集』 : 85 / 晶子像修正の
ために : 89 / 桜のうた・日本の美意識 : 93 / 子規の手紙うた : 97 / 青
春のうた : 101 / この果てに君ある如く : 105 / 八月十五日・山河慟哭 :
109 / 乃木希典大将の辞世 : 113 / 学徒出陣五十年(その一) : 117 / 学徒出
陣五十年(その二) : 121 / 学徒出陣五十年(その三) : 125

(平成六年)

- 昭和天皇御製五首 …… 129 / 吉野秀雄の歌 …… 133 / 歌会始のおうた …… 137 / 春の歌 …… 141 / 台湾に生きる短歌 …… 145 / 東歌の美しさ …… 149 / 芥川龍之介の短歌 …… 153 / 国敗れし日 …… 157 / 両陛下御訪米と短歌 …… 161 / 山川京子歌集を読む …… 167 / 明治短歌の一側面 …… 171 / 万葉・大伯皇女の悲歌 …… 175

(平成七年)

- 恋闕の歌人白井傳 …… 179 / 「防人の歌」再読 …… 183 / 歌会始の儀 …… 187 / 家持の春愁の歌 …… 191 / 大震災を詠む …… 195 / 源実朝の歌 …… 199

あとがきに代えて …… 203

『短歌のこころ』 上梓にあたって

日本青年協議会 代表 梶島 有三

あの時は確か、昭和四十二年に開催された熊本県・阿蘇での合宿であったと思う。著者であられる山田先生を始め国民文化研究会の先生方によって開催された「学生・青年合宿教室」に私も学生の一人として参加した。合宿プログラムには阿蘇登山があり、その時の体験を短歌にして提出しなければならなかった。私は自分が創作した歌は忘れてしまったが、次のことだけでも覚えていゝる。私は阿蘇の火口に立って自分が吸い込まれていくような気持ちを歌にした。提出された参加者の歌は全て歌稿にされ次の日に山田先生によって講評がなされた。多くの提出された短歌の中から私の歌が取り上げられたのである。一瞬驚いた。先生いわく「火口に吸い込まれるような気持ちを歌ったつもりでしょうが、この歌は吸い込まれてしまった歌です」。会場は爆笑に包まれた。

以来三十年が経過した。その間、短歌創作に私は関心を持ち続けてきたが、下手であることに今でも変りはない。しかし、学生時代に、自己と他者とのズレ——「自分はこうしたつもりであるが」という点——を克服していくことは人生において重要なことである、と思ひ至らせて頂いたことは、私にとって実に有難いことであつた。自分はそのつもりでも相手に伝わっていないということをし、強く自覚させられたのである。この「つもり」が積み重なってくると自己弁解が生じてくる。そし

て理屈も用意しなければならぬ。更には居直りの態度となる。これが自己の閉鎖性でなくて何であらうか。相手と自己とのズレを克服できないまま自己の世界のみで考えをめぐらす——ここに、今生起している教育問題の原因があるといつても過言ではない。

かく考える時、私は自己が受けてきた教育を今更ながら改めて思わざるを得ない。「自己の個性とは何か」「自己の性格とはいかなるものか」そしてそれに基づく人生の目的とは何か——このことを考えさせられ、また考えてきたように思う。それはそれでよい。しかしそれは必然自己の心理的分析となり、内を見つめる傾向を作り出す。そこには自分はあるけれども他者は存在しない。他者、すなわち家庭・学校・社会・国家の存在であるが、それらを抜きにして果たして人生の目的という尊厳なるテーマを定めることができるであらうか。

このことは、そのまま戦後日本の国家としての姿にもあてはまる。現行憲法の性格すなわち①国民主権、②平和主義、③基本的人権、そしてそれに基づく解釈によってのみ国家の目的を見出そうとしてきたのが戦後日本である。このことは護憲派と言われる人々の信念でもあった。日本はこれらの人々の憲法分析作業によって内向きとなり、国家の施政方針から現実の世界（国際社会）の存在を欠落させてしまったのである。これがいわゆる「一國平和主義」と呼ばれる所以であらう。

考えてみれば自己の閉鎖性、国家の閉鎖性、これらはアメリカによる憲法強制や教育改革などの占領諸政策によって作り上げられたものである。日本は昭和二十年八月十五日をもって鎖国体制に

突入したと言つてよい。鎖国体制は今なお五十年続いている。この閉ざされた時代に山田先生を始め国民文化研究会の先生方は閉鎖性を打破すべく「心を開く」ことの尊さを懸命に私共に教えてこられたように思う。

山田先生は、「相聞」とは「いのちの呼びかけに和なごえる歌」であると云われる。

日本の伝統文化たる短歌の本質が、「相聞」すなわち「いのちの呼びかけに和える」という点にあるということは、日本人が常に自己以外の何がしかの「いのち」を感じていたということ物語っている。自己の内面を分析して、さかしらに個性を言い立てるのではなく、他との和合、交流を第一として、その一体感に喜びを見出すのが日本人の生のあり方であり、日本人の「うた」であったのだ、ということを手田先生は教えて下さっている。

耳を澄まし、心を澄まさなければ、「いのち」の呼びかけは聞こえない。花のいのち、鳥のいのち、風景のいのち、それらの呼びかけを私たちは聞きとることが出来るであろうか。人のいのちの呼びかけとは何か。また、歴史のいのち、国のいのち、に和えるとは一体どういうことか。

とりわけ昨今は、「国のいのち」などといっても何のことかわからない、どう心を働かせてそれを憚んだらよいのかわからない、といった人々がほとんどである。自国の歴史を暗記の対象、あるいは憎悪の対象としてしか教えてこなかった戦後五十年の教育の結果である。よって、「国のいのち」の呼びかけに和えてうたわれた古今の名歌は、共鳴者を失って、教科書にも一般の短歌関係の本に

も取り上げられることは稀になってしまった。しかし、山田先生は満腔の共鳴をもって、それらの歌をここに紹介し、解説して下さっている。そのことについて、私は特に深い感謝を捧げずにはおれない。

現代に生きる私たちが歴史を受け継ぐということは、先人の理想を受け継ぐということである。「国のいのち」とは国の理想、理念であり、かつそれを恋慕した人々の清らかな心である。「国のいのち」への相聞歌を私たちは心を澄まして聞き、その伝統を継ぎたいものだと思ふ。ここに心を聞く姿勢がある。そしてこの姿勢こそ国を開く力である。私たちは戦後日本の鎖国性を打破すべく努力を続けているが、その根本の力は、「国のいのち」に心を傾ける営みにこそある。

私共はこのことを教示していただいたことに感謝の念を抱きつつ、更に歩みを続けていきたいと思ふ。

この書は、山田先生が日本青年協議会の機関誌『祖国と青年』に連載執筆頂いた「短歌のこころ」（昭和六十一年一月～昭和六十一年十月）および「短歌随想」（平成四年九月～平成七年四月）をまとめたものである。長期にわたってご執筆いただいた先生に、ここに改めて厚く御礼申し上げます次第である。

祖国を愛し、歴史を継承していく志を持つ若い人々に、この書が広くまた末長く読み継がれていくことを願ってやまない。（平成八年八月）

短歌のこころ

(昭和六十一年)

短歌創作の意味

短歌といふ定型詩は、既に千三百年近い歴史をもつてゐます。日本人は折にふれて、この器うつはに哀歎を盛りこんで今日に至つてゐます。考へて見ると、これは驚くべきことでせう。西洋では「詩人」といふのは天稟てんびんの才を享うけた特別の人を指すのですが、日本の新聞には必ず「歌壇」のコーナーがあり、何げなく詠まれたやうな一首が実に深い感動を誘ふことがあります。日本では古来、歌の道を「シキシマノミチ」と言ひました。この言葉は、作歌といふ行為を通じて人格を鍛錬するといふやうな狭い意味だけではありません。自分の眼に触れたこと、心に感じたことを、言葉によつて客観化することによつて、自分の心の姿を自分で検証することができます。また、歌を詠むつもりで人間や自然を見ると、今まで見えなかつた微妙なものが、はつきり見えて来ます。それだけ心も豊かになり、情感もみづみづしくなります。広い意味で、感受性の豊かな人間へと、自分を高めてゆくことになりませう。もし「道徳性」を言ふなら、さういふ広い意味の「道徳性」であつて、気負ひ過ぎたタテマエを詠んでも、自分の心の解放感もありませんし、人が読んでも決して心がゆさぶられるやうな感動は生れません。

われわれが「生きる」といふことは、さまざまな経験を重ねることですが、日常生活の瑣末な経験は、ほとんど時間と共に流れ去ってしまひます。小林秀雄先生の言葉を借りれば、対象が自然であれ、人間であれ、その対象とのつびきならぬ関係を結ぶことによつて、初めて「経験」となるのです。歌を作るといふことは、経験をたしかめ、意識化することだといふことになりませう。平凡な日常生活の中の瑣末なことでも、それを凝視し、表現すれば、心打たれる作品が生れます。

少年のわが耳を掘り息をそつと吹き入れし母よ遠き遠き日

新聞歌壇に載つた一首ですが、私は何度もくりかへし読んで胸が熱くなりました。お母さんが子に膝枕ひざまくらをして、耳垢みみあかを取つてやつてゐる。取り終つて「ふつ」と息を吹きかける。誰もがきつと一度や二度は経験したことませう。それも遠い遠い日となつた。作者は恐らく年配の方で、お母さんはもうこの世にをられぬ方ませうか。「孝」といふことも、単なる徳目では力にならぬので、このやうな幼い日の温かい、なつかしい情感に支へられて、はじめて生きたものになるのでせう。

平凡な日常が続けば、人生は一番幸福なのかも知れませんが、人生には別離や愛や死のやう

な非日常的なことが必ず起ります。どんな平凡な人生にも必ずドラマはあります。今年の夏は、戦争末期に片道燃料をつんで、沖繩特攻を敢行した、戦艦大和の海底の所在が確認されました。吉田満さんの『戦艦大和ノ最期』の末尾は「『大和』轟沈シテ巨体四裂ス 水深四百三十米 今ナオ埋没スル三千ノ骸 彼ラ終焉ノ胸中果シテ如何」と抑制した、それゆゑ無限の慟哭を秘めた結語で終つてゐます。巨艦と運命を共にした兵士の父親の一人は次のやうに詠んでゐます。

散り果てし華一輪と思へども拾ふすべなし海のただ中

この父は四十年悲しみに耐へて来たのでせう。父にとつて若い息子は一輪の華であつた。このやうにうたに詠むことによつて、息子の魂を鎮めるだけではなく、みづからの悲しみを鎮めることもできるのです。戦争に関する歌が出ましたので、学徒兵の歌を一首紹介しておきます。

わが妹は母しななければ嫁ぐ日に誰が帯結び粧ひするらむ

出征する兄には年ごろの妹がゐた。母がゐないので晴れの結婚の日に、誰が帯を結び、化粧

の手伝ひをしてやるのだらう、といふ意味です。いつかまた紹介する機もありませうが、万葉の防人さきもりの歌と何とよく似てゐることでせう。惻々と胸に迫ります。かういふ情感のこもつた歌を作つた作者は、きつと勇敢に戦つた人でせう。反戦イデオロギーといつたものからは、決してこんな歌は生れて来ないのです。

一期一会といふ言葉は人と人との出会いの時に使はれるやうですが、人と自然との出会いも、また一期一会なのではないか、とふと思ふことがあります。花はたつた一度の開花のために、一年の間のちをはぐくみます。今、私がこれを書いてゐるのは晩秋なのですが、庭の片隅に黄色いつわぶきの花がひっそりと咲いてゐます。薔薇の華やかさや、牡丹のあでやかさはありませんが、精一杯に咲いてゐる姿はいぢらしいばかりです。鼻を近づけると仄はかな匂ひさへあります。私とつわぶきの花の間にいのちが通ひあひます。川端康成に「末期の眼」といふ随筆があります、すぐれた人はみな、自らを死の視座に置いて、そこから生をふりかへつてみる、といふことをします。子規の晩年の絶唱はさういふところから生み出されたものですが、例へば、「しひて筆を取りて」の中の次の一首のやうなものをよく味はつて下さい。

いちはずの花咲きいでて我目には今年ばかりの春ゆかんとす

子規といふ人については、これから論じることが多いと思ひますが、彼の偉いところは、決して深刻な悲愴感に沈みこんでばかりゐたといふ人ではなかつたのです。彼は晩年体が動かなくなつて、盛んに手紙を書くのですが、その端に次のやうに書きつけます。

十四日才昼スギヨリ歌ヲヨミニワタクシ内へオイデクダサレ

思はず笑つてしまふやうな歌でせう。歌の世界は驚くほど広いのです。いつも肩を張つて、天下国家を憂ふる歌ばかり作るといふのでは、本当の歌の力は弱まつてしまひます。これから折にふれて、心に沁みる歌を紹介してゆくつもりにしてをります。今回はまとまりのない序論となりました。

〔祖國と青年〕昭和六十一年一月号

連作短歌について——正岡子規（一）

近代短歌の原点といへば、それは正岡子規だといふ筈に異論をとなへる人は、ほとんどないでせう。彼の本格的な作歌活動は明治三十一年から、没年の三十五年まで約五年間に過ぎず、その作歌数も二千四百首余りに過ぎませんが、彼が与へた衝撃力の大きさは測り知れないものがありました。

短歌の世界の規範は、子規が出て来るまでは『古今集』でした。西暦九〇五年に成立したこの最初の勅撰集は、日本人の美意識を一千年の長きに涉つて支配して来ました。縁語、掛詞、比喩、誇張などの、煩雑な修辭（レトリック）の中で、表現者自身の素朴な心情が圧殺されてしまふ。和歌とは、さういふ特殊な技術を修得した人が、現実と離れた別世界をうたふものだといふ牢乎とした固定観念が出来上つてゐました。さういふ風潮の中で、子規は明治三十一年二月から三月にわたつて、新聞『日本』に、十回連続の形で「歌よみに与ふる書」を書きました。「歌よみ」とは、歌人一般ではなく、子規の眼前にゐた旧派の大家たちでした。連載二回目の冒頭に出て来る「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候」の一文は、文字通

り爆弾宣言といふべきものでした。今読んで見ても「歌よみに与ふる書」は理論家としての子規の卓拔さを示してゐて、その新鮮さを少しも失つてゐません。一方、彼は実作において、どんな作品を残してゐるでせうか。子規没後、門人たちが三十年以降の歌を編集して出版した『竹の里歌』には、次のやうな歌が見えます。彼は作歌の場合に「連作」といふ形式を好んで使ひました。連作とは、情意の自然な展開に沿つて、次々に歌を詠んでゆく方法で、一首一首が独立性を保ちながら、全体として一つの交響的な世界を造つてゆく効果があります。彼の作歌活動が、文字通り堰を切つたやうに昂揚して来る、明治三十一年には、「足た、ば」とか、「われは」とか、「天長節」とかいふ題を持つたすぐれた連作が見られます。まづ、「われは」(八首)から、いくつかを抜き出して見ませう。

吉原の大鼓聞えて更くる夜にひとり俳句を分類すわれは

人皆の箱根伊香保と遊ぶ日を庵にこもりて蠅殺すわれは

世の人は四国猿とぞ笑ふなる四国の猿の子猿ぞわれは

周知のやうに子規は明治二十八年以降、宿痾のカリエスのために、病臥の毎日を強ひられてゐました。自由を欲する精神と、自由を完全に奪はれた肉体と、その矛盾の中で苦しみ通した

末に到達した一つの境地です。こゝでは平凡な日常が、何の気負ひもなく、又、ともすれば病者に特有な自虐もなく、淡々と歌はれてゐます。明治、大正、昭和を通じての大歌人斎藤茂吉は大学生のころに、土屋文明は中学生のころに、これらの歌をよんで深く感動しました。このやうな日常の些事さじが、このやうな平凡な言葉でうたはれて、それが「うた」になるといふ感動でした。花鳥風月とは違つた「生」のかたちの表現の仕方があるといふ驚きでした。

あまり人が引用しないのですが、明治三十一年十一月三日の『日本』には、「天長節」八首の連作が掲載されました。説明の都合で番号を打つておきます。

- (1) 天の下しらす日の御子その御子のあれまし、日は常晴とこはれにして
- (2) 山ゆるぐ筒の音すなり九重ここのへの二重の橋を御馬駆るらしも
- (3) 槍の穂に御旗なびけて赤坂の青山の野に君いでますも
- (4) 芭菊まじぎくの黄きも緋ひも白も真盛りに咲ける君が代まさきくありませ
- (5) 御園生みそのふの菊折かざし百敷ももしきの大宮人はけふ遊ぶらん
- (6) 朝風の吹きくるなべに君が代を歌ふ声聞ゆ学校の方に
- (7) 草の戸に御姿みすがた掛けて菊活いけてわが祝いわふらくは千代いませとぞ
- (8) 山里に稲刈る男けふの日を天長節と知らず顔なる

少し説明を加へますと、(1)の「あれましし」は「お生れになつた」、「常晴」は「永遠に続くかと思はれるやうな快晴」といふ意味でせう。(2)の「筒の音」は「祝砲の音」です。(3)の「青山の野」は、青山の練兵場に、観兵式に出かけられるのでせう。(4)の「笹菊」の「笹」は「竹垣」の意味がありますから、竹垣のほとりに咲いた菊といふ意味と思ひます。「まさきくありませ」とは「御多幸であらせられるやうに」といふ意味です。(5)は問題なし。(6)の「吹きくるなべに」は、「吹いてくるにつれて」の意、今の学校の様子を思ふとき、明治の明るさ、闊達さがしのばれます。(7)の「草の戸」は「粗末なわが家」、「御姿」は「陛下の御真影、お写真」の意味です。(8)は、祝日も忘れて、好天の下で稲刈りにはげんでゐる男、これも現実だつたのでせう。しかし、今の文化人のやうにすねてゐるのではありません。快晴の空のもと、金色の天皇旗をはためかせて、閲兵に出かけられる明治天皇、祝砲のとゞろき、心をこめて小学校の子どもたちがうたふ「君が代」、黄も緋も白もとりまぜて咲き匂ふ菊の花、御真影の前に菊を活けて「千代いませ」と祈る名もなき民の一人子規、「明治」といふ時代を一幅の絵にしたやうな美しい連作ではありませんか。

今は、十一月三日は「文化の日」といふ、意味のよくつかめぬ名で呼ばれてゐます。戦前まで、それは「明治節」と呼ばれ、明治時代には「天長節」だつたのです。十一月三日を明治天

皇から切り離してしまふ感覚は、それこそ「非文化的」感覚以外の何ものでもありません。蠅を殺す子規も、心から天長節を祝ふ子規も同じ人間であるところに「うた」の世界の広さを感じるのは私だけでせうか。

（『祖國と青年』昭和六十一年二月号）

子規の世界——正岡子規（三）

明治三十一年といふ年は、子規の内部から堰を切つたやうに短歌が溢れ出した年でしたが、その屈託のない、自在な詠みぶりは何に起因してゐたのでせうか。子規はその年の七月に弟子の一人、河東銓にあてて、自分の墓誌銘を書いてゐました。死の丁度四年前です。

「正岡常規又ノ名ハ処之助又ノ名ハ升又ノ名ハ子規又ノ名ハ獺祭書屋主人又ノ名ハ竹ノ里人伊子松山ニ生レ東京根岸ニ住ス父隼太松山藩御馬廻加番タリ卒ス母大原氏ニ養ハル日本新聞社員タリ明治三十〇年〇月〇日没ス享年三十〇月給四十円」

子規は手紙の中で「コレヨリ上一字増シテモ余計ジャ」と書いてゐます。子規といふ人が、いつも観念や虚飾をそぎ落して、裸形の人間を凝視する力を持つてゐた人であることを、如実に物語つてゐると思はれます。

翌三十二年からは、子規庵で歌会が開かれ、多くの弟子たちが集つて来て、病者とは思はれない、活力の溢れた活動が展開されます。

四年寝て一たびたてば木も草も皆眼の下に花咲きにけりよとせ

「始めて杖によりて立ちあがりて」といふ詞書があります。病者の眼はいつも低いところにありますから、草木の花は上の方に見えます。しかし、杖をついて立ち上つてみると、それが見える下に見えるといふ、いかにも曲のない歌のやうに見えます。しかし、こゝには、視点の転換による「発見」があります。うれしいとか、悲しいとかいふ感情を現はす言葉は一つも使はれてみませんが、「花咲きにけり」といふ表現から、作者の強い歎びが伝はつて来ます。

夢さめて先づ開き見る新聞の予報に晴れとあるをよろこぶ

同じ年の春の「病牀喜晴」といふ連作十首の中の一首です。これも全く説明の要のない簡明な歌ですが、かういふ日常の些事が歌になるといふことは、当時としては非常に新しい経験の提示だったのです。

その年の八月に、子規は実朝の『金槐集』を読んで強い感動を受け、「金槐集を読む」八首の連作を作ります。幾百年の歳月を経て、すぐれた二つの詩魂が、交響、共鳴したといふことでせうか。

人丸の後の歌よみ誰かあらん征夷大將軍みなもとの実朝

「人丸」は柿本人麿のことです。実朝は人麿に匹敵する大歌人といふことを、歌の形で力強く宣言しました。

路に泣くみなし子を見て君は詠めり親もなき子の母を尋ねると

実朝のことは、稿を改めて論ずることにしますが、子規のこの歌は、実朝の「いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母を尋ねる」といふ歌に因よつてゐます。実朝のこの歌には、「道のほとりに幼き童の母を尋ねていたく泣くを、其あたりの人に尋ねしかば、父母なむ身まかりにしと答へ侍りしを聞きて」といふ長い詞書を持つてゐます。天下の將軍が名もない孤児に注ぐ涙、その涙に共感する子規、かういふところに日本人の魂の血縁がはつきり確認できるのではないでせうか。連作の中からも、う一首抄出します。

はたちあまり八つの齡よほを過ぎざりし君を思へば愧はぢ死ぬわれは

御承知のやうに、実朝は承久元年（一二一九）正月、鶴岡八幡宮で甥の公暁くきょうの手で暗殺されます。二十八歳でした。三十一歳の子規は夭折した実朝の前に、死ぬほど慚愧ざんきの思ひがするといつてゐるのです。それは誇張でも虚飾でもない、子規の真情の吐露であつたのです。残念ながら、現代のうたよみたちは、かういふ真率しんそつな、愚直な心を失つてしまつたやうに思はれます。天は夭折を代償に美しい死を贈ります。老残が宿命となつた現代は、詩魂を持つことは非常に困難な時代だと思はれてなりません。

この明治三十二年には、子規門下で重要な役割を演ずる二人の弟子が入門します。一人は岡麓、一人は香取秀真かとりほつまです。秀真は東京美術学校を卒業した鑄金師で、後に東京芸大教授、文化勲章受章者になつた人です。子規は得意の「はがきノ歌」で、「明日ハ君ガイデマス天気ヨクヨロシキウタノ出来ル日デアレ」といふ調子で歌会に誘ひます。若い秀真はどんなにうれしかつたでせう。この年の秋に子規は秀真の家を訪れ、スキヤキで歓待されたやうです。その時の御礼のうた。

牛を割きき葱を煮あつきもてなしを喜び居ると妻の君にいへ

晩秋の候、心ゆるした師弟でかこむスキヤキの、心あたたまる情景が浮んで来るやうです。いそいそと給仕する妻君への伝言もうたひこめてゐます。続いて次のうた。

我口を触れし器は湯をかけて灰すりつけてみがきたぶべし

子規は自分の結核菌が伝染することを恐れて、自分の使った食器をよく消毒せよといつてゐるのです。「みがきたぶべし」の「たぶ」は「たまふ」のつづまつた語ですから、「みがきたまふべし」の意味です。かういふことが、何の屈託もなく、ズバリと言へるところに子規の性格が、はつきり出てゐます。

前年の「天長節」の連作のすばらしさについては、前号で述べましたが、明治三十二年の「天長節」には次の作があります。

久堅ひさかたの天とこしへにあらがねの土うるほひて菊開く国

「久堅」は「久方」と同じで、天にかゝる枕詞、「あらがねの」は、土にかゝる枕詞です。天はとこしへに青く、地は豊潤で、清らかに菊の咲く祖国よ、といふ意味です。「天長地久」とい

ふことばから、天皇の御誕生日を「天長節」、皇后の御誕生日を「地久節」といつてみました。こんな美しいことばも、今は死語になつてしまつて残念です。

(『祖國と青年』昭和六十一年三月号)

しひて筆をとりて——正岡子規（三）

明治三十三年は根岸短歌会の黄金時代といはれた年ですが、正確な写生に裏づけられた豊かな情意がのびのびと表現された作品が、次々に発表されました。

くれなるの二尺伸びたる薔薇ばらの芽の針やはらかに春雨のふる

「庭前即景」（四月廿一日作）と題された十首の連作の三首目の歌です。観察が非常に細やかであることに注意して下さい。薔薇の若枝の色を「くれなる」と言ひ、その長さを「二尺」といつてゐるのはその証明です。「やはらかに」は、針がやはらかであることと同時に、春雨の降る状態の形容でもあります。歌のレトリックでいふ懸詞かけことばですが、ほとんどそれを感じさせないほど自然です。感性のみづみづしさと気品の高さは抜群で、芭蕉が「しをり」とか「細み」とか言つた美意識に近いものと思はれます。

松の葉の細き葉毎に置く露の千露ちつゆもゆらに玉もこぼれず

「五月廿一日朝雨中庭前の松を見て作る」といふ詞書をもつた、連作十首の中の冒頭の一首です。雨に濡れた松葉にびつしりついた露の玉を詠んでゐます。「千露もゆらに」の「ゆら」といふ古語は、元来は玉と玉が触れ合ふ音を表はすことばです。触れ合つて音を立てさうな露の玉が、松の葉の細い葉ごとにびつしり光つてゐる様子が鮮やかによみこまれてゐます。「ゆらに」はまた「無数の露がゆらゆらと揺れて」ともとれます。

この年の七月頃の作と思はれますが「星」と題する十首の連作があります。

真砂まさナス数ナキ星ノ其中ニ吾ニ向ヒテ光ル星アリ

タラチネノ母ガナリタル母星ノ子ヲ思フ光吾ヲ照セリ

中学生のころに読んだ芥川龍之介の『侏儒の言葉』の中に最初の歌の引用があり、「明滅する星の光は我々と同じ感情を表はしてゐるやうにも思はれる」とあつて、この歌の作者は誰だらうかといふ疑問を長く抱いてゐました。それが子規の歌であることを知つたのは随分後だつたと思ひます。今度連作を読んでみて、また新しい発見がありました。それは二首目との関連で

読むと、母への慕情を歌つたものと思はれるからです。起居の自由を失つたこの偉大な文人の晩年を支へたのは、母の八重と、出戻りの妹、律の二人でした。傲岸不屈の子規は、そのいらだちや怒りのすべてを、最も近い肉親である母と妹にぶつけてゐたやうです。さういふ負い目を、さりげなく星に託したものと思はれます。夜空の砂のやうな無数の星、その星の中に、自分に向つて語りかけてくる星があるといふ意味でせう。地上の愛憎は昇華されて天上の星となる。子規はかういふ形で、母への感謝を歌つたのでせう。

明治三十四年になると、衰弱は一層加はり、子規の生命はあと二年にも満たなくなり、しかし、肉体の衰弱と逆比例して、彼の創造力の炎は最後の光芒を放つやうに燃え上ります。この年の五月四日付の『墨汁一滴』に載つた十首の連作は、近代短歌の稀有の絶唱となりました。(便宜上、番号を付します。)

しひて筆を取りて

- (1) 佐保神の別れかなしも来む春にふた、び逢はむわれならなくに
- (2) いちはつの花咲きいで、我目には今年ばかりの春行かんとす
- (3) 病む我をなぐさめがほに開きたる牡丹の花を見れば悲しも
- (4) 世の中は常なきものと我愛づる山吹の花散りにけるかも

- (5) 別れゆく春のかたみと藤波の花の長ふさ絵にかけるかも
 (6) 夕顔の棚つくらんと思へども秋待ちちがてぬ我いのちかも
 (7) くれなるの薔薇さうびふ、みぬ我病いやまさるべき時のしるしに
 (8) 薩摩下駄足にとりはき杖つきて萩の芽摘みし昔おもほゆ
 (9) 若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり
 (10) いたつきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔まかしむ

心弱くところそ人の見るらめ。

少し語釈をしておきます。(1)の「佐保神」は「佐保姫」ともいひ、春の女神です。春との別れが悲しいといふ意味です。(6)の「秋待ちちがてぬ」は、「秋を待つことができなぬ」といふ意味です。(7)の「ふ、む」は薔薇をつけるといふ意味です。病勢が重くなる予兆のやうに、薔薇が薔薇をつけたといふことです。(9)の「夕かたまけて」は、夕方になつての意、(10)の「いたつきの癒ゆる日知らに」は、「病気の快癒する日も分らないのに」といふ意味です。この連作には、いちはず、牡丹、山吹、藤、夕顔、薔薇、萩、松などの草花が、一つ一つ愛惜をこめて詠み込まれてゐます。『子規全集』第六巻の、巻末解説の中で、大岡信はこの連作について、次のやうに述べてゐます。すぐれた詩人の、鑑賞力の鋭さに舌を巻きました。《何よりも心

うたれるのは、これらの歌で、子規が草花のひとつひとつ（十首の歌で、彼は一首ずつを春として身辺の愛する花とに捧げている）を、明日はこの世にいなくなる人の眼で見、愛惜していることである。それは、いわば花のひとつひとつのために碑銘をきざんでやる行為にも似ていた。）

子規が死んだのは、この歌が詠まれてから一年四ヶ月後、明治三十五年九月十九日の午前一時でした。八重と律と虚子が枕頭にゐたのですが、気がつかぬ内に呼吸が絶えてゐました。旧暦十七夜の月が恐ろしいほど明るかつたといひます。葬儀は二十一日に行はれましたが、子規の親友で、後の日本海大海戦で勇名をさせた秋山真之まねゆき参謀は、当時海軍大学の教官でした。彼は子規の葬列を見送りながら「升ノボさん、人はみな死ぬのだ」とつぶやいたといひます。

（『祖國と青年』昭和六十一年四月号）

ますらをのかなしきいのち―三井甲之

前号までで、子規といふ巨人の素顔のほんの一端に触れましたので、これから彼の系譜につながる数人の歌人について、幾つかの歌を紹介したいと思ひます。子規の系譜を言ふ場合、通常は子規―左千夫―茂吉―文明といふやうに、主として「アララギ」の歌人が問題になります。が、今回はその陰にかくれて不当に黙殺されてゐる、三井甲之こうしといふ歌人について述べます。

(私にとつて、三井甲之は思想上の師になりますので、「先生」と呼ぶべきですが敬称を略します。)三井甲之は、明治三十七年帝国大学の国文科に入学し、子規没後の根岸短歌会に新風を吹きこんだ天才的な歌人でした。しかし、先輩の伊藤左千夫と歌の評価について決定的な見解の相違を生じ、生涯「アララギ」と対決した別の途を歩みました。戦後は昭和二十三年の文筆家追放が占領終了まで解除されず、文筆活動を完全に封殺されたまま、昭和二十八年、七十一歳で悲劇的生涯を終へました。

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を

この歌は「^{わらび}蕨機関長故福田氏をしぬびまつる」といふ九首の連作の中の一つで、昭和二年十月十五日付の『日本及日本人』に発表されました。その年の八月二十四日、島根県美保関沖で夜間演習中に、駆逐艦、蕨・葦の二隻が衝突沈没し、死者百十九名を出すといふ大事故がありました。その駆逐艦蕨の機関長福田少佐の殉職を悼んで詠まれた連作中の一首です。この歌は叙景歌でないのは当然として、抒情詩かといふと、単純な抒情詩でもありません。いはば「祖国防護の悲願」といふ思想がよまれてゐる思想詩といふことになりませう。歌の中核は「かなしきいのち」といふところにあります。平時、戦時を問はず、有機的生命体としての「国家」を守るためには、個人の有限な生命が数限りなく犠牲に供せられて来ました。個人の生命といふものは、何物にもかへがたいものです。そして、その生命を守らうとするのは殆んど生物的本能ともいふべき強烈なものです。しかし、その本能に背いて、敢へて一つのことに献身するといふ行動は、人間だけの高度な能力であり、動物には決してみられないところだとは、スイスの著名な生物学者アドルフ・ポルトマンの指摘するところでもあります。「かなしきいのち」とは「悲劇的生命」であり、それはただに日本だけではなく、世界のすべての国々は、その独立と歴史の持続のために個人に悲劇を強ひて来たのです。国家は人間の基本的存在形式であるといふ悲劇的宿命を、これほど「芸術的」にうたひ上げた「うた」は少ないのではないでせう

か。私は宮澤賢治に次のやうな歌をみつけてその相似に驚いたことがあります。《ますらををはてなきつとめになひたち身をかなしまずとはに行くべし》。

三井甲之には忘れがたい友情のうたが幾つもあります。大正五年八月の『日本及日本人』には、「友に」と題した十首の連作があります。その中の二首をあげます。

心しる友とかたればこころなごみながるる涙とどめかねつも

わかるるにふして思へるころはもとはのかたみとわがむねに生く

前者の意味は説明するまでもなく明瞭でせう。後者は、別れに際して友は少し伏目がちに何かを思つてゐる。その心が自分にはよく分る。その心は永久の記念として私の胸に生き続け、自分を支へてくれるだらうといふ意味でせう。まるで「相聞」(恋)の歌とまがふやうな詠みぶりですが、孤独な戦ひに身をさらしてをればをるほど、心のかよひあふといふ体験は身に沁みる痛切さでこのやうな表現を促したのでせう。

祖国や友情のやうな「思想」ばかりが三井甲之の本領ではありません。特に出発期の歌のみづみづしさは抜群で、目を見張るものがあります。斎藤茂吉と三井甲之は不倶戴天の敵のやうにははれてゐますが、甲之から茂吉への意外な影響については、『国民同胞』66号に広瀬誠氏の

詳細な言及があります。今、二三、秀れた自然詠を挙げておきます。

底浅き汀みぎはに見ゆる石の間に砂ゆるがして水の湧く見ゆ

明治三十八年、作者二十三歳の時の作です。湖の岸边に立つて、透きとほつた水底を見てゐるときの作でせうが、「砂ゆるがして水の湧く」といふやうな表現は、観察がこまやかで、子規の写生の精神がよく生かされてゐます。広瀬氏のいはれるやうに、茂吉の《かがまりて見つつかなしもしみじみと水湧き居れば砂うごくかな》は、この甲之の歌の模倣でせう。同じ年の初夏の頃、故郷山梨の山林に早朝木を伐りに行つたときの十五首の連作があります。甲州の山々の上に、星かげがうすれ、朝日が上つて来る爽涼の一瞬をとらへて、自然のいのちが躍動する様をうたつたシンフォニーのやうな感じの作品です。その中に次の一首があります。

道おほふ細竹しほの葉そよぎ風起り遠田とほだの蛙天てんに聞ゆも

この歌の「遠田の蛙天に聞ゆも」から、すぐ連想されるのは、茂吉の処女歌集『赤光』の中の、余りにも有名な絶唱《死に近き母に添寝のしんしんと遠田とほだのかはづ天てんに聞ゆる》の一首で

す。これは何より動かぬ甲之から茂吉への影響の証拠ですが、数多い茂吉学者の中で、そこま
で眼の届いてゐる人は、広瀬氏以外にはないやうです。

甲之は生前自ら墓碑銘を記しましたが、その中に「人ハ死スレドモ　コトバハ生キテ　イノ
チヲツナグ」といふ一句がありました。歌人は後世が唱するに価する一首を残せば足ります。
今、甲府市竜王町の、幕末の志士山県大弐を祀つた山県神社境内に、冒頭に掲げた「ますらを
の」の歌を刻んだ歌碑がひっそりと立つてゐます。それは、三井甲之といふ稀有な思想家の、
不滅のいのちのあかしのやうに、個人の生命が国のいのちと合体する悲しいよろこびを、われ
われの深層に伝えて来るのです。

（『祖國と青年』昭和六十一年五月号）

疾風怒濤——川出麻須美

川出麻須美（ペンネーム鹿菅渡）といふ歌人の名は恐らく大多数の方は御存知ないでせう。

生前『天地四方・昭和篇』、『天地四方・明治篇』といふ二冊のささやかな歌集を残しただけで、広瀬誠氏が『和歌文学大辞典』に、百字に満たぬ短い紹介を書かれたのが、その存在が公的に認知された唯一のあかしだったのですから。斎藤茂吉は『明治大正短歌史』に於て、旧根岸短歌会系統の歌人を論じた中で、「三井甲之はその後、雑誌『人生と表現』を出し、雑誌『日本及日本人』に拠つた。川出麻須美、橋川正、花田比露思等がそこから出た」と簡単に片づけてゐます。しかし、彼の歌は既成の近代短歌史の枠内では処理できぬやうな、いはば明治の青年の Sturm und drang（疾風怒濤）を歌ひ上げて、今も読む者の魂に強烈に迫つて来ます。

川出麻須美は愛知県に生れ、鹿児島第七高等学校造士館を経て、明治四十三年東大国文学科を卒業します。長い教職生活の中で、三十代の終りから六十までの二十数年の七高教授の時代に薰陶を受けた教へ子たちによつて、遺稿集『天地四方』六百頁の大冊が、昭和四十七年に刊行され、その幅広い活動の全貌をうかがふことができます。

彼が詩歌への目を開かれたのは、前号でとり上げた三井甲之の影響によるものです。『天地四方・明治篇』の序文で彼は次のやうに述べてゐます。

《三井君と相知つたのは私が大学在学中の事であるが、それは私の一生中大きな出来事であつた。私の自然に対する一如の感、謹直な父と情熱的な母の感化、明治天皇への帰依、正岡子規、岩野泡鳴の影響等に依つて用意され、鬱積された私の魂に点火したのは三井君であつた。》

三井甲之によつて点火された詩魂は『アカネ』や『人生と表現』に、次々に長大な連作短歌となつて結晶します。しかし、紙面の都合でそれらの連作を、全体として鑑賞することができないのが残念です。川出麻須美の歌で最も頻繁に出て来る素材は「海」です。先の引用文にも「自然に対する一如の感」とありましたが、「海」こそは彼の波立ちさわぐ内界のこよなき象徴であつたのです。今、その数首を抜き出して味はつてみませう。

いめのごと見やる眼まなこに海原うねりのうねりやまずもちからにみちて

「いめ」は「夢」です。「海原のうねり」「ちから」、それは二十五歳の青年のいのちそのものであつたのです。

鳴りどよむ陸くがにとされるこの海はふかくもだせり天あめをひたして

「品川 of 海べに立ちて」といふ連作の一首です。「鳴りどよむ陸くが」とは、喧騒をきはめた都市東京の人間のいとなみです。そのすぐとなり、空を映して深く沈黙した海があるといふので

す。
足もとにひらくおほなだ鳴りひびき月ただよへりけぶれる空に

「太平洋」といふ連作中の一首です。「おほなだ」は「大海」です。底ごもる海鳴り、潮けむりに煙つた月、自然の持つ巨きな暗い力がひしひしと迫るやうです。こんな悽愴な歌とともに、彼の繊細な情感を示す次のやうな一首があります。麻須美の歌の中では忘れがたい一首です。

羽根をれてつちにおつとも生けるまは光れはたるこあめのまにまに

「故郷のゆふべ」といふ連作中の一首です。夕方散歩してみると突然風が吹き、音を立てて

夕立がふつて来る。「ほたるこ」は「螢子」です。風雨に打たれて土に落ちてもなほ光りつづけ
てゐる螢よ、生きてある間は天命のままに光りつづけよといふ意味です。螢を通して生きとし
生けるものの「生の意志」を歌つてゐるのです。

明治篇中の「航海」といふ二十四首の連作は、明治四十二年に作られたものですが、明治三
十九年、七高を卒業して、海路鹿児島から神戸へ帰つたときのことを回想して作られたもので
す。私小説的な詮索は抜きにして、それはまさに「恋」と「海」を主旋律にしたシンフォニー
といふ気がします。いくつかを抜き書きしておきます。

- (1) あま雲をもる日かそけく碇いかりまく音かなしもよ別れゆく身は
- (2) 港いもべに妹は来ねどもいづべゆか見つ、あるらむ出でゆく船を
- (3) 火を噴かきし昔ゆめむか開聞かきんのみ岳たけもだせりゆふべの空に
- (4) 佐多さたの門とに船ちかづけばおほなだの俄にはかにかたぶき疾と吹くあま風
- (5) 海角かじかくにかゞやくともしあな悲しゆらぎだにせず荒海にむかひて
- (6) 速吸はやすひの迫門せとをめぐれば妹がゐる筑紫の山はうすれゆくはや
- (7) こき水をゆたに湛たへてとこしへにゆらめく海よわれは泣かゆも

彼は意識して古語の生命力を駆使しました。(2)の「いづべゆか」は「どこからか」の意味です。(4)は激浪で船が傾いたため、海面全体が傾いて落ちか、つて来るやうな感じを歌つてゐます。(5)の「海角」は「岬」^{みさき}の意味です。それにしても(3)の夕暮の空に沈黙して聳^{そび}えてゐる開聞岳、(7)の永久に波うつ豊かな海、どれも、深層心理学者のいふ「神話的」風景です。どうか黙読せず、声を出して詠じて下さい。そこには『古事記』や、ホイットマンの世界にかよふ、雄々しく豊かな生命のリズムが、ことばの韻律と相呼応して、改めて短歌の可能性の大きさを実感させることでせう。さういへば、昭和初年のころに次のやうな歌があります。

あめりかよろしやの力とり統^すべて立ちあがる日本の神を信ぜむ

フロンティア精神とスラブの魂を統一する日本の「神」、今こそその確信が必要でせう。

(『祖國と青年』昭和六十一年六月号)

牛飼の歌 — 伊藤左千夫

わが陋屋の床の間には、ここ数年、万葉仮名で書かれた伊藤左千夫の拓本が、春夏秋冬を通じてひっそりと懸つてゐます。それは彼が明治四十二年八月の終りに、信濃たてしな蓼科高原に遊んだときの連作中の左の一首です。

さびしさの極みに堪へて天地あめつちに寄する命をつくづくと思ふ

このとき彼は四十六歳、五十歳で死んだ彼にとつては既に晩年でした。信濃高原に立つて、蓼科山を中心に、花畑、空、星、虫の音などを織りませた連作ですが、彼にはこの土地が、つひのすみかのやうにしたはしかつたやうです。必ずしも平坦ではなかつた人生行路をふりかへり、今の自分を省みたとき、ひしひしと寂寥感が迫つて来る。それが「さびしさの極み」といふ言葉に表現されてゐます。さういふ感情の極点に立つて、大自然に寄りすがつて生かされてゐる、自分のいのちの姿を凝視してゐるのです。左千夫は根岸派の中では、主情的な傾向の強

い歌人で、さういふ彼の特色は、「叫びの説」、つまり歌は感情の直接表現だといふ考へにもよく現はれてゐます。しかし、この歌は決して若い日の感傷ではありません。人生そのものの寂寥相の表現であつて、この拓本が島木赤彦の書である理由がよく分ります。

明治維新の四年前に生れた左千夫が、子規に入門したのは明治三十三年、左千夫三十七歳、子規三十四歳でした。左千夫の家業は牛乳搾取業で、入門当時はやうやく事業も軌道に乗つた頃でした。子規が終生「書生」であつたのとは対照的に、左千夫は一日十八時間労働といふ生活人でした。さういふ左千夫が、年下の子規に師弟の礼を尽したといふのは、余人の企て及ばぬことでせう。左千夫歌集の冒頭の歌は、子規による開眼の喜びと自負を伝へてくれます。

牛飼が歌よむ時に世のなかの新しき歌大いにおこる

左千夫の子規景仰は、無条件で信仰に近いものでした。それがやゝもすると、自らを唯一の継承者とし、子規を独占するといふ形にもなりました。子規が死んだのは明治三十五年九月十九日でしたが、彼は忌日ごとに壁に遺墨を懸け、茶を立てて師の霊を慰めました。

み墓びのみぎ手に咲ける秋草の野菊の花はちらずありこそ

「百日忌」の歌ですが、何の奇もない一首の中に、亡き先師への思ひがこもつてゐます。「ちらずありこそ」は、「散らないでほしい」といふ意味です。

子規の門に入つてから、当然左千夫は師の主張する「写生」の技法を身につけてゆきます。身辺の自然を詠んで、細かい観察が行き届いてゐるものを二三挙げておきます。

春さめのふた日ふりしき背戸畑せとばたのねぎの青銚あをほこな並み立ちにけり（明治三十三年）

咲きなづむ冬のぼたんの玉蓄たまつぼみいろみえてより六日経へにけり（明治三十四年）

裏戸出でて見る物もなし寒々と曇る日傾く枯葦の上に（明治四十四年）

一首目の、春雨にうるほつて伸びたねぎを、「青銚」と表現したのは、ねぎの姿をよく見たところから出てゐます。二首目は、咲きさうでなか／＼咲かない冬のぼたんの蓄が、仄ほかに色づき始めてから「六日」経つたといふ意味です。漠然と気分を詠んだのではなく、正確に詠まれてゐて、子規の影響が歴然としてゐます。三首目は「冬のくもり」といふ連作の一首です。字余りですが気になりません。

明治三十七年、左千夫四十一歳のとき日露戦争が起ります。戦雲急を上げる頃、彼は「起て

日本男児」といふ二十一首の激烈な征露の歌を作りますが、その長い詞書の中には「正に眼前に迫れる活劇を想へば吾等一介の文士と雖も猶神飛び肉躍る」と記してゐます。二月四日開戦。左千夫の「開戦之歌」。

焼太刀の鋭刃の明けき名に負へる日の本つ国民こぞり立つ

国こぞり心ひとつとふるひたつ軍の前に火も水もなし

一首目「焼太刀の鋭刃の」は「明けき」をひき出す「序詞」といふ技巧ですが、単なる形式的な字句ではなく、焼き上げた日本刀の鋭い刃のやうに清らかな、といふ意味を持つてゐます。古来清明を以て聞えた日本民族が、今や心一つに立ち上つたといふ意味です。二首目は、説明の必要もないでせう。日露戦争に言及する教科書は何故「君死に給ふこと勿れ」にだけ固執するのでせう。

この左千夫の二首を読んで、私は旧制高校時代の恩師が経験された、二月四日夜の回顧談を思ひ出しました。恩師は新潟県の町役場の書記であつた伯父の宅に下宿して、中学校の学年末試験の準備をしてをられました。ラジオもテレビもない当時、開戦の報は電報で各地の役場に伝へられたのです。

《降雪の夜は特に四辺静寂なり。夜半とおぼしき時、戸を叩く音す。「スハ」とランプ片手に玄関に出で、土間におりたち、戸を開くれば、雪だるまの如き蓑笠の顔見知りの役場の小使、ころがるが如く入り来る。吾一語「来タカ」彼一語「来マシタ」》

国民全体が、張りつめた糸のやうに緊張してゐた一瞬が、経験者の筆によつて見事に活写されてゐるではありませんか。客観状勢は当時とは一変しましたが、国民を支へる情意の緊張が、今日ほど弛緩し尽した時代は前代未聞といふべきでせう。

筆が思はず横に逸れてしまひましたが、左千夫のこの二首などは、当時の時代の証言であり、国民の大部分の意志の表現でもあつたのです。

左千夫には明治四十二年に「九十九里浜に遊びて」といふ七首の連作があり、近代の万葉調短歌の絶唱の一つといはれてゐますが、もはや紙数も尽きました。四男九女といふ子どもたちを抱へて、彼の生涯は悪戦苦闘のあけくれでした。「小天地」といふ連作の最後の一首をあげます。「しが父」は「その父」の意です。

いとけなき児等の睦むつびやしが父の貧しきも知らず声樂しかり

死にたまふ母——斎藤茂吉

前号で左千夫の歌を挙げましたので、順序として今回は茂吉をとりあげます。斎藤茂吉は、伝統的な短歌の形式に近代の思想と感情を盛り得るか否かといふ大問題に應へて、短歌の新生をもたらした人といはれてゐます。彼は一高生のとき子規の『竹の里歌』を読み、深く感動して、明治三十九年左千夫に入門します。四十一年『アララギ』創刊以後、ほぼ半世紀に涉つて、実作、理論の両面で終始歌壇をリードしました。彼の写生説は、評家も言ふやうに「その説の実質が暗黙のうちに歌壇一般に公認せられた」といふわけです。

子規の「写生」は下村為山、中村不折等の洋画家の影響下に形成され、「スケッチ」の原義に近く、ものの外形を印象鮮明に描き出す手法でした。しかし、左千夫を経て茂吉に至ると、「写生」の概念に少しづつ変化があらはれて来ます。左千夫との決定的な対立が鮮明になるのは明治四十四年で、茂吉は短歌の本質を「いのちのあらはれ」とか「内部急迫」とかいふ言葉で表はすやうになります。さういふ傾向の到達点が「源実朝雑記」（大正元・九）で、「自然を写生するのは、即ち自己の生を写すのである」といふ注目すべき言及になります。その後、彼の写

生説は、次第に精緻な理論化の道を辿り、「写生といふ事」（大正八・一）に於ては、「写生とは実相観入に縁つて生を写すの謂である」といふ有名な規定になり、更にそれらの集大成である「短歌に於ける写生の説」（大正一〇・一）に於ては「実相に観入して、自然、自己、一元の生を写す。これが短歌上の写生である」といふ結論に到ります。「写生」の語は、子規の時代に比して著しく観念的になつたと言ふべきでせう。

さて、彼の処女歌集『赤光』は大正二年に刊行され、文字通り一世を聳動させたものでした。その書名は著者自身が初版本の跋で述べてゐるやうに、経典からとられた言葉ですが、それは茂吉自身の青春の火照りと心熱の色をあますところなく象徴するものでありました。特に大正二年の「おひろ」四十四首、「死にたまふ母」五十九首は、近代短歌における相聞と挽歌の最高の達成といはれてをります。こゝでは後者に絞つて鑑賞したいと思ひます。

大正二年五月二十三日、生母守谷いくが没し、彼は郷里山形県南村山郡金瓶村（現上山市）に十六日から三十日まで滞在します。この長大な連作は、危篤の報を聞いて急遽駆けつける十首（その一）、臨終をみとる十四首（その二）、母のなきがらを火葬にする十四首（その三）、死後、疲れを休める山のいで湯における感懐二十首（その四）の四部から成つてゐます。この年彼は三十二歳、医科大学助手として、精神病学の研究の若き学徒でもありました。

みちのくの母のいのちを一目見ん一目見んとぞただにいそげる
吾妻あづまやまに雪かがやけばみちのくの我が母の国に汽車入りにけり
朝さむみ桑の木の葉に霜ふりて母にちかづく汽車走るなり

(其の一)

母の死が予測される状況の中で、彼を迎へるみちのくの山には、五月半ばといふのに、まだ残雪が光り、霜が降りてゐたのでせう。

はるばると薬をもちて来しわれを目守りたまへりわれは子なれば
寄り添へる吾を目守りて言ひたまふ何かいひたまわれは子なれば
死に近き母に添寝そひねのしんしんと遠田とほだのかはづ天てんに聞ゆる
桑の香の青くただよふ朝明あさあけに堪へがたければ母呼びにけり
我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まし乳足らひし母よ
のど赤き玄鳥つばくらめふたつ屋梁はりにゐて足乳根たらちねの母は死にたまふなり
いのちある人あつまりて我が母のいのち死行くを見たり死ゆくを

(其の二)

母とはわれにいのちを給ひし人なのです。漱石の晩年の漢詩の言葉を以てすれば、「命根」と

言つてもいゝでせう。命の根源なる人です。その人のいのちが今消えようとしてゐるのです。第三首に三井甲之の影響がうかがへることについては、五月号で述べましたが、この歌は全体として大変莊嚴な感じを与へます。しかし、よく注意して讀むと、「しんしんと」といふ茂吉の擬声語の意味するところは、必ずしも明瞭ではありません。われわれは「しんしんと夜が更ける」といふ意味と、「しんしんと聞える」といふ意味をダブルさせてこの歌を理解すればよいでせう。この数首の中で、最も感情が激しく表現されてゐるのは第五首目です。「よ」といふ感動詞を三つ使つて、ほとんど絶叫に近い表現です。特に下の句は、七・七といふ調子ではなく、我々を生まれ（五音）、乳足らひし母よ（八音）といふ破調になつてゐます。「乳足らひし」とは作者の造語ですが、乳のたつぷりあるといふ意味です。第六首目の「のど赤き玄鳥」は、釈迦の臨終の枕辺で、象も蛇も泣いたといふ伝説を思ひ起させます。

わが母を焼かねばならぬ火を持ってり天つ空には見るものもなし
星のゐる夜ぞらのもとに赤々とははその母は燃えゆきにけり
さ夜ふかく母を葬りの火を見ればただ赤くもぞ燃えにけるかも
はふり火を守りこよひは更けにけり今夜の天のいつくしきかも
どくだみも薊の花も焼けるたり人葬所の天明けぬれば

(其の三)

現代の「死」は極めて事務的に処理されます。電気と重油が遺体を骨にするまで、あつけないくらゐ短時間です。昔は幸だつたといふべきでせうか。「稲田のあひだの凹処を石垣を以て囲ひ、棺を薪と藁で蔽うてさうして焼くのである」(「作歌四十年」)。抄出した二首目の「ははそはの」は「母」の枕詞です。赤々と燃えゆく母を、肉親がじつと見守りながら夜を徹してとはの別れをするのでせう。人間のいのちの有限さと、夜空の永遠さが今更のやうに鮮やかなコントラストをつきつけるのです。四首目の「いつくしき」といふのは厳肅といふ意味です。大歌人茂吉にも、観念思弁的な多くの駄作があります。しかしこの連作の感動は、やはり彼自身の「^{ドン}衝迫」の強さによるのでせう。茂吉には《あが母の吾を^あ生ましけむうらわかきかなしき力おもはざらめや》といふ絶唱のあることを附記しておきます。

(『祖國と青年』昭和六十一年八月号)

鍼の如く——長塚節

長塚節^{ながし}は明治十二年（一八七九）、茨城県の豪農の家に生れ、大正四年（一九一五）二月、九大病院で三十七歳の生涯を閉ぢました。彼は水戸中学に首席で入学するほどの秀才でしたが、神経衰弱のために中途退学をしました。「歌よみに与ふる書」を読んで感動し、明治三十三年子規に入門、師の「写生」の精神を最も忠実に継承、実践した弟子であつたと言へませう。子規晩年二年余りの師弟関係でしたが、それは彼の歌風を決定した運命的なものだつたと思はれます。師の訃報が届いたとき、彼は丁度栗を拾つてゐたのですが、次のやうに詠んでゐます。

ささぐべき栗のここだも搔きあつめ吾はせしかど人ぞゐまさぬ

「ここだ」は「沢山」といふ意味です。先生に差し上げようと栗を沢山拾ひあつめたのに、捧ぐべき人はゐないといふ意味です。初七日に子規の墓に参つた帰途、寺の裏の蜀黍^{しよくしよ}が風に鳴つてゐるのを聞いての歌。

吾が心いたも悲しもとずりの黍きびの秋風やむ時なしに

節は歌の「気品」「冴え」といふことをいつも言つてゐました。茂吉や赤彦が、子規の「写生」を拡大解釈して、いはゆる「乱調子」におち入つてゆくのを黙視できぬ思ひで眺めてゐたやうです。晩年茂吉への手紙の中で《死んだ伊藤君は感情はすべて調子によつて表はされると云つてゐたが、其道理の解つてゐる人が殆どない様だ。僕は千万言の議論よりも一首を構成して居る言葉に弾力のあるかないかを見るのが第一と思ふ。だがそんな人は少ない。それゆゑどの歌もどの歌も皆弛緩して居る。》と述べてゐます。傍点は仮りに私が施しましたが、短歌の本質を指摘した、時代を超えた的確な批判だと思はれます。節の代表作の一つといはれる、明治四十年の初秋の歌（連作十二首）の中に次の一首があります。

馬追虫うまおひの髭ひげのそよろに來る秋はまなこを閉ぢて想ひ見るべし

「そよろ」は、風が静かに吹く「そよそよ」から來たことばでせう。ひそかに天地に満ちて來る秋の気配を「馬追虫の髭」を幽かすかに動かす風のやうにと詠んだのです。奇を銜てらつた比喩で

はなく、写生の眼がとらへた表現ですから、しみじみと心に響いて来る、微妙な季節感を把^{とら}へ得たのでせう。

節は明治四十年代、一時関心が短歌から離れ、写生文や小説に熱中することになります。その代表的な作品が、明治四十三年東京朝日新聞に連載された有名な『土』です。朝日への連載の幹旋^{あつせん}をしたのは、勿論夏目漱石でした。漱石は明治四十五年『土』に就^つて」といふ序文を書いてゐます。《先祖以来茨城の結城郡に居を移した地方の豪族として、多数の小作人を使用する長塚君は、彼等の獸類に近き、恐るべく困憊を極めた生活状態を、一から十迄誠実に此『土』の中に収め尽したのである。》と述べてゐます。節は現実を凝視する能力を十分備へてゐましたが、歌の世界へさういふ人間の醜悪な葛藤を持ちこむことを、意識的に避けてゐたやうです。明治四十四年には「乗鞍を憶ふ」といふ十四首の連作があるだけですが、その中に次のやうなものがあります。

鴟^{しず}のこゑ透りてひびく秋の空にとがりて白き乗鞍を見し

ところが、明治四十四年十一月、節にとつて運命の転機ともいふべき重大な事件が起ります。それは彼の死病となつた喉頭結核の発病であり、「打ち棄ておかば余命は僅に一年を保つに過ぎ

ざるべし」といふ宣告でした。明治四十五年の病中雑詠には次の一首があります。

知らなくてありなむものを一夜ゆゑ心はいまは昨日にも似ず

知らなければそれまでであつたのに、宣告を受けて一夜あけたけふは、昨日とは全く違つた心になつてゐると、自分で自分の心を見つめてゐる歌でせう。当時彼には、黒田照子といふ婚約者がゐましたが、彼の発病によつて婚約は解消になります。照子の兄の黒田昌は医者でしたから、以後妹との交際の拒絶をして来たのは当然のこととせう。しかし、この「少女」は節の死まで約三年、便りに托して節への愛を支へ続けました。以後この病氣と愛と、憑かれたやうな旅が、晩年の三百数十首の大作「鍼の如く」のモチーフとなつてゆくのです。「鍼の如く」の冒頭の一首は、「僕の今の歌に対する考は先づかういふものかも知れない」といつて、茂吉に示したといはれてゐます。

白埴の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水くみにけり

「白埴の瓶」は「白い陶器の花瓶」、「霧ながら」は「霧とともに」の意味です。「冴え」の境

地を詠んだ典型でせう。たまたま入院中に一時家に帰つたときの次のやうな歌。

垂乳根たらちねの母が釣りたる青蚊帳あそがやをすがしといねつたるみたれども

大正三年六月、彼は九大病院の久保猪之吉博士（漱石の紹介、「いかづち会」の歌人）の治療を受けるために西下します。彼は病気の重圧と、照子への愛執を断ち切るやう、自らを流人のやうな境地に追ひ込んで行つたと思はれます。しかし、彼の歌境は益々深く清澄なものになつてゆきます。七月末の酷暑の夜、月見草のかげの虫の音を聞いて次のやうに詠んでゐます。

白銀しろがねの鍼打つごとききりぎりす幾夜はへなば涼しかるらむ

彼は八月中旬から九月下旬にかけて、重い病気を抱きながら、南九州の旅を続けます。九月十三日に次の歌があります。

とこしへに慰もる人もあらなくに枕に潮のおらぶ夜は憂し

大正四年二月八日逝去。遺骨と共に帰つた遺品のなかの手帳には、黒田照子の写真があつたといはれてゐます。

〔祖國と青年〕昭和六十一年九月号

酒と旅の詩人―若山牧水

今回は若山牧水の歌について述べようと思ひます。牧水は明治十八年（一八八五）、現在の日豊本線の日向市駅から西へ二〇キロほど入つた宮崎県の山村に生れました。家は祖父健海、父立蔵と続いた医家でした。母はマキ、気性の激しい人だつたやうですが、牧水は終生この母を愛したひ、ペンネームに「牧」の一字を入れたのも母の名にちなんでのことでした。明治四十一年、早大英文学科卒業、処女歌集『海の声』を出します。二十四歳でした。この年は近代短歌史において誠に象徴的な年でした。十月に『アララギ』の創刊があり、十一月に『明星』の廃刊があつたといふ事実の指摘だけでも充分でせう。彼の師の尾上柴舟は「明星」の主観主義を批判して、「叙景詩」の運動を推進した人だつた関係もあつて、彼自身「明星」歌風には批判的でした。雑誌『創作』の創刊号において「晶子といふ人間、唯一絶対の或一生命とは殆んど関係がない。極めて普遍的に遊離した雲のやうな歌が多い」と批判してゐます。彼はまた、当時やうやく力を蓄へつつあつた、「アララギ」の写実主義とも一線を画してゐました。いはば、生来の浪漫的資質が時代思潮としての自然主義と切り結んだところに、独特の「牧水調」の誕生

があつたといへるでせう。

『海の声』には、今でも国民に愛唱されるいくつかの絶唱がふくまれてゐますが、これらの歌の声調に一種哀切な悲哀の感情が流れてゐるのは、園田小枝子といふ一つ年上の女性との悲恋によるものだらうと、伝記作者たちは推定してゐます。いま、人口に膾炙かいしゃした三首を挙げておきます。

幾山河いくやまかは越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく

早稲田在学中、暑中休暇で帰省の途中、「中国をめぐりて」といふ十首の連作の中の一つです。牧水は終生旅を愛しましたが、二十三歳の彼には、既にさういふ宿命への予兆があつたのでせうか。彼の旅はレジャーではなく遍路でした。一種の求道でもありました。さういふ生涯の特徴がよく表はれてゐます。

日向ひうがの国都井の岬の青潮に入りゆく端はなに独り海見る

南九州の無医村に赴任してゐた父を訪ねての旅の中で作られた一首です。都井の岬が、日向

灘の真つ青な海中に突出してゐる、その尖端に坐して、若い牧水は何を考へたのでせうか。今、現地には歌碑が建てられてゐます。

白鳥しろとりはかなしからずや空の青海のあをにも染ますただよふ

前記、悲恋の渦中にあつたころ、安房で作られた一首です。「白鳥しろとり」はおそらく「鷗かもめ」のたぐひでせう。「白鳥はかなしからずや」といふ表現の裏には、牧水自身のかなしみが托されてゐます。真つ青な空と海とをバックにした「白鳥」は、青年の哀愁そのものの象徴でせう。かういふ抒情は、「明星」にも「アララギ」にもなかつた独自の世界の開拓でした。

「酒と旅の詩人」といはれるやうに、牧水は「酒」を詠んで無類の境地を開いた人ですが、明治四十三年の秋、信濃国浅間山麓で詠んだ連作の中に次の一首があります。

白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり

くだくだしい説明の要はありませんが、日本の酒をうたつて、これほどしみじみとした感慨を誘ふ歌はありません。「牧水歌話」に「心は絶対に純潔に持て。若しよごれてゐたらば、何は

おいても純潔の心を張り、強め、さうしてそのまま歌へ」とありますが、これが歌ひとすぢにかけた彼の初心でもあつたのでせう。

大正元年秋、彼は父危篤の報を受けて故郷に帰ります。母も、三人の姉も、東京でうたよみといふ「虚業」に従事してゐる牧水に、帰郷して仕事につくことを強く要求します。彼は病み呆けた父と、気性のはげしい母と姉たちの間に立つて、「生活か芸術か」といふ二者択一の苦悩に輾転てんてん反側の日々を過します。その苦悩のドキュメントが『みなかみ』といふ歌集に結晶します。その歌集の中の「故郷」といふ連作の冒頭に次の一首があります。

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋もかすみのたなびきて居をり

秋は大気が澄み、山肌がくつきりと鮮明に見える筈なのに、あたかも詩人の心の憂愁のかけのやうに、かすみがたなびいてゐるといふ意味でせう。牧水にとつて故郷はなつかしく、またかなしいものでした。「姉はみな母に似たりきわれひとり父に似たるもなにかいたまし」といふ歌もあります。「みなかみ」とは「水源」の意味で、彼の故郷が坪谷川の上流にあつたことから命名でせう。牧水の「水」は恐らく彼の幼年期のいのちをはぐくんだこの川から来たのだと思はれます。この歌集を起点として、彼は大正期を通じて九冊の歌集を出します。大正といふ

時代は、牧水が歌人として成熟して行つた時代で、「山桜の歌」（大正十二年）は「円熟の極点」
「牧水調の完成」といはれてゐます。それだけ、彼は大正といふ時代に対して、大きな感謝の
念を持つてゐたやうです。大正十五年十二月二十五日、大正天皇崩御の日、彼は七首の「奉
水の歌」を作ります。今その中の四首を抄出します。

おん病あつく永びきおはしましき今は終りとならせたまひぬ

御身弱くましませしかば国民の我等がうれひ常にとけずありき

とけざりし我等が憂ひあはれつひにけふのなげきとなりにけるかも

うつし世にをろがみまつる稀なりしわが大君は神去りましぬ

詞書に「十二月二十五日早晚終に崩御の報を聞く、かなしみうたへる歌」と書いてゐる通り、
これは通常の儀礼のうたではありません。薄命であられた陛下に対する心からの哀悼のうたで
す。彼の死はその二年後でした。

牧水の歌が多くの人に愛される理由を「まさしくこの人生において、じゆんすいにその本性
を遂げ得たものに対する欣羨と敬重のこころによる」とは土岐哀果の言葉ですが、さすがに旧
知の言といふべきでせう。

（『祖國と青年』昭和六十一年十月号）

短
歌
随
想

(平成四年～七年)

「相聞」——いのちの呼びかけに和へる歌

八世紀後半に成立した万葉集の歌の分類は、基本的には雑歌、相聞、挽歌の三つだと思はれます。このうちの「相聞」は、真淵始め諸家「恋の歌といふべし」との説をとる人が多いのですが、山田孝雄博士は、多くの文献を引用考証して「往来消息の文」とされました。それ故、相聞歌とは古今集以後の恋歌とは異なり、語の原義に即して言へば、近親、知人間に贈答された歌と規定することができるでせう。ただ古今集以後になると歌の贈答は主として男女間の儀礼となり、次第に「相聞」の中に「恋」の意味が浸透して行つたのではないかと推定されます。事実、「相聞」即「恋」と考へられるほど、万葉集中の相聞歌には恋の歌が多いのです。たゞ前述のやうに、相聞歌の原型は「呼ぶ歌」に対して必ず「応へる歌」があります。そこには、表現を通じて心を通はせ合ふこと、二つの生命、二つの表現が相合して、そこに一つの全一な小宇宙が形成されるといふ意味で、短歌の最も大切な心の交流といふ機能が存分に發揮される世界だと言へるでせう。以下典型的な相聞歌の二三をあげて説明することにしませう。

一つは万葉集卷二に出て来る、大津皇子と石川郎女の問答歌です。大津皇子は天武天皇の皇

子ですが、天皇崩御の直後、謀反むほんの罪を以て訳語田おきだの舎いへに死を賜はつた方です。その悲劇的生涯の意味については、つとに憂国の国文学者蓮田善明（昭20・8・19自死）が「青春の詩宗」として論じ、若き日の三島由紀夫の心に終生消えざる印象を刻みつけたことは、文学史上の余りに有名な事実です。石川郎女は、恐らく天武朝に仕へた宮女の一人だつたのでせう。

大津皇子、石川郎女に贈れる御歌一首

あしびきの山の雫しづくに妹待いもつと吾立ちぬれぬ山の雫に

石川郎女、和なごへ奉れる歌一首

吾あを待つと君がぬれけむあしびきの山の雫にならましものを

「あしびきの」が「山」にかゝる枕詞まくらごしであることを知れば、歌意は説明するまでもなく明白でせう。表面的に見れば、答歌は贈歌の字句を踏襲し、言葉の端きぼうを興きようをつないだだけのものと、簡単に片づけられるかも知れません。しかし、これは単に表現技巧だけの問題ではなく、もつと「和歌」の本質にかゝはつて来る問題を含んでゐるのではないでせうか。答歌の作者が、贈歌の表現をそのまま頂いたといふことは、相手の中に自分を見出したといふことでせう。真実の心身を捧げた信頼がさうさせるのでせう。意識して相手の表現を踏んだといふことは、実は

万幅の愛情の告白なのです。ある人は自主性の欠如と言ひ、媚態の表現と貶するかも知れません。しかし、この場合は、自己を表面に露出させる代りに、相手の表現の中に自己を没して、二人で一つの世界を作つて行くといふ、無比な、不可思議な創造が行はれるのです。歌の贈答が形式化する以前の、この表現の美しさは無類です。古代国家成立の激動の中で、二十四歳で夭折された皇子の生涯を背景にこの歌を読むと、水が砂にしみてゆくやうなしみじみとした安らぎを感じさせられます。因みに「大津皇子被死つみなはえ給ひし時、磐余いはれの池の陂つみにて涕なみだを流して御作ま歌一首」といふ詞書を持つた皇子の辞世は、惻々と胸に迫る集中の絶唱の一つです。

百伝もつたふ磐余いはれの池に鳴く鴨かもを今日のみ見てや雲隠りくもかくなむ

もう一つ典型的な相聞歌をあげてみます。卷十五冒頭の遣新羅使けんしらし（朝鮮への使節）一行によつて詠まれた贈答歌の中の一部です。

君が行く海辺の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ

秋さらば相見むものを何しかも霧に立つべく嘆きしまさむ

海路の旅が想像以上の危険を伴つたものといふ前提がなければ、この歌の緊張した美しさは分りません。前の歌は留守を守り、別離の嘆きを訴へる妻の歌であり、後の歌は、その表現を踏んで「秋まで！」とその訴へをなくさめる夫の歌です。「霧」は古来「なげき」（語原的には「なが息」のつづまつたもの）のしるしとして使はれて来ました。「嘆きしまさむ」の「し」は強意の助詞、「まさむ」の「ます」は敬語です。秋がくれば再開できようものを、どうして霧に立つほどに嘆き給ふのか、といふ意味でせう。これから「短歌」に関して雑感を綴つてゆくつもりですが、短歌の原点は、対象が他者にしろ、自然にしろ、そのいのちの呼びかけに対して「和へる」点にあることを確認してほしいのです。

「神島の相聞歌」をめぐつて

今回は「相聞歌」の意味を考へてみました。それは「恋の歌」といふよりも、もつと広い、人と人が心を通はせ合ふといふ意味を含み、短歌といふ表現形式の基本的な機能だと述べました。今回は具体的に、その美しい例をあげてみたいと思ひます。昭和三十七年、昭和天皇六十二歳の御時、和歌山県に旅をされたときの次の御製ぎよせいがあります。

紀州白浜の宿

雨にけふる神島を見て紀伊きいの国の生みし南方熊楠みなかたくまやすをおもふ

昭和天皇の数多くの御製の中には、湯川博士のノーベル賞受賞の折の二首のやうに、名前を詠みこまれたものがないわけではありませんが、この御製のやうに、フル・ネームが詠みこまれたものは珍らしいのではないでせうか。それに「南方熊楠」といふ字面じづらもひびきも何となく異様な、呪術じゆじゆつ的な感じがします。

明治といふ時代は、途方もなく器の大きい巨人を生んだ時代でした。熊楠も恐らく岡倉天心や柳田国男と並んで、文化上の巨人と呼ぶにふさはしい博物学者でした。慶応三年（一八六七）に生まれ、昭和十六年（一九四一）に七十五歳で没しました。東京大学予備門を中退して渡米し、独学で植物学の研究を続け、やがてロンドンに行き、世界で最も水準の高い科学雑誌『ネイチャー』にたびたび論文を寄稿しました。彼の研究の中心は「粘菌学」でしたが、粘菌は植物であるのに運動能力があるため、「生命の原始」と呼んでゐたさうです。御製の中の「神島」は、和歌山の南、田辺湾に浮ぶ小島で、驚くほど完璧にその生態系が保存されてゐるさうです。その保存のため、一時はいのちを賭けた戦ひをしたのが南方熊楠だつたわけです。

明治三十九年（一九〇六）、いはゆる神社合祀令ごうしりが出されます。これは内務省が中心となつて、一町村一社を基準に神社の併合整理を推進する政策でした。神社をつぶすといふことは、鎮守の森の濫伐らんぱつ、壊滅を意味します。それは自然破壊であるばかりでなく、民間伝承や習俗の壊滅を伴ふわけですから、民俗学の樹立に腐心してゐた柳田国男が側面から熊楠の反対運動に協力したことも当然です。その努力の甲斐があつて、大正九年（一九二〇）合祀令は無効決議がなされたのです。神島の自然は熊楠によつて守られたのです。この御製の背景にはさういふ歴史がありました。

たまたま新聞（朝日・平成四年八月十二日夕刊）を読んでみましたら、『南方熊楠』の著者、

鶴見和子氏の「昭和天皇と心の交流——神島の『相聞歌』」といふ短いエッセイがあり、深い感銘を受けました。昭和四年、昭和天皇二十九歳の御時でしたが、六月一日神島近くに碇泊してゐたお召し艦長門ながとの艦上で、熊楠は南紀の植物や粘菌について、御進講申し上げる機会を得ました。その時粘菌をキャラメルキャラメルの箱に入れて昭和天皇に贈つたほほゑましいエピソードは有名です。当事熊楠は六十三歳でした。翌六月二日、天皇は神島に行かれて、つぶさに天然のままに残された自然を観察されました。生物学者としての若き昭和天皇は、その時の印象を永く心に留められたのでせう。鶴見氏の文からの引用になりますが、熊楠は「この島にて小生のため脱帽遊ばされ候ことまことに恐懼きょうくの至り」と記してゐるさうです。その感激を彼は歌に詠み、友人たちの醸金きざしによつて歌碑を建てました。刻まれた文字は本人の書ですが、「昭和四年六月一日／至尊登臨之聖蹟」といふ前書きの後に次のやうな歌があります。

一枝も心して吹け沖つ風わが天皇すめらぎのめでましし森ぞ

この島の樹々の一枝もそこなはないやうに、沖つ風よ、注意して吹いてくれよ。この島の森は天皇様がこよなくいとしまれた森であるぞ、といふ意味でせう。何といふ、まごころのこもつた歌でせう。昭和天皇は恐らく、この歌を知つてをられたに違ひないのです。鶴見氏は「わ

たしは、神島をめぐって白い波頭の立つのを見て、この二つの歌を想いかべた。そして、これは三十三年の年月をへだてた相聞歌ではなかつたか、と思ひいたつたのである」と述べてゐます。まさしく、その通りでせう。この二首の歌を並べて見れば、それは君臣唱和であり、また昭和天皇の、南方熊楠への鎮魂歌でもあつたのでせう。何の奇もない御製にこもる、無量の思ひを味はつて頂きたいと思ひます。学問は常に普遍性を志向します。しかし、そのことと天皇敬仰の赤心とは少しも矛盾したものではありません。思へば、南方熊楠の生れた慶応三年は、漱石の生れた年でもありました。明治といふ時代の国民的活力の源泉はどこにあつたか、もう一度この「相聞」を静かに読んで下さい。

三島由紀夫の辞世二首

十一月二十五日、今年もまた二十二年目の憂国忌ゆうこくきを迎へようとしてみます。どんな衝撃的な事件でも、時間の風化作用に抗することはむづかしく、いつか忘却わんたくの彼方かなたへ押し流されてしまふものですが、三島事件のつきつけた問題は、今日ますますその予言性を鮮明にしてをります。事件当日の印象を一人の評家は、「十一月二十五日に日本全土を襲った衝撃は、たえて忘れられていた終戦の日の『沈黙』をひとりの作家が国民全体に語りかけたかった倫理的な意志ではなかつたろうか」と述べてゐましたが、筆者も同感です。「これ（事件）を全的に感じようとする」と、言葉を失つて了しまふ」と小林秀雄氏も述べてをられました。さういふ思ひを詠んだ、無名の一人の女性の歌を一首あげてみませう。

霜月の蒼穹そら晴れるたり悲しくて三島・三島とわれは呼ぶなり

特定のイデオロギーや先入観なしに、あの壮絶な行為に直面した者は、皆かういふ言ひ難い

思ひにとらはれたものでした。ところで、三島事件に関する文書には、当日市ヶ谷の東部方面総監部のバルコニーからまかれた「檄」、益田総監につきつけた六ヶ条の「要求書」、楯の会の小賀正義に宛てた「命令書」及び「辞世」の四種があります。周知のやうに三島氏は古武士の死の儀式通り、割腹といふ形をとり、二首の辞世を残して死にました。おびただしい三島論が書かれてゐるにもかかはらず、正面から氏の残した辞世を論じたものを知りません。これは「ことば」に生命を賭けてゐた死者への礼にもとるのではないでせうか。

辞世には発想の型があるのは当然ですが、その人が文人であれば、歌についての平素の教養が色濃く投影されるのは、これもまた当然のこととせう。筆者などは、子規の「歌よみに与ふる書」の「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候」を無条件に受け入れて、さういふ価値基準で歌をみて来ました。しかし、三島氏は和歌の極北は『古今集』にあるといふ確乎とした詩学を持つてゐました。昭和四十二年三月『広島大学国文学攷』に書かれた「古今集と新古今集」は、さういふ氏の短歌観の凝縮された一文ですが、要するに「みやび」とは秩序なのであつて、その秩序を破るやうな放恣な情念は抑制されるべきだといふのが、その骨子です。氏の辞世にはさういふ考へがよく出てをります。

益荒男がたばさむ太刀の鞘鳴りに幾とせ耐へて今日の初霜

散るをいとふ世にも人にもさきがけて散るこそ花と吹く小夜嵐さよあらし

多少説明を加へておきますと第一首目の「たばさむ」は「手挟む」で、手にはさみ持つといふ意味、「太刀の鞘鳴り」の「太刀」は三島氏が愛用した銘刀「関の孫六」でせう。「鞘鳴り」とは、刀身が鞘から抜けようとして鳴ることです。一首全体の意味は、ますらをたる私が手に握りしめてゐる太刀の刀身は、今にも鞘から躍り出ようとして鳴つてゐる。決起へのうながしにも似たその鞘鳴りの音に、いくとせ耐へたことであらう。今やその時は来た。今朝の初霜を踏んで、私はいま「死」への途に出発するといふ意味でせう。この一首は檄文の中の「われわれは四年待つた。最後の一年は熱烈に待つた。もう待てぬ。自ら冒瀆する者を待つわけには行かぬ」と呼応する心情でせう。辞世に「太刀」が詠まれてゐる点では、『古事記』の倭建命やまとたけるのみことの御辞世「をとめの床の辺にわがおきしつるぎの大刀その大刀はや」が、自然に思ひ浮かべられます。

第二首は「散るこそ花」といふ三島氏の晩年の美学の表現です。「武」とは花と散ることであり、「文」とは不朽の花を育てることだといふコメントも別にあります。さういふ抽象的「思想」の表現であり、「小夜嵐」と名詞止めになつてゐるところに、動きに欠け、韻律上据りが悪い感じがありますが、入江隆則氏は、この一首に「清浄さへの意志」を読みとつてゐます。死者の心

情に即しながら、一首の意味を辿りますと、世人は散るといふことをひたすら厭いとふのだが、さういふ世の常にさからつて、さきがけて散つてこそ花の美しさも輝くのだと叱咤しつたするやうに、夜嵐が吹きつるといふ意味でせう。辞世に「太刀」と「花」が詠まれてゐること、しかも「散る花」に焦点が置かれてゐることに注意すべきでせう。戦争中は戦死することを「散華さんげ」と言ひ、戦後永くこの言葉はタブー視されて来ました。この才能の過剰に苦しんだ一個の天才の、最後の一語が「天皇陛下萬歳」の肉声であつたことを思ふと、氏が訴へようとした究極のものは何であつたか、自ら明らかです。

（『祖國と青年』平成四年十一月号）

真珠湾の若桜

昭和十六年（一九四一）十二月八日、大東亜戦争勃発。当日は月曜日。午前七時の臨時ニューズは、「帝国陸海軍ハ本八日未明、西太平洋ニ於テ米英軍ト戦闘状態ニ入レリ」と大本営発表を繰り返し流しました。戦争の解釈権は、勝者の管理に委ねられるのは、古今の鉄則ですが、日本の場合も、既に戦後半世紀近く経つてゐるにもかかはらず、未だに東京裁判史観の強い呪縛（じゆばく）の中にあります。しかし、当日を経験した者にとつて、過去を自嘲的（じちやうてき）に裁く姿勢には、ノーと答へざるを得ません。多くの短歌が「真実」を証言してくれる筈です。

戦争は、日本時間で当日午前三時二十五分（現地時間七日午前七時五十五分）、機動部隊の空母から発進した戦爆連合の三五〇機と先遣部隊（せんけん）に所属する五隻の特殊潜航艇による真珠湾奇襲によつて開始されました。この攻撃によつて、アメリカ太平洋艦隊は壊滅したことは周知の通りです。国民は戦果発表の中で、初めて「特殊潜航艇による特別攻撃隊」といふものの存在を知りました。それは、伊号潜水艦に搭載された二人乗りの潜航艇で、防潜網や機雷原を突破して、真珠湾口に突入し、魚雷攻撃を行ふといふ、殆んど生還を期し難い捨身の戦法でした。乗

員はすべて尉官級の二十代半ばの若者たちでした。国民はこの厳肅な事実の前に改めて襟を正したのです。五隻の特殊潜航艇は再び還つて来ませんでした。戦死が確認された九人は、九軍神として讃へられました。(たゞ、乗員の一人、酒巻和男少尉は、漂流中捕虜になりました。この人の戦中、戦後も悲劇的だつたと言はざるを得ません。)その軍神の一人、古野繁実中尉(後、二階級特進少佐)の遺歌です。

君のため何か惜しまむ若桜散つて甲斐ある命なりせば

いざゆかむ網も機雷も乗り越えて撃ちて真珠の玉と砕けむ

第一首目の「命なりせば」の「せ」は過去の助動詞の「き」の未然形ですから、「もし…ならば」と強い仮定の意味ですが、こゝでは「命だから」といふ意味です。文法的な誤用を全く感じさせません。みづからを「若桜」にたとへる凜然たる自負、開戦の日の緊張し切つた気分を、全国民に代つて歌ひ上げた象徴的一首といふ気がします。「君」とは勿論「天皇」の意味です。第二首目の「真珠の玉」の「真珠」には、真珠湾の意味もこめられています。逸り立つ奔馬に鞭打つて、まつしぐらに敵陣に乗り込んでゆく若武者の姿が彷彿とするやうです。当時古野中尉は二十五歳でした。その年の若さが人々の心を打ちました。「アララギ」の投稿歌の一首で

す。

還らざる九人の面影に付つされたる年齢よはひはあまりに若くかなしき

新聞の遺影につけられた年令の若さに思ひを馳はせてゐるのです。当時彼らの上官であつた連合艦隊司令長官山本いそら五十六は、次のやうな追悼の歌を詠んでゐます。

益ます良雄らをのゆくどふ道をゆききはめわが若人らつひにかへらず
比たひなき勲いさををたてし若人は永久とほにかへらずわが胸痛む

死地に部下をやらざるを得なかつた上官の思ひが、「つひにかへらず」「永久にかへらず」と繰り返し詠まれてゐて、惻々と心を打ちます。その山本長官も、前線指揮中、昭和十八年四月十六日、搭乗機がラバウルからブインに向ふ途中、P 38戦闘機十六機に邀撃ようげきされて戦死しました。開戦には終始慎重だつた長官は、若人の後を追ふやうに壮烈な死を遂げられたのです。六月五日、日比谷公園で国葬が行はれました。多くの国民が心一つにして、この英雄の死を悼みました。生方うぶかたたつゑ氏は次のやうな追悼の歌を詠んでゐます。

うつせみの骸からかるがると納まりて地つちあをき国にけふ還ります

元帥の遺骨が、小さな白木の箱に納まつて、草木青き母国に還つて来られたといふ意味でせう。「かるがると」といふところに、女性らしい深い悲しみの表現を感じます。山本元帥が最後に詠まれた歌は、昭和十八年の元旦に詠まれた二首がありますが、そのうちの一首をあげておきます。

天皇すめらぎの御楯みたてとちかふま心はとどめおかまし命死ぬとも

松陰の遺歌を思はせる絶唱と思ひます。

(『祖國と青年』平成四年十二月号)

子規の年ほぎの歌

正岡子規の三十六歳といふ短い生涯と、残された彫大な業績ぼうだいなを対比するとき、私どもは今更のやうにその偉大さの前に感動を新たにいたします。明治三十年『ホトトギス』の創刊によつて俳句革新を軌道にのせた子規は、翌明治三十一年二月から三月にかけて、『日本新聞』に「歌よみに与ふる書」を十回連載しますが、この歌論が以後の近代短歌の源流となつたことは改めて述べるまでもありません。その要点が、叙事にせよ抒情じよじやうにせよ、できるだけ誇張や美化を排して、体験を正確に詠むところから感動が生れるといふ主張にあることも、今日では自明のこととされてゐます。

子規は日清戦争従軍の無理がたたつて、二十九年ごろからは歩行困難となりました。結核性の脊髄カリエスだつたやうですが、その言語に絶する苦痛、苦惱の中にも、内向的な陰湿なかげがほとんど見当りません。「真砂まきごなす数なき星の其中に吾に向ひて光る星あり」(明33)といふやうな向日的人生観を終生持ち続けたことは驚くべきことです。生の終点に死を見るといふ認識を突き抜けて、死の視座から生を見返すといふ心境でせうが、子規以後、かういふ闊達かつたうさ

が失はれて行つたことはかへすがへす残念なことと思はれます。晩年の随想集『墨汁一滴』の明治三十四年五月十五日の項には「去年の今頃はるざるやうにして次の間位へは往かれたものが、今年の今は寝返りがむづかしくなつた。来年の今頃は動かれぬやうになつてゐるであらう」と書いてゐます。文字通り、彼の世界は「病牀六尺」に限定されてゐたのですが、彼の想像力や感受性は言葉を駆使して、さういふ現実の壁を乗り越えて行つたやうに思はれます。明治三十三年の元旦、死の二年九ヶ月前の時点で、彼は次のやうな四首の歌を詠んでゐます。

うつせみの我が足痛みつごもりをうまいは寐ずて年明けにけり

枕への寒さはかりに新玉あらたまの年ほぎ繩をかけてほぐかも

いたつきの長き病はいえねども年の始とさける梅かも

新玉の年の始と豊御酒とよみきの屠蘇とそに酔よひにき病やまひいゆがに

第一首目の「うつせみ」は、生きてゐる肉体といふ意味、「つごもり」は、こゝでは「大つごもり」つまり大晦日おほみそかの意味、「うまい」は熟睡といふ意味です。足の激痛のため熟睡もできぬうちに新年になつたと歌つてゐるのですが、カラリと事実が歌はれてゐることに注意すべきでせう。第二首目の「寒さはかり」とは「寒暖計」の意味ですが、何となくユーモアのある造語で

す。「新玉」は語源的には「改まる」といふ意味と関係があるやうです。「年ほぎ繩」は新春のことほぐ注連繩の意味です。寒暖計にしめ繩をかけるといふところに、子規の精一杯の「聖代」への祝意が現れてゐるでせう。第三首目の「いたつき」は普通病氣の意味で使はれることが多いのですが、原義は「いたみの加はる」といふ意味ですから、次の「長き病」と意味が重複することはありません。不治の長い病と、凜然とした新春の梅の対比に、病床の子規は新鮮な感動を受けてゐるわけで、それを何の虚飾もなく淡々と詠み下してゐるところに、同時代の「明星派」などの歌風と決定的な違ひがあるのです。第四首目の「豊御酒」とは、神前に捧げた「おみき」のことです。「豊」には、「豊饒」を祈る氣持がこめられてゐるのは勿論です。「病いゆがに」は、むづかしい表現なので説明を加へておきます。「いゆ」は「癒ゆ」、病氣がなほるといふ意味です。「がに」は語法的には推量の助詞といはれるもので、「……かのやうに」といふ意味です。おみきの屠蘇に酔つて、すっかりいゝ氣持になつてしまつた、長い病氣も直つたかのやうな満ち足りた氣持だといふ意味でせう。これら四首を通読して、そこには呪咀とか怨念とかいふ、病者に特有な暗い情念が全く感じられないでせう。明治の聖代を生きる一庶民の素朴で赤裸な心情が、何のてらひもなく、まつすぐに歌はれてゐて、まことにすがすがしい氣持になります。うたの功德でせうか。

明治三十五年は、子規が死を迎へる年ですが、その年の歌会始の御題は「新年梅」でした。

子規はその御題に応へて次のやうに詠んでをります。

大君のみことかしこみあら玉のとしのはじめに梅の花さく

梅の花が勅命を畏^{かしこ}んで咲いたといふ思想や感情は、今の人には分らないかも知れません。自然も人間も、天皇のしろしめす秩序の中にそれぞれ位置づけられてゐるといふ確信は、この子規の歌の中にまだ生きてゐました。

〔「祖國と青年」平成五年一月号〕

日露戦争の紙碑 『山桜集』

明治三十七年（一九〇四）二月四日、日露開戦。筆者が旧制高校で漢文を習った小田龍太教授は、当時雪深い新潟県村上町の町役場の書記（兵事掛）の伯父上のもとで勉学に励んでられた中学生でした。その回想の一部を引用します。「家人は寝静まり、余一人ランプの下、こたつに入りて勉強せり。屋外に積雪三四尺、終夜降りやまず。降雪の夜は特に四辺静寂なり。夜半とおぼしき時、戸を叩く音す。『スハ』とランプ片手に玄関に出で、土間におりたち、戸を開くれば、雪だるまの如き蓑笠の顔見知りの役場の小使、ころがるが如く入り来る。吾一語『来タカ』彼一語『来マシタ』」。この緊迫した、絶妙の呼吸こそが、開戦に臨んだ全国民の偽らざる姿だったのでせう。「日本全土武者振ひして立ち上りたるなり」と先生はこの文を結んでをられます。歴史の生き証人の重い言葉です。

ところで日露戦争といへば、きまつて与謝野晶子の「君死にたまふこと勿れ」（『明星』三七・九・一）が引用され、それが当時の国民感情を代弁するかの如き風潮が一般化してしまひました。これでは日露戦争といふ世界的な事件が反戦イデオロギーによつて極端に歪曲され、虚

像がまかり通ることになつてしまひます。明治文学の資料的研究としてすぐれた多くの論考を發表してをられる木村毅氏は、『比較文学新視界』（昭五〇・一〇）の中でかういふ通説に對して、容赦なく手きびしい批判をしてをられます。氏の論考によれば、この詩には、明らかに晶子が読んだと思はれる二つの資料があげられてゐます。その一つは、内田魯庵が『太陽』（明三七・六）に發表した「兵器を焚きて非戦を宣言したる露国の宗教」であり、その二つは『平民新聞』（八月七日）の幸徳秋水、堺枯川共訳の「トルストイの日露戦争論」です。木村氏はこれらの文中の具体的な語句と、晶子の詩句を綿密に照応させながら、それが偶発的な一過性の「思想」でしかなかつたこと、「実は作者は反戦思想家でも何でもなく、悪くいえば、物好きに、更に誇張していえば、これは作者の処女作詩だから『やは肌』が道学先生を驚倒させた如く、鬼面、人をおどかして奇功を納めようとした痕跡さえみとめられる」と痛論してをられます。木村氏は晶子の力量を充分評価した上で、この詩だけを突出させる取扱ひに警告してをられるのです。

歴史を見る眼には、常に複眼と平衡感覚が必要です。さういふ意味で晶子の詩をあげるならば、日露戦争に従軍した将士の歌集『山桜集』をあげなければ、偏向のそしりをまぬかれませぬ。この大歌集が戦争のただ中の明治三十八年二月に出版されてゐることは驚異に価する事実です。小柳陽太郎氏所蔵の原本のあとがきには、続篇の広告があるので、あの戦争を戦

つた当時の日本人の文化の高さが想像されます。印象に残るおびただしい歌の中で、筆者には猿田只介といふ無名の教師の連作七首が忘れられません。

出征の折よめる

待ちわびし召集令をうけしより心をどりぬなにとはなしに
君の為国の為なりとはいへど老いしちち母思はぬにあらず
勇ましきはたらきせよといひさして涙に曇る母のみことば
ふた親に妾わらはつかへむ国のためいざとはげますけなげなる妻
門の辺におくるみ親ををろがめば泣かじとすれど涙こぼるる
手をつかへなみだぐみたる教子をしへこの姿を見れば胸さけむとす
いざやいざ朝日のみ旗おしたててふみにじらなむ露つゆの醜草しじぐさ

改めて説明するまでもないでせうが、連作短歌といふものの典型的な作品です。冒頭の説明のやうな緊迫した状況の中で、召集令を受けたときの緊張感が出てゐる一首目。決して肩肘張かたひじつたカラ元氣の表現ではありません。しかし、二首目には残してゆく老父母への思ひ、三首目には言葉でははげましながら涙声になつてしまふ母の姿、四首目のけなげな妻も心では泣いて

るるに相違ありません。改めて熟読して見ると、三首目、五首目、六首目に「涙」といふ言葉が繰り返されてゐます。これは女々しい「私情」です。しかし「公」のためにその私情をふり切つてゆくところに、七首目のやうな強烈なたたかひの意志が表明されるのです。戦時中に声高だかにはれた「滅私奉公」といふスローガンとは全く別の、心の微妙な模様が窺はれる連作です。われわれはとかく道徳的なタテマエで歌をつくりがちです。しかし、ここには「私に背そむいて公に向ふ」心の葛藤かつとうがあります。『山桜集』一巻は日露戦争の意味を語り尽してゐます。

（『祖國と青年』平成五年二月号）

晶子像修正のために

与謝野晶子は明治十一年（一八七八）に生れ、昭和十七年（一九四二）数へ年六十五歳で亡くなりました。処女歌集『乱れ髪』（明治34）から、没後刊行の『白桜集』はくおうしゅう（昭17）まで、その詠歌数は三万首とも五万首ともいはれてゐます。近代短歌史上の巨人たることは誰も否定できません。その晶子が、「君死にたまふこと勿れ」一篇を以て、「反戦詩人」のレッテルを貼られてゐることはいかにも残念なことです。さういふ虚像を解体して、彼女の実像を蘇へらせることが必要です。

読者の方々は、明治四十三年四月十日、山口県新湊沖で訓練中沈没した第六号潜水艇の、佐久間勉大尉以下十四名の壮烈な殉職事件を御存知でせうか。全員、酸欠による窒息死でしたが、各人がその部署を守つた見事な最期でした。佐久間艇長の上衣のポケットから、苦しい息の中で綴られた九百八十二字の遺書が発見されました。「小官ノ不注意ニヨリ陛下ノ艇ヲ沈メ部下ヲ殺ス、誠ニ申訳無シ」に始まり、絶命寸前の「十二時四十分ナリ」で中断してゐるこの遺書を讀むと、戦慄せんりつに似た感動が走ります。当時、胃病で入院してゐた漱石は、その遺書の写真版を

見て、深い感動に打たれ「文芸とヒロイック」といふ短文を草して朝日新聞に載せました。その要旨は、人間が極限状況に置かれたとき、本能と義務感の二つのいづれを選ぶかといふ本質的な人間論でもありました。時代はまさに「自然主義」の圧倒的な支配下にありました。この立場は、人間は所詮欲望の奴隷であり、本能か道徳かの二者択一を迫られたとき、必ず本能の側につくといふのが自然主義者たちの確信でした。漱石はさういふ時代思潮が、厳肅な「事実」によつて、完膚なきまでに批判されてゐるではないか、獸類と選ぶ所なき現代人にも「此種の不可思議の行為」があることを再確認すべきではないか、と訴へてゐます。

晶子もまた、この事件に深い感動を受けたやうです。十二首の連作の挽歌「佐久間大尉を傷む歌」の中から八首を抄録します。

勇しき佐久間大尉とその部下は海国の子にたがはずて死ぬ

瓦斯に酔ひ息ぐるしとも記しおく沈みし艇の司令塔にて

大君の潜航艇をかなしみぬ十尋の底の臨終にも猶

海底の水の明りに認めし永き別れのますら男の文

海底に死は今せまる夜の零時船の武夫ころも湿ふ

大君の御名は呼べどもあな苦し沈みし船に悪しき瓦斯吸ふ

いたましき艇長の文ますら男のむくろ載せたる船あがりきぬ
海に入り帰りこぬ人十四人いまも悲しき武夫ものふの道

こ、には、あの『乱れ髪』の絢爛けんらんたる官能解放の歌人とは全く別の晶子がゐます。乗員の味はつた肉体的苦痛、遺書の中の言葉を借りれば「気圧高マリ鼓マクラ破ラル、如キ感アリ」「十二時三十分呼吸非常ニクルシイ」「ガソリンニヨウタ」などの文を心読した跡が窺はれます。そして何よりも、使命に殉じた戦士たちへの鎮魂の思ひが溢れてゐます。かういふ事件に対して、瞬時に反応する感情の共同体が存在してゐたといふことでせうか。その明治の終焉しゆうえんに際して、晶子は次のやうに詠んでゐます。(黒岩一郎博士の御教示)。

さばかりのめでたき帝みかどいましける世も今日よりは古へとなる

晶子は昭和十七年五月二十九日に没しましたが、大東亜戦争勃発の頃は既に病床に臥ふしてゐました。彼女は生涯に五男六女を生み、貧窮の中に夫を扶たすけて、見事に子供たちを育て上げた人でもありました。進歩的な女性誌『青鞜せいとう』の寄稿家でもありましたが、いはゆるウーマン・リブ的な婦人運動とは一線を画してゐました。苦勞して育て上げた子供の一人、四男いぐ昱は東大

工学部を卒業して、海軍大尉として出征しました。「吾子の出征を見送りて」といふ一首があります。

水軍の大尉となりてわが四郎みいくさに征く猛く戦へ

弟を思つて「君死にたまふこと勿れ」とうたつた彼女は、わが愛児の出征に際して、病床から「猛く戦へ」と励ます人でもありました。今上天皇御生誕の日に「ひむがしの御国の春に先き立ちて生れ給へる日の大御子は」と歌つた彼女は、今般の皇太子殿下の御婚約を地下でどんなに喜んでゐることでしょうか。

（「祖國と青年」平成五年七月号）

（1）昭和八年十二月二十三日

（2）皇太子殿下と小和田雅子様との御婚約は、平成五年一月十九日に皇室会議で正式決定。

同年六月九日御成婚。

桜のうた・日本の美意識

花は桜、魚は鯛たいなどといふと、君の美意識は古いと言はれさうですが、そんな簡単なものではないやうです。日本人の桜への愛着は、長い民族的体験の貯蔵庫である集合意識の底に根ざしたもののやうに思はれます。小林秀雄先生の『本居宣長』は、思想家によつて書かれた最高の日本人論ですが、その冒頭が宣長の「奥墓」の山桜の話から始まつてゐるのも、偶然ではないと思はれます。先生御自身も終生、桜を熱愛されたやうですが、文芸講演で行かれた弘前城ひろさきの夜桜を見られたときの感動が、「花見」といふ短いエッセーに見事に描かれてゐます。「千朶せんた万朶ばんた枝を圧して低し」といふやうな常套句じょうたうくが息を吹き返して来て、「この年頃になると、花を見て、花に見られてゐる感が深い」と書いてをられます。営々と一年のいとなみを続けて来たいのちが、一瞬の開花に見せる美しさは、淡泊とか平淡とかいふ形容とは違つた妖あやしい魔力を持つてゐるやうです。名作のほまれ高い『檸檬れもん』の作者梶井基次郎には「桜の樹の下には」といふ、散文詩のやうな短いエッセーがありますが、満開の花の美しさについて「よく廻つた独楽こまが完全な静止に澄むやうに、また、音楽の上手な演奏がきまつて何かの幻覚を伴ふやうに、灼しやう

熱した生殖の幻覚させる後光のやうなものだ」といふ言及があつて、深く心に残つてゐます。そこで、桜を詠んだ数首を味はふことにしませう。先づ牧水です。「酒と旅の詩人」といはれる若山牧水については、また改めて述べるつもりですが、こゝでは大正十一年春、天城山の北麓、湯ヶ島温泉で作られた、二十三首の連作「山ざくら」から、冒頭部の三首を抄出することになります。

うすべにに葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山桜花

うらうらと照れる光にけぶりあひて咲きしづもれる山ざくら花

瀬々走るやまめうぐひのうろくづの美しき頃の山ざくら花

この連作は、開花直前から始まつて、落花に終る構成で、牧水作品中の名作といはれ、多くの人々から「円熟の極点」「牧水調の完成」と讃へられてゐるものです。一首目の歌意は明白でせう。二首目の「咲きしづもれる」といふ表現は満開の状態を表はしてゐて、先の梶井の「静止した独楽」を思はせます。三首目の「瀬々」は山間の清らかな溪流のこと、「うろくづ」は魚類のことです。即興歌のやうですが、創作ノートを見ると推敲の跡があり、かなり苦心して作られたやうです。天性の資質からでせうが、牧水のうたには流れるやうな調べがあり、歌意が

分りやすいところに学ぶべき点が多いと思はれます。

桜を詠んだ歌の中で、とりわけ忘れたい一首が、明治天皇御製の中にあります。日露戦争が始まった明治三十七年の次の御製です。

樹間花

こずゑのみ人に知られて桜花こがくれながら散りやはつらむ

人目につく繚乱りょうらんたる梢の花のかけに、人目につかぬながら、木かげに隠れたまま、精一杯のいのちを燃やして散つてゆく無数の花がある。さういふかくれた花への凝視と共感がこゝにはあります。それは、名も無き民の「生」と「死」への限りないとほしみでもあります。恐らく戦場の兵士たちへのみ思ひもこめられてゐるのでせう。かういふお心の持主を仰いで生きてゐる幸を思はずにはをられません。時代は一気に昭和に飛びますが、昭和五十五年、歌会始の御題は「桜」でした。先帝陛下御年八十歳の時の御製です。

桜

紅くれなるのしだれざくらの大池にかけをうつして春ゆたかなり

吹上御苑ふきあげぎまゑんの桜を詠まれたものといはれてゐますが、この御製を読んだとき、私は息を呑むやうな思ひがしたことを、今も鮮明に覚えてゐます。何の巧みもない一首ですが、「くれなるのしだれざくら」は、豪華絢爛けんらんたる姿を読む者の心一杯に広げてくれます。皇室の風雅ふうがの伝統といふものを思ひ知らされます。さういふ宮廷のみやびに對して、「民」の側からの絶唱を一首紹介しませう。戦前、戦中に活躍した歌人、三浦義一氏の一首です。

み濠ほりへの寂しじけき桜仰おほぎつつ心はとほしわが大君に

桜と恋闕れんけつの情が一つに融け合つて、何か「永遠」を感じさせる一首ではありませんか。

(『祖國と青年』平成五年四月号)

子規の手紙うた

子規を慕ふ若い人々によつて、根岸短歌会が創設されたのは、明治三十二年でしたが、翌三十三年はその黄金時代といはれてゐます。子規自身も写生歌の典型といはれる左のやうな名作を残してをります。一つは「庭前即景」(四月二十一日)十首中の一首、一つは「雨中庭前の松」(五月二十一日)九首中の一首です。

くれなるの二尺伸びたる薔薇ばらの芽の針やはらかに春雨のふる

松の葉の細き葉毎に置く露ちつゆの千露もゆらに玉もこぼれず

一首目の歌意は格別の注釈を要しないでせう。観察が細やかで、調べがのびやかで、いはゆる「印象鮮明」な歌の手本でせう。二首目の「千露もゆらに」は無数の露がゆらゆらと揺れて、といふ意味です。かういふ名作を生み出した背後には、弟子たちとの心温まる交流がありました。

子規庵を最初に訪れたのは、後の「アララギ」の重鎮じゅうちんとなつた岡麓おかふもとと、香取秀真かとりほつまの二人でした。彼らは子規に論戦を挑いどまうと、三十二年一月子規庵あんを訪問して、すっかり子規の魅力にとりつかれてしまひます。秀真はもともと東京美術学校を卒業した工芸家で、後年ちゆうきん鍍金の大家となり、文化勲章を受賞した人ですが、晩年の子規に最も可愛がられた弟子の一人でもありました。その秀真宛の一首です。

秀真へ（三月十八日）

来る日きたの二十日あまり二日頃さちをくるとふ君来給はずや

来る三月二十二日頃、伊藤左千夫が訪ねて来る予定だが、君も来ないか、といふ意味です。愛する弟子への呼びかけですが、前掲の「芸術的」な歌の背後には、かういふ友情の世界があつたのです。そして、歌の通り、左千夫は二十二日に子規を訪ねてゐます。左千夫は、この年の一月二日に、三歳年下の子規に入門したばかり、牛乳搾なりはひりを業としてゐました。次は訪問の翌日の手紙うたです。

左千夫へ（三月二十三日）

我が庵いほの硯すずりの箱に忘れありし眼鏡取りに來こ歌よみがてら
吾妹子わづもこをなほし見かほしと思へども眼鏡忘れて見れど見らえね

交流が始まつて、まだ三ヶ月に満たない頃なのに、かういふ歌が送られてゐます。左千夫は恐らく歌論に熱中して、眼鏡を忘れて帰つたのです。二首目の歌は、古語が多いので少し注を加へますと、「吾妹子」は奥さん、「なほし」はなほも、「見かほし」は「見が欲し」つまり見たいの意味です。「見らえね」の「らえ」は可能の助動詞「らゆ」の未然形、「ね」は打消です。奥さんの顔をもつと見たいと思つても、眼鏡がないと見ることができぬではないかといふ親愛の情の伝達です。

漱石へ（六月二十一日）

年を経て君し帰らば山陰やまかげのわがおくつきに草むしをらん

漱石とは、大学の予備門以来の深く、長いつきあひです。この年漱石はイギリス留学の命を受けます。七月二十三日、子規を訪ねたのが最後になりました。漱石は留學中も病床の子規を慰めようと「倫敦消息ロンドン」を書き送つたりします。彼が虚子の手紙で子規の死を知つたのは三十

五年十一月でしたが「筒袖つつそでや秋の柩ひつぎにしたがはず」と追悼の句を詠んでゐます。「筒袖」とは洋服の意味です。異国にゐて、友の葬送のできなかつた悲しみが溢れてゐます。人には決して弱みを見せなかつた子規ですが、漱石にだけは、「僕ハモータメニナツテシマッタ」と絶望的な病苦を訴へてゐます。「病牀六尺」の世界は万里ばんりの涯はそ、ロンドンにつながつてゐました。そして花のパーリーへも。

浅井忠へ（六月二十五日）

くれ竹の根岸の豚はうまからずぱりす思へば涎よだれし流る

浅井忠は、当時東京美術学校教授で、著名な洋画家です。「ホトトギス」の創刊時から、没年まで、挿絵を書いて子規に協力した人です。一月十六日渡欧送別会が子規庵で開かれてゐます。歌の「くれ竹」は「根岸」の枕詞、「ぱりす」はパーリーです。子規は大変な美食家で、『仰臥漫録ぎやうがまんろく』には日々の食物が実に丹念に記録されてゐます。パーリーのうまい豚を思ふと涎よだれが出るといふのですが、瀕死の床にあつたこの余裕には感嘆のほかありません。

（『祖國と青年』平成五年五月号）

青春のうた

歴史の一回性とか、時間の不可逆性とかいふことが言はれますが、「時」は一度過ぎ去ると、二度とは帰つて来ません。青春の渦中にある人は、その輝きの美しさを実感できぬことが多いのですが、人生の多感な一瞬の輝きは、言葉に定着させることによつて、永久に生きることができるようです。ファウストの言葉ではありませんが、「美しき刹那よ、しばしとどまれ」といふわけです。その人の青春が、いかなる時代と交こう叉さするかは、宿命といふべきでせうが、時代を異にした人の、二十二、三歳くらの時に詠まれた何首かを味はふことにしませう。

子規にさきがけて、「亡国の音」によつて旧派のマンネリズムを批判した与謝野鉄幹は、二十歳にのとき、京城日本語学校、乙未義塾の教師として赴任します。時あたかも日清戦争の時代、明治ナショナリズムの昂揚期に当ります。彼は関妃暗殺事件に関与した疑ひで、国外退去を命ぜられますが、詩歌集『東西南北』（明治二九年）には、この頃の感慨を詠んだ連作があります。その中の一首です。

韓かんにしていかでか死なむわれ死なばをの子の歌ぞまた廢すたれなむ

韓国でもし命をおとすやうなことがあつたら、折角せつかく勃興ぼくけいしつつある「男子の歌」が再びたれてしまふではないか、といふ意味です。国士風な悲壯こうがうな慷慨調かうがいの歌は、ともすれば内容空疎くうそなものになりがちですが、この歌などは実感がこもつてゐて、政治青年の心の琴線きんせんにふれた一首ではなかつたかと思はれます。

続いて、日露戦争後の、二人の歌人の歌をあげておきます。鉄幹の歌が、ヒロイックな心情を陶酔とうずい的に歌つたものであるのに反して、日露戦後の歌人たちは、随分違つた心情の中に生きてゐたことがよく分ります。まづ若山牧水の『海の声』（明治四一年）の中から一首あげます。当時早大を卒業したばかりの彼は、園田小枝子といふ女性との恋のただ中にゐました。牧水二十三歳のときです。

真昼日のひかりのなかに燃えさかる炎ほのほか哀しわが若さ燃ゆ

白昼の、まぶしい光の中に燃えさかるほのほが、燃烧する若さの比喩に使はれてゐますが、

哀切で、激しい感情が巧まずして表現されてゐて、忘れられない一首です。

次は啄木の『一握の砂』（明治四三年）の中の二首です。東京で貧しい記者生活を送りながら、盛岡中学時代を回想したものです。中野重治が「啄木に関する断片」（大正十五年十一月）で、啄木を社会主義詩人と規定してから、さういふ一面ばかりが強調されて来ましたが、啄木の本領はやはりこの二首のやうなロマンティックな作品の中にあります。

病のごと思郷のこころ湧く日なり目にあをぞらの煙かなしも

やはらかに柳あをめる北上の岸辺目に見ゆ泣けとごとくに

最後に「戦争」のなかの青春を詠んだ、筆者の盟友、高瀬伸一君の歌をあげます。彼は昭和十八年十二月の学徒出陣の際には病気のため入隊できず、一年後の昭和十九年十月、東大在学中に横須賀海軍砲術学校に入隊、昭和二十年七月二十八日、終戦の十八日前、呉軍港内に碇泊中の軍艦「伊勢」の爆沈によつて戦死しました。今もその人なつこい満面の笑みと、小柄な身体に漲つた溢れるやうな情意がひしひしと伝つて来る思ひです。彼は学徒出陣で征く友らとの別れを「もののふの別れは簡単なものだ。『ぢやさようなら』で一切はすむのだ」と書いてゐるま

すが、次の一首は、別れゆく友らに送つた餞はなわけの歌だつたと思ひます。多くの出陣学徒の歌の中で、際立きはつた一首と思はれます。彼は二十二歳でした。

荒れ狂ふ海のはたてはますらをのいのちのすてどいさぎよくゆけ

「はたて」は「果て」、「すてど」は「捨てどころ」の意味です。これは、友へのはげましであると同時に、やがて征く自らの決意表明でもあつたのです。かういふ緊張した高い調べの遺歌を読むと、彼らは軍国主義の犠牲者だつたといふやうな言論が、いかに軽薄なものであるかが思ひ知らされます。戦後の前衛歌人、寺山修司には「マッチ擦するつかの間海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや」といふ著名な一首がありますが、捧げるに足る祖国を持つてゐた世代と、祖国喪失の世代と、果してどちらが幸福だつたのでせうか。

（『祖國と青年』平成五年六月号）

この果てに君ある如く

戦争の影がまだ色濃く残つてゐた昭和二十五年、中央公論社が戦争未亡人の短歌と手記を募集し、その入選作が『この果てに君ある如く』として出版されました。一体「未亡人」といふ言葉は、夫の死後もまだ生きてゐる人、といふ意味で、何か男性側から一方的に女性に貞節を強ひるやうな響きがあります。現在のやうにあらはに女権の主張がなされなかつた時代に、突然戦争のため一家の生計を支へて来た夫を失ひ、幼な児や老父母を抱へて苛酷な宿命を生きざるを得なかつた妻たちの心情を偲ぶと涙なきを得ません。「浄らかに孤独を守りてあり経るふによしなき言ことのきこゆるあはれ」(愛甲葉子)。貞節を守つて、日々を浄らかに生きついでゐるのに、何の根拠もない噂が流れて来ることよ、といふ嘆きは到るところにあつたのでせう。さういふ彼女たちの、生き残つた妻としての心情を詠んだ何首かを抄出して味はふことにしませう。

妻となり君に仕へし我の日の短かりしよ今に思へば(勝野はるみ)

やうやくに堪へしなみだのあふれ来て今またたかば落ちなんとする(松田みさを)

この果てに君あるごとく思はれて春の渚なぎさにしばしたたずむ（丹野きみ子）

行きずりの人の面影にかよへればせつなきまでに君よみがへる（門屋福子）

その骨は拾ふすべなしシツタン河の砂一握いちわくを骨とするてふ（大饗蓮華）

一首目は説明の要はないと思ひますが「我の日の短かかりしよ」の一句が心に沁みます。二首目の「やうやくに」は、やつと、からうじて、といふ意味でせう。人前を憚はばかつて、からうじてこらへてゐた涙が、どつと溢れて来て、またたきをすると今にも落ちさうだといふ意味です。三首目の最初の二句が書名となつたのですが、相聞の歌とまがふやうな甘美な表現です。哀切な嘆きも、このやうな「かたち」になることによつて、初めて癒されたのでせう。四首目の歌は「行きずりの人の面影に」君の面影が似通つてゐるから、と解すべきでせう。ふとしたきつかけで、亡き人の面影は、今も眼前に在るやうに鮮烈に蘇つて来るのです。最後の歌の「シツタン河」は、ビルマ（現在のミャンマー）の河の名です。シツタン渡河作戦は、死屍累しるい々の玉碎戦でした。遺骨の代りに一握の砂が帰つて来たのです。情緒を表現する「かなし」といふやうな言葉が一語も使つてないだけ、余計にその深い悲しみが伝はつて来るやうな気がします。誰に訴へやうもない、妻としてのこのやうな悲しみを支へてくれたものは、残された遺児に対しての、母としての愛情と責任でした。

野あそびにほうけし吾子がねすがたのかなしきばかり君にかも肖る（坂根庸子）

くづ折れむ心いたはり寝る夜さのかひなに痛み児の重さはも（高村三紀子）

やすらなる吾子の寝顔は亡夫に似てながきまつげのかげ落し居り（田淵好子）

父なくて生ひゆく吾子と思ひつつ髪を切りやる項のいとしさ（藤沢典子）

こゝに抄出した四首のうちの三首までに、子の寝すがたや寝顔が詠まれてゐることに注意すべきでせう。彼女たちの昼間の時間は、恐らく現実の応接に寸暇もないやうな、勤労の日々だつたと思はれます。夜のしじまの中にふと眺め入つた吾子の寝顔は、何と生前の夫の面影に似てゐることかと、胸衝かれる思ひがしたのだと思はれます。一首目の「ほうけし」は呆けしの意味です。昼間は野あそびに遊び呆けてゐて、前後不覚に寝入つてゐる子の姿は「かなしきばかり」君に肖てゐるといふ意味です。二首目は、ともすれば挫折しようとする弱い心を、自らいたはつて寝ようとすると、自分の腕を枕にして寝てゐる子の頭の重さが痛いほどに感じられるといふ意味です。腕に感ずる痛いほどの重さは、彼女が荷はねばならぬ責任の重さでもあつたのです。三首目は「ながきまつげのかげ落し居り」といふ観察の細やかさが注目されます。かういふ具体的な描写が歌を活きたものにすることを学ぶべきでせう。四首目の「項」とは、

えりくび、首筋の意味です。薄命の児に対する愛情が、散髪をしてやる幼な児の項にそそがれてゐて、何度読んでも涙ぐまれる一首です。

かくばかりみにくき国となりたれば捧げし人のただに惜まる（安藤てる子）

四十年前の妻たちのかういふ嘆きは、今もなほ癒されてゐないのではないか。生きてをられれば八十に近い、かういふ妻たちの日々が平安であれと祈らずにはをられません。

（『祖國と青年』平成五年七月号）

八月十五日・山河慟哭^{どうこく}

四十八回目の終戦記念日がめぐつて来ます。ものごころついた年齢であの日を迎へた人たちも、還暦を遙かに越えた年となりましたが、烈日^{れっじつ}のもとで、途切れ途切れの玉音放送を聞きつつ、ふり仰いだ抜けるやうな青空を、生涯忘れることはないでせう。戦争指導部の和平か抗戦かといふ対立が、八月九日と十四日の二度の「聖断」によつて終止符が打たれたことは、今では周知のことです。その間における昭和天皇の御苦衷が、御製の形で明らかにされたのは、侍従次長として側近にをられた木下道雄氏の『宮中見聞録』（昭四三）の発刊を待たねばなりません。われわれは天皇といふ方の極限のお姿を垣間見る思ひで、衿^{えり}を正して拝唱したいものです。

終戦時の昭和天皇御製

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

国がらをただ守らむといばら道すすみゆくともいくさとめけり

一首目は五・八・六・七・九といふ字余りの御製ですが、溢れる御胸の思ひが、定型に収まり切れなかつたのでせう。「身はいかならむとも」「身はいかになるとも」と繰り返して詠まれてゐる切迫した御心情の哀切さを偲ぶばかりです。最後の聖断の下された夜、情報局総裁として列席してゐた下村海南は次のやうに詠んでゐます。

大君ののらす御詞みことに胸せまり声立てて誰も誰も泣きやまず

最後まで徹底抗戦を主張して譲らなかつた陸軍大臣阿南惟幾あなみこれちか大将も、天皇のお氣持にそつて終戦を決意し、十四日夜「一死 以て大罪を謝す」の遺書を残して自刃します。それとなく別れに來た阿南大将に向つて、鈴木貫太郎総理が、「阿南さん、日本の皇室は絶対に御安泰ですよ、陛下のことは御心配要りません。今上陛下は春と秋との御祖先のお祭を必ず御自身でなさつてをられるのですから」と伝へたことは有名です。阿南大将の遺歌。

大君の深き恵にあみし身は言ひ遺すべき片言かたこともなし

一方、無名の民たちはどんな思ひでこの日を迎へたでせうか。『昭和萬葉集』巻七から数首を抄出して味はふことにしませう。

我大君五内は裂くと宣へばこの身一つの置きどころなし（山下秀之助）

「五内」とは「五臓」といふ意味です。この御言葉は終戦の詔書の中の「帝国臣民ニシテ戦陣ニ死シ、職域ニ殉シ、非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内為ニ裂ク」といふ中に出て来ます。

しろたへのおん手袋をみめにあてなみだたびきときくはまことか（大鹿卓）

「なみだたびき」は「涙賜びき」で、「涙をお流しになつたといふ意味です。聖断を下されたときの、陛下のお姿を偲んで恐懼してゐる心情を素朴に歌つただけですが、心に沁み入るやうな一首です。

忍び得ざるを忍びゆけよとおほけなや玉の御声身に透るなり

父母の泣けば幼き子等までがラジオの前に声あげて泣く（高見楯吉）

一首目は、やはり終戦の詔書の中の「堪へ難キヲ堪へ忍ヒ難キヲ忍ヒ」に依つてゐることは申すまでもありませんが、「おほけなや」は畏れ多いことだといふ意味です。二首目は、意味は分らないながら、父母たちのただならぬ号泣に「声あげて泣」いてゐる幼な子たちの姿が蘇つて来ます。見事な敗戦だつたといふべきでせう。

みことのり承^{うけたまは}りをる我の眼にあたりの大^ち地暗むが如し（内堀青扉）

戦はつひに敗れて止みにけり槻^{つぎ}の高木に蟬しきり鳴く（斎間万）

前の一首は、玉音を聞いたときの、一瞬の目のくらむやうな衝撃を詠んでゐます。二首目は、敗北といふ冷厳な現実と、それとは全く無関係に鳴きしきつてゐる蟬の声の対比が鮮かです。あの八月十五日の一瞬を支配した全土を覆ふ静寂が巧まずして詠まれてゐます。

乃木希典大将の辞世

明治四十五年七月三十日、明治天皇崩御、即日大正と改元。九月十三日、明治天皇御大葬の弔砲ちようほうの轟とどろきを聞きつつ、乃木希典大将夫妻は壮烈な殉死を遂げられました。この事件の与へた衝撃の強さは、測り知れないものがありました。例へば漱石の名作『こゝろ』の一篇は、何よりも雄弁に、作者その人の深い感動を伝へてゐます。『こゝろ』の主人公「先生」は、今は彼の妻である「お嬢さん」への愛のために、親友Kを自殺に追ひやつてしまひ、その贖罪しよくざいのために死を模索してゐました。さういふ先生は、崩御の知らせを聞き「明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つた」と感じ、己れを「時勢遅れ」と嘆じます。「では殉死でもしたら可よからう」とからかふ奥さんに対して、自分が殉死するならば「明治の精神に殉死する」と答へます。その冗談めかした「殉死」といふ言葉が、乃木さんによつて嚴肅な事実としてつきつけられたとき、先生ははつきりと自死の決意を固めることができたといふやうに物語は展開してゆきます。

『こゝろ』最終部の叙述は、何度読んでも、圧倒的な迫力で迫つて来ますが、これは漱石その人の、乃木さんの至誠に対する熱い共感をぬきにしては考へられませんか。

乃木さんは「遺言条々」といふ長い遺書を残してゐますが、その第一条に、自分の死は明治十年の西南戦争における軍旗喪失の罪に対するお詫びであることを明記してゐます。この事件が、純忠無比な乃木さんの心に残した傷の深さは、当時の漢詩の何篇かから、窺ふことができませんが、「吾身即ち是、死余の民」といふやうな一句にも明らかです。その乃木さんの苦衷を誰よりもよく理解してをられたのは明治天皇でした。田原坂の激戦から二十五年が経つた明治三十五年秋、天皇は陸軍大演習統監のため九州路に入られます。列車が田原坂を通過するとき、天皇は乃木さんに次のやうな御製を与へられたのです。

武士のせめ戦ひし田原坂松も老木となりにけるかな

明治天皇は、特別の人に特に目をかける——寵臣をつくる——といふことを決してなさらぬ方でしたが、乃木さんへの親近感は、「気配」で分つたと言ひます。

日清戦争後、那須に隠栖してゐた乃木さんに第三軍司令官に任ずる大命の内示があつたのは、日露開戦後二ヶ月経つた明治三十七年四月四日でした。

此儘に朽もはつべき埋木の花咲く春に逢ふぞ芽出たき

陛下の股肱ここうとして勇躍出陣する、弾はずむやうな喜びの表現ですが、前途に二十万樽のベトンで固めた旅順大要塞の、死山血河の攻城戦が待ち受けてゐるとは、もちろん知る由もありませんでした。一万五千の戦死者を出した旅順要塞への攻撃は、戦史に稀な激戦でしたが、田原坂の軍旗喪失と共に、六十三年の乃木さんの生涯で最も深刻極まる体験でした。既に三十七年五月には南山の戦で長男勝典かつすけを、また二〇三高地の激戦では次男保典やすすけを戦死させてみました。その苦悩の表情は、ウオシユバンの『乃木』に活写されてゐますが、鷗外の『うた日記』の中では、二子を失つても「睫毛まつげだに」動かさなかつた乃木さんの風貌が美しく歌ひ上げられてゐます。「一人息子と泣いてはならぬ、二人死なせた人もある」と当時の俗謡に歌はれたと聞いてゐます。日露戦後の四十年ごろと思はれる、「悼両典」と題した次の歌があります。両典とは勝典と保典の二人を意味します。

咲くことをなごいそぎけむ今更にちるををしとも思ふ今日かな

かういふ経験を重ねて来た乃木さんにとつて、陛下の崩御に當つて、殉死の決意は瞬時に成立したのでせう。「遺言条条」に依れば、乃木さんは最初静子夫人を残してゆくつもりだつたや

うです。夫妻揃つての殉死の合意ができたのは、恐らく九月十三日の夕刻ぎりぎりのところで
はなかつたでせうか。

乃木希典辞世

神あがりあがりましぬる大君のみあととはるかにをろがみまつる
うつし世を神さりましし大君のみあとしたひて我はゆくなり

乃木静子辞世

出でましてかへります日ひのなしときくけふの御幸みゆきに逢ふぞかなしき

一切の、さかしらな解釈を拒絶して動じない、歴史の厳粛さを感じてほしいものです。

〔「祖國と青年」平成五年九月号〕

学徒出陣五十年（その一）

大東亜戦争の戦局の急迫に伴つて、二十歳以上の在学生の徴兵猶予の特典が廃止され、昭和十八年十月二日臨時徴兵検査規則の公布により、文科系学徒の約十万名が十二月初旬、一斉に入隊しました。世にこれを学徒出陣と言ひます。

十月二十一日、東京の神宮外苑競技場で、出陣学徒壮行会が降りしきる雨の中で挙行されました。銃を肩に、足にゲートルを巻いた出陣学徒たちの、雨中の分列行進の図は、戦争の回顧のとき必ず写し出されるニュース映画の著名な一カットです。それは、時代が強ひた悲劇だつたに相違なかつたのですが、多くの若者たちはペンを剣に替へ、勇躍、祖国存亡の危機に挺身したのでした。戦後編集された戦没学生の手記『きけわだつみのこゑ』が、編集者たちの反戦平和といふイデオロギイによつて選別されたことに対して、小林秀雄氏はきびしい批判を投げかけてをられました。氏は「政治と文学」（昭和26）の中で、「戦争の不幸と無意味を言ひ、死に切れぬ想ひで死んだ学生の手記は採用されたが、戦争を肯定し喜んで死に就いた学生の手記は捨てられた。（略）遺言にイデオロギイなど読んではいけないのである」と述べてをられま

す。これは、編集者たちの、歴史に対する謙虚さの欠如、病める文化観への批判です。昭和十八年の十月から十二月にかけて、如何に多くの学生たちが、祖国の運命と己れの生死を重ね合はせて、さまざまな感情の起伏を経験したことでせう。入隊まで二ヶ月の間の、二度と還ることのない刻々の時間、その重い運命を凝視する表現を通じて、当時の学徒の体験を追体験していただきたいと思ひます。

神宮競技場ここ聖域にして送らるる学徒幾方に雨ふり注ぐ

幼らの勢きはひ旗ふる道ゆけり面おもはゆくして送らるるわれや

いのちながらへて還るうつつは想はねど民法総則といふを求めぬ

二十歳はたとせのこれの一生ひとよに悔いなくてわれほこらかに召されゆくなり（以上 吉野昌夫）

第一首目は、前述の十月二十一日の学徒壮行会の情景です。二首目の「勢きはひ」は元氣よくの意、「面はゆく」は氣恥しいといふ意味です。三首目、現実の帰還といふことは全く思はないが、『民法総則』といふ書籍を求めたといふところに、法科の学生の無量の思ひがあります。四首目、説明の要はないでせう。さまざまな心の葛藤かっとうの後で、思ひ定めた若者のすがすがしい決意が述べられてゐます。当時の多くの学徒の出陣の氣持が巧まずして述べられてゐる一首だと

思ひます。

式場に分列行進をおこすときわき上る拍手になみだ涙落ちむとす

出陣学徒のひとりなる吾をけふ母のみ墓に來りわが告げむとす（以上 白井洋二）

第一首目は、十月二十一日の壮行会の時の感動です。今しも分列行進に移らうとする瞬間、思はず落涙せむとする心の高まりが詠まれてゐます。歴史年表では一行で書かれてゐる事實の裏に、かういふ人間の心があつたことに今更深い驚きを感じます。二首目、亡き母の墓前に出陣学徒の一人となつたことを報告してゐるのです。この一首の裏に、奥深い作者個人の歴史が垣間見られるやうな一首ではありませんか。

記念樹

小柳陽太郎

いでたちのかどでに母がうゑましし庭のすみなる柿のひともと
筑紫路に春さりくればさみどりに萌えいづらむかこ、だ若葉の
來む春は若葉萌えいでたらちねがこ、ろなくさめよ柿のひともと
春さりて若葉萌ゆれば健やかのおのがいのちと見つ、偲ばせ

防人さきもりと遠き海辺をさしてゆくおのがいのちと萌えよ柿の葉

作者は今も現役の大学教授として、後進の指導に精魂を傾けてをられる方です。海軍軍人であつた父君を幼い頃に亡くされ、母上一人に育てられただけに、残られる母上への思ひも一しほだつたと思はれます。二首目の「春さり」は春になるといふ意、「こ、だ若葉の」は、沢山の若葉といふ意味です。これらの歌をよむと、万葉集の防人の歌「忘らむと野ゆき山ゆきわれ来れどわが父母は忘れせぬかも」を思ひ出します。小林秀雄氏の言葉ではありませんが、戦争を肯定し、雄々しく征つた人の歌を故意に排除するところからは、決して、真に創造的な平和思想は生れて来ないでせう。それにしても、二十歳前後の人たちのこの言霊ことばたまの力には頭を垂れるばかりです。

（『祖國と青年』平成五年十月号）

学徒出陣五十年（その二）

昭和十八年十月から十二月にかけて、生還を期し難い運命に直面した学徒たちが、そのかけがへのない思ひを、いかに短歌の形に表現したかについては、前号でいささか触れるところがありました。当時、私もその仲間の一人だった友人たちが、『若桜集』といふ一篇の歌集を残してゐます。今月はその中の数首を鑑賞することに致します。

彼らは入隊を間近に控へた十一月七日から八日にかけて、うちつれて霧島温泉に遊びました。晩秋の紅葉が燃え、湯けむりの上に淡く月光がさしてゐました。それらの美しい自然や、霧島乙女の華やいだ姿が、彼らの眼にどのやうに忘れ得ぬ印象を刻みつけたか、おびただしい連作短歌が彼らの心情を語り尽してゐます。それらの高い調べに共通する心情は、有限の生をいかに祖国の永遠の生につなぎとめるかといふことでした。その一つの思ひが響き合つてゐる四首を抄出しておきます。

寄せ書きに

高瀬伸一

わがどちのつどひはかなししかれども日本はほろびずとこしへまでも

霧島の宿の乙女に

三根 淳

うつそ身の今宵のうたげつきるともはのいのちの消ゆる日あらめや

十一月七日夜霧島にて

渡辺二郎

とことほにつきぬ思ひを味ひし出湯の里も今宵限りか

霧島温泉にて

寺尾博之

きりしまのいでゆの里に酒くみて語りし今宵とはに忘れじ

抄録したこれらに共通してゐる語彙は、「とこしへ」「とは」「とことほ」といふ言葉です。自らの死が、既定の事実のやうに眼前に迫つてゐる時、彼らは「永遠」を希求せざるを得なかつたのでせう。仲間同志の、現世の、この宴は果つることがあつても、友情の絆きづなと祖国の生命は永遠だといふ、この悲劇的な心情は、荒廃し切つた現代から追体験することは不可能ですが、時間を遡さかのぼつて過去と合一する努力を是非試みていただきたいのです。

思へば、これらの作者の、その後の運命も、当然のことながら悲劇的でした。生還したのは三根君だけでした。高瀬君は、東大文学部在学中に入隊。終戦直前の呉軍港の軍艦「伊勢」の沈没と運命を共にしました。彼の遺歌の一首は六月号の文末(104頁)に記しておきました。渡辺

君は東大文学部在学中に入隊。戦車隊の将校として満洲で終戦を迎へ、やがて苛烈なシベリヤ抑留の中で戦病死します。明るい人柄と豊かな才能の持主だつただけに、その死を思ふごとに断腸の思ひがします。寺尾君は東大農学部在学中に入隊、終戦時には海軍少尉として、九州軍需管理部で兵器調達の重責を果してゐましたが、八月二十日、福岡郊外の油山あぶらやまで、上官、長島秀男中佐を介錯かいしゃくした後、壮烈な自刃を遂げました。「魂魄こんぱくトコシヘニ祖国ニ留メテ玉体ヲ守護シ奉ラム」の一句を含む遺書は、一読戦慄に似た衝撃を与へずにはおきません。今も年ごとの慰霊のいとなみが続けられてゐます。彼の遺歌の一首です。

斃なほれたる友を嘆かずいつの日か吾あもたどりゆく道と思へば

出陣間際の、肉親との別れに詠まれた連作を二つ挙げておきます。心に残る絶唱です。

病床の姉を訪ふ

宝辺正久

冬といへど朝日の光つよくして潮みつる瀬戸の波のまぶしさ
渦うずまきて流るるうしほの瀬をはやみすぐる舟かけ射る矢の如し
やみふせる汝なが床の辺へにいそぎつつ指をりかぞふ出でて征く日を

ますらをのほまれときほふこのいのち惜しからなくに何のさびしさ
別れゆくその日を近み君がやまひはやく癒えよと祈らぬ日なし

出陣

川井修治

み手づから盃ささげ天晴あつぱれのはたらきせよとのらす父はも

涙して見つめゐたまふ母刀はとじ自の心のいのりかしこみまつる

国のため死ねと言はねどいもうとがわかれをこめてささぐ御酒みきはや

ふるさとのとなりの人らつぎつぎにほぎ言ごとたまふも有難きかな

かくばかり人のなさを蒙かちむりて門をいづるか防人さきもり吾は

海軍と陸軍の差はあれ、お二人とも無事生還されました。宝辺氏の連作は、姉上との最後の歌となりました。川井氏はシベリヤ抑留を経て帰国され、この見事な決意を生涯貫き、今も大
学教授として活躍してをられます。

〔『祖國と青年』平成五年十一月号〕

学徒出陣五十年（その三）

昭和十八年十二月一日は、徴兵猶予の特例を停止された文科系学徒たちが、所属する連隊や海兵団に一斉に入隊した日でした。近代学制史上、それは特記すべき日でもありました。前号に引き続き、何首かの学徒兵の歌を鑑賞することに致します。

つれだちて門出づるとき期せずして皆仰ぎたり母校の校舎

わたくし私の思ひはあらず一すぢに定まりし道踏みて遂ぐべし

数ならぬこの身をすらも南海の島に果てしめむ時は来れり（畔上知時）

作者は当時上智大学の学生だった方のやうです。校門を出るとき、生還して再び見ることはできまいといふ無量の思ひで、仲間たちが「期せずして」一斉に校舎をふり仰いだといふ意味ですが、母校といふものを、これほどの深い感慨で仰ぐといふ経験は、今の学生諸君に果してあるのでせうか。二首目の「私の思ひ」すなはち私情を越えて、三首目のやうな決意が固めら

れるまで、どんな激しい葛藤があつたのか、静かに偲びたいものです。

生死は語るべからず大君のまけのまにまに今ぞいでゆく

手垢つきし愛しき本はわが名書きて征かざる友にわかち与へぬ

本つめし箱に蓋すとうちうちて最後の釘はねもごろにしぬ（玉井清文）

学生にとつて、手垢のつくほど愛読した本は、自分の分身のやうな感じのするものです。一首目は決意の歌ですが、二首目と三首目は愛読した本といふ、具体的な「もの」を読んでゐるために、当時の学生の心情が、かへつてなまなましく表現されてゐると思ひます。特に三首目について、少し説明を加へますと、恐らく作者は身近の蔵書を荷造りして、故郷へ送る仕事をしてゐるのだと思ひます。何本もの釘を「うちうちて」最後の一本の釘は、「ねもごろに」つまり丁寧な心をこめて打つたといふ意味です。作者自身が、納得して運命を受け入れる区切りにしたのでせう。心に残る歌です。

遂げ得ざる論文を措きて卒業す悔とし言はばかかる悔のみ

形身の髪とわれは言はなく渡せるを母も無言に受け給ひたり（唐津常男）

一首目は恐らく繰り上げ卒業のため、論文の完成を待たずに征くべき運命を、さらりと詠んでゐる一首ですが、気持の整理はきつぱりついてゐる感じの歌です。二首目の「言はなく」の「な」は打消の「ず」の古い形、「く」は接尾語です。「言はずに」の意味になります。これも、平淡に詠み下した歌のやうですが、母と子の、やがては遺髪となるかも知れぬ髪の、無言の授受は、映画の一コマのやうな鮮烈な印象を与へる一首で、短歌といふものの表現力の強さを、今更のやうに感じさせます。

子の脱ぎし大学制服の一包み抱へてわれら営門を出づ（山田百合子）

これは入隊する子を送つて行つた母親が詠んだ一首です。軍服に着かへ、もう用のなくなつた大学制服、それは息子の体温がまだ残つてゐるやうな一着だつたに違ひありません。その一包みを、しつかりとだきかかへて、兵營の門を出る母親の心を、今静かに偲んで見ませう。全国で、何万の母親が、かういふ思ひに耐へたことでせう。営門を出る「われら」の中には、あるいは父上の姿もあつたのではないでせうか。

かうして、学生たちを送り出した後の学園で、彼らの師たる人は、どんな思ひをしてゐたの

でせうか。

学徒みな兵となりたり歩み入る広き校舎に立つ音あらず

ここに逢ふ人のすべては口結びものにこらふる面持おももちをせり

いささかの残る学徒と老いし師と書に目を凝らし戦いくさに触れず（窪田空穂）

窪田空穂は歌人で、著名な国文学者、当時は早稲田大学の教授でした。これらの三首は、学徒出陣の後の、学園の雰囲気ふんいきを、老教授の立場から歌つてゐますが、潔く征つた教へ子たちへの、無言のいとほしみが伝つて来るやうな作品です。「学徒出陣五十年」が、ともすれば反戦平和の文脈だけで語られてゐる時、心を空しくして、これらの歌を改めて味はつていただきたいと思ひます。

（『祖國と青年』平成五年十二月号）

昭和天皇御製五首

昭和六十四年一月七日、全国民が暗涙あんるいにむせんだ日から、五年の歳月が経過しました。昭和天皇祭に当り、陛下最晩年の御製を拝唱しようと思ひます。

沖繩は、先の大戦において、本土防衛の最前線であり、圧倒的な米軍の砲爆撃の中で、屍山血河の地獄図が展開された場所でした。敗戦直後の御巡幸から始まつて、陛下の御足跡は全土に及びましたが、沖繩だけが残された唯一の土地でした。昭和六十二年十月二十五日に挙行される第四十二回国体秋季大会（海邦国体）への御出席は、陛下の生涯の御念願だったのでないでせうか。しかし、慢性膵炎すいえんのため、腸にバイパスを作るといふ大手術のため、九月二十二日、宮内庁病院に入院され、沖繩御訪問は中止のやむなきに至りました。陛下にとつては最大の痛恨事つうこんじであられたことでせう。当日は皇太子殿下がお言葉を代読されましたが、沖繩の戦中、戦後に対して「深い悲しみと痛みを覚えます」といふ一文がありました。

思はざる病となりぬ沖繩をたづねて果さむつとめありしを

「果さむつとめ」といふお言葉が、沖繩に賭けられたみ思ひの深さを語つてゐないでせうか。その後陛下は徐々に健康を回復され、御公務に復帰されるまでになりました。

昭和六十三年七月二十日から九月八日まで、前年の御大患の予後といふこともあつて、五十日近い那須御用邸での御静養の期間がありました。その間、八月十五日の日本武道館での戦没者追悼式典には、政府専用のヘリコプターで御帰京になりました。先帝陛下最後の式典御出席でしたが、戦没者の霊位の前に進まれる陛下の、おみあしを引きずるやうなお姿に胸を衝かれたる思ひがしたことを今も鮮かに思ひ出します。実は陛下はその二年前の六十一年八月十五日に、次のやうな御製を作つてをられたのでした。(平成二年刊行の『おほうなばら』所収)

この年のこの日にもまた靖国のみやしろのことにうれひはふかし

戦死者の慰霊のあり方が、八月十五日前後のマスコミで常に問題になります。このことに陛下がいかに心を痛めてをられたか、われわれは思ひを新たにすべきでせう。しかし、御病氣は徐々に進んでゐたやうです。八月末から九月始めにかけて二度発熱されます。その折に詠まれた一首です。

去年のやまひに伏したるときもこのたびも看護婦らよくわれをみとりぬ

恐らく、その頃のものではないかと思はれ、御生涯の最後のおうたと思はれるものに、左の一首があります。

秋の庭（那須）

あかげらの叩く音するあさまだき音たえてさびしうつりしならむ

「あかげら」はきつつきの一種と言はれてゐます。この御製は、上の句で一度切れ、下の句が、「音たえてさびしうつりしならむ」と八、七で切れてゐます。「七、七ではなく八、七になっているその字余りが、こみ上げて来るさびしさを抑えて、更に耳を澄ましつづけておられる陛下の、悲愁の深さをあまりにも的確に示している」といふ江藤淳氏の謹解に加へるものはないでせう。あかげらの静けさの中で、一とき聞えてゐた、あかげらの木を叩く音が、ふと聞えなくなつた、どこかへとび移つたのだらうかと、消えた音を追つてをられる陛下のお心が切なく迫つて来ます。激動の昭和を、一貫して皇統を守られた方の、死に致る病を予感しての御感懐

だつたのでせうか。

諒闇りょうあんの年の改まつた、平成二年二月六日、「昭和天皇を偲ぶ歌会」が皇居・宮殿の春秋の間で開かれ、昭和天皇が那須御用邸で詠まれてゐたお題「晴」の御製が朗詠されました（昭和六十四年歌会始は崩御のため中止）。「あかげら」の御製と、ほとんど同じ頃のお作でせう。

空晴れてふりさけみれば那須岳はさやけくそびゆ高原のうへ

「ふりさけみれば」は遙か遠くをながめるといふ意味で、古今集卷九の遣唐使阿倍仲麻呂の歌で有名な語彙ごいです。それにしても、何といふ壮大にしますが、ががしい御製でせうか。「あかげら」の御製に悲愁を噛みしめたわれわれは、この大らかな御製に救はれる思ひが致します。

（「祖國と青年」平成六年一月号）

吉野秀雄の歌

多少とも短歌に関心を持つ者にとつて、忘れられぬ歌人の一人に吉野秀雄といふ存在があります。彼は明治三五年（一九〇二）に生れ、昭和四二年（一九六七）に没してゐます。六十五歳の生涯でした。彼は高崎市の織物問屋吉野藤の次男に生れ、長じて慶應大学で経済学を学びますが、喀血かっけつのため学業を途中で放棄せざるを得ませんでした。生涯の宿痾しゅくあの始まりだつたわけです。以後、彼は独学で主としてアララギ系歌人の研究に入りますが、大正末年から会津八一に傾倒し、師事するやうになります。その歌風は雄勁ゆうけいにして繊細、特定の流派に属してゐませんでしたが、短歌の正道を歩んだ人の一人だと言つても過言ではないでせう。彼の歌人としての名声が確立したのは第三歌集の『寒蟬集』（昭和二二年）からですが、その歌集に含まれる歌は、過ぐる戦争末期のもので、特に昭和十九年八月二十九日、妻はつを胃癌のために失つた折の挽歌は、人間の生と死と愛の極点を見定めた絶唱であり、一読忘れ得ぬ印象を与へられる作品です。昭和十九年といへば終戦の一年前、既にインパール作戦は失敗し、サイパンでは玉砕、グアム島にはアメリカ軍が上陸してゐた時期です。戦勢せんせい日に非なる非常の時に、幼な児を

残して死に行く妻を送る心が、どんなにつらいものだつたか、想像に余りがあります。今、その連作の中から八首を抄出することになります。

病む妻の足頸あしくびにぎり昼寝する末の子みれば死なしめがたし

潔きよきものに仕ふることく秋風の吹きそめし汝が床の辺にをり

をさな子の服のほころびを汝は縫へり幾日か後に死ぬとふものを

今生こんじょうのつひのわかれを告げあひぬうつろに迫る時のしづもり

遮蔽しやへい燈とうの暗ほき燈ほかげにたまきはる命尽いのちきむとする妻とあり

をさな児の兄は弟おとこをおとこはげまして臨終いまはの母の脛はざさすりつつ

汝が魂たまはいづくさまよふ末の子の手をひき歩む夜の道暗し

よしゑやし捺落なら迦かの火中ほなかさぐるとも再び汝に逢はざらめやは

第一首目の「足頸にぎり」といふ表現が、幼な児の母への慕情を具体的に表現してゐて何ともあはれです。さういふ子の姿を見ると「死なしめがたし」——妻を死なせるわけにはゆかないといふ意味です。

第二首目の「潔きものに仕ふることく」は瀕死ひんしの病妻を看護する、夫のひたむきな心がよく

表はれてゐます。

第三首目は説明の要はないでせうが、死の必然を覚悟しながら、子の服のほころびを縫ふ母の姿があらはれます。

第四首目は多少の説明が必要でせう。上の句の意味は明瞭ですが、下の句はやゝ難解だと思ひます。「うつろに」は、人間の感情など無視するかのやうに「非情」に、といふ意味でせう。非情に迫つて来る最期の時、その刻々移つてゆく時間の、おそろしいほどの静寂さといふほどの意味でせうか。連作の中の中心を占める一首ではないでせうか。

第五首目の「遮蔽燈」は、戦時生活の経験のない方には分らない言葉ですが、空襲の目じるしにならぬやうに、電燈に黒い紙や衣をつけて、外部に光が洩れぬやうにしたものです。「たまきはる」は「魂きはまる」が原型で、生れてから死ぬまでといふ意味だといはれてゐます。「命」にかゝる枕詞です。哀切極まりない一首です。あたりの暗さの中で、命尽きむとする妻の顔だけがほの白く浮び上つて来るやうな迫真の力があります。

第六首目は幼い兄弟が、幼いなりに苛酷な母の死といふ現実に直面して、一心に「母の脛」をさすつてゐる。兄は兄なりの現実理解の深さを以て、少しでも母の病苦を軽くしようと、ひたむきに尽してゐる。「写真」といふやうな言葉では言ひ尽せない、短歌の表現力を感じさせます。

第七首目は、既に妻の「死」が現実となつた時点の歌です。末の子はもはや握るべき母の足頸を持たぬ子になつてゐるのです。

最後の歌の「よしゑやし」は耳馴れぬ語ですが、「ま、よ、どうならうとも」といふ意味、「捺落迦」は普通「奈落」といひます。地獄の意味です。「ま、よ、地獄のほのほの底をさぐらうとも、再びお前に逢はずにおくものか」といふ意味です。不可能なことを知りつゝも、かういふ絶叫に似た歌を詠まざるを得なかつた作者の心情が偲ばれてなりません。人間は愛する人と、いつかは別れねばなりません。その耐へがたい苦しみは、「うた」といふ形に客観化することによつて、からうじて癒されるのではないでせうか。

歌会始のおうた

新年恒例の歌会始の儀が、今年は一月十四日、皇居の宮殿・松の間で行はれました。お題は「波」。雅子妃殿下のお歌が初めて拝読できることもあつて、テレビや新聞も華やかに報じました。約二万二千首の応募があつたと伝えられてゐますが、御製を始め入選歌の幾つかについて、感想を述べたいと思ひます。

天皇陛下

波立たぬ世を願ひつつ新しき年の始めを迎へ祝はむ

皇后陛下

波なぎしこの平らぎいしずえの礎いしずえと君らしづもるうりずん若夏の島

御製は大らかに国民に対して述べられた新年の御挨拶といった趣の一首です。しかし、「波立たぬ世を願ふ」といふ御表現には、歴代天皇の御製に必ず出て来る「世をおもふ」「世を祈る」

「世をたもつ」と同じみ思ひがこめられてゐます。「世」とは天皇にとつて御自身の「治世」であり、その平安を保つためには一年を通じての宮中祭祀の厳修があることを忘れてはならないでせう。皇后様のみ歌は、昨年四月沖繩御訪問の折の、過ぐる大戦での戦没者たちへの鎮魂のみ思ひを述べられたものです。「人ら」と一般化せず、「君ら」と直接的に敬語を使つてをられること、沖繩の方言で初夏を意味する「若夏」といふ言葉を使つてをられる点にも、沖繩の人々への並々ならぬみ思ひの深さを感じます。両陛下のお歌から、自然に思ひ出されたのは、昭和五十年の歌会始の先帝陛下の御製「わが庭の宮居みやゐに祭る神々に世の平らぎを祈る朝々」の一首でした。

皇太子殿下

我が妻と旅の宿より眺むればさざなみはたつ近江の湖うみに

同妃殿下

君と見る波しづかなる琵琶の湖うみさやけき月は水面みづおし照る

昨年八月、滋賀県にお揃ひでお出ましになつた折、琵琶湖畔に宿泊された時のみ歌です。皇太子殿下のみ歌の「さざなみ」は美しい姫君をめとられたお心の脈動が伝はつて来るやうです。

雅子妃殿下のみ歌の下の句は、明るい月光が湖面一面に照り輝いてゐるといふ意味で、全体として歌がらが大きく、堂々とした声調を持つ一首です。大津は壬申の乱（六七二）の敗者の立場にあつた近江朝の所在地であつたところから、古来、人麿の「近江の海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしものいにしへ思ほゆ」のやうな悲歌を生む風土でしたが、お二人の唱和のみうたは、また新しい感動を与へて下さつたやうです。

船べりを離すなと妻に声かけて横波冠りし船たてなほす（宮崎県 森 治平）

荒波のために海中に投げ出された妻に、船べりを離すなと声をかけつつ、必死の思ひで傾いた船の位置を立て直してゐる、さういつた漁業に生きる人のいのちを賭けた海との戦ひが詠まれてゐます。かういふ生活者の叫びが歌を通して直接天皇のお心につながつてゆくのは、何といふ厳肅さでせうか。

荒磯の次なる大波はかりつつ声掛け合ひて岩の海苔採る（山口県 松原キク）

これもまた、海に生きる生活者の歌です。打ち寄せる大波と大波との間の、僅かな時間のす

きまを計りながら、岩場で海苔を採つてゐる数人の女性、お互ひに声を掛け合ひながらの緊張した瞬間が詠みとられてゐる一首です。前の歌と同様に、こゝにもいのちを賭けたいとなみの美しさがあります。

此の波のはてに祖国の美しと孫に語らひよはひかさねる（ブラジル 村岡虎雄）

入選歌は年長順に発表されますが、このブラジル在住の方は最年長の方で、昨年十一月に、この光栄の入選の知らせを待たずに逝去された方です。一読して私は涙の溢れるやうな感動を覚えました。移民でブラジルに渡つた一世の方が、孫に向つて、この波の果てに美しい祖国があると語り伝へながら、年齢を重ねてゆくといふ意味の歌ですが、作者には恐らく死への予感があつたのでせう。余談ですが、敗戦直後の昭和二十二年のお題は「あけぼの」でした。その入選歌の中に、ロスアンゼルス在住の方の「あけぼのの大地しつかと踏みしめて遠くわれは呼ぶ祖国よ起てと」の一首がありました。「祖国」何といふなつかしい言葉でせうか。

（「祖国と青年」平成六年三月号）

春の歌

四季の循環が、日本人の美意識に与へる影響の大きさは、何よりも勅撰集の分類が春の歌から始まつてゐるといふ事実が、明白に語つてゐます。陽春四月、古人は春の情感をどのやうに歌つてゐるのでせうか。

志貴皇子の權の御歌一首

石いはばしる垂水たるみの上のさ蕨わらびの萌え出づる春になりにけるかも

志貴皇子は天智天皇の皇子、この一首は万葉集卷八の巻頭を飾る名歌です。「權よろこび」が具体的に何を指すかは明らかではありませんが、さういふ実生活上の事実は余り問題にはならないでせう。「石いはばしる」は、石の上を激しく流れるといふ意味で、「垂水」の枕詞といはれてゐます。「垂水」は瀧の意味、「上」はほとりといふ意味です。「さ蕨」の「さ」は接頭語といはれるものですが、この一語によつて、いかにも萌え出たばかりの、やはらかな蕨といふ語感がかもし

出されます。それにしても、激しく流れ下る瀧のほとりに蕨の萌え出す春になつたなあと、一直線に詠み下した声調の、何といふ生動感に溢れた一首でせうか。民族の青春期の象徴的な表現といつても過言ではないと思はれます。

穂たかの芽のほどもに春のたけ行けばいまさらさらに都し思ほゆ（長塚 節）

長塚節たかしは子規晩年の門下、後に「アララギ」の中心歌人の一人になる人ですが、この一首は明治三十五年春、彼の二十五歳の時の作品です。詞書には「四月末には京に上らむと思ひ設けしことの叶かなはずなりたれば心悶もだえてよめる歌」とある九首の連作の中の一詩です。病床にある子規への思ひがこめられてゐるのは勿論です。子規の死の半年ほど前の作といふことになります。「穂たかしの木は、山野に自生する喬木きやうぼくで、その若葉はうどに似て芳香ほうこうがあり、食用に供されます。「ほどもに」は固く緊しまつたものがゆるむ状態です。「都し思ほゆ」の「し」は強意の助詞、「思ほゆ」の「ゆ」は自発の助動詞といはれるもので、都の先生のことか思はれてならないといふ意味になります。節はこの頃、盛んに万葉の研究をしてゐましたので、全体あづまうたに東歌風なりズムがその影響の跡を示してゐて、相聞の歌といつてもよいやうな情感がうたはれてゐます。

子規は節が送つてくる「たらの芽」を楽しみにしてゐたやうで、死の前年には「春ごとにた

らの木の芽をおくりくる結城ゆふきのたかし吾は忘れず」の一首があります。結城は茨城県結城郡、節の住所です。節は子規の死の翌年「めでぬべき人もあらぬに徒らいたづらにもえぞ立ちぬるそのたらの芽を」と、賞味してくれる人のゐないたらの芽を嘆いてゐます。

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草に日の入る夕べ（北原白秋）

白秋の第一歌集『桐の花』（大正二年）の巻頭におかれてゐて、近代短歌の名作の一つに挙げられる一首です。白秋は詩人としての出発が『邪宗門』や『思ひ出』のやうな、異国情緒の表出によつて行はれたこともあつて、もつぱら短歌といふ器に西洋風の感覚を盛ることに力が注がれました。筆者は少年期にこの一首に触れて、新鮮な感覚に魅せられたことを覚えてゐます。しかし、白秋が所屬してゐた新詩社の詩風は、子規系統の現実生活の写実に重点を置く詩風とは、全く対照的でした。この歌の「な鳴きそ鳴きそ」の「な……そ」は禁止の意味で、鳴いてくれるなといふ意味です。戸外の草原に赤い夕日が沈んでゆく夕暮、春の鳥よ、悲しげな声で鳴いてくれるなといふ意味です。印象派の油絵を見るやうな一首ですが、観念の世界で作り上げた別次元の世界で、生活感情とは切り離されてゐます。底深い感動の生れぬ理由でせう。

高槻たかつきのこずゑにありて頼白たのしろのさへづる春となりにけるかも（島木赤彦）

赤彦は茂吉と共に、「アララギ」を歌壇の主流に押し上げた中心歌人でした。彼は気質的にも禁欲的、求道者的だつたので、子規の写実、写生の道を徹底して実践した一人でした。その短歌創作の精神は「鍛練道」といはれ、後続の歌人たちから一つの指標として敬仰けいぎやうされました。この一首は大正十二年、彼の晩年に近いころの連作「春」十五首の冒頭の一首です。歌意は明瞭で説明の要はないでせう。一首一文を原則とする短歌の詠み方の典型的なもので、一気に詠み下してゐます。万葉の研究に心魂を打ち込んだ彼は、志貴皇子の歌のしらべを己おのがものとして、この一首を生み出したのでした。

（『祖國と青年』平成六年四月号）

台湾に生きる短歌

朝日新聞の「折々のうた」で、大岡信氏が『台湾万葉集』の中の数首をとり上げて論評してゐました。今では異国である日本の旧植民地で、今もなほ短歌が人々の感情を盛る器として存在してゐることに驚きを感じたものでした。反響の大きさもあつて、集英社から日本版が出版されましたが、その編者孤蓬萬里こほうばんりといふ方は医学博士で本名呉建堂ごけんどうといふ方です。その方は『台北歌壇』といふ歌誌を出してをられますが、いはば『台湾万葉集』の源泉となつたこの歌誌を、最近名越二荒之助なごしふたらのすけ氏の厚意で借覧する機会を得ました。私が瞥見したのは百十輯しじゅうじゅうでしたが、その巻頭言によつて、なぜ短歌が台湾の地に根づいたかを知らされた次第です。

孤蓬萬里氏と短歌の結びつきは、氏が半世紀も前に、旧制台北高等学校の生徒として、二人のすぐれた師にめぐり合つたことから始まりました。その一人は英文学を教へてゐた島田謹二、後年『ロシアにおける広瀬武夫』、『アメリカにおける秋山真之さねゆき』の名著で、戦後比較文学といふ新しい学問の領域を拓いた人です。講義の中で何気なく短歌の話をしたのが印象に残つたと記してゐます。もう一人は国文学の犬養孝いぬかたかし、後年の万葉研究の第一人者です。今日、台湾に短歌

といふ異国の詩型が存在してゐる遠因は、実にこの二人の大家の若き日の弟子への影響に依るといへませう。今、『台北歌壇』から心にとまつた何首かを抄出して鑑賞することにしませう。

靖国の樹々渡る風に啜り泣く声混るか
と聞き耳を聳つ

兵籍のなき教職に安穩と次々と逝く
若きらを見き

軍国に些かゆかりありし我靖国神社に
柏手を打つ（鄭垠耀）

作者は戦時中教職にあつて、若い人たちを兵士として送り出した人のやうです。それにしても、これが日本の支配した旧植民地の人の歌と誰が信ずることができませうか。反戦イデオロギーで心の曇つた日本人よりも、遥かに敬虔な思ひで靖国神社に額づいてをられるではありませんか。

わが唄ふ「螢の光」の四番は「台湾の涯も樺太も」とあり

空征くと夕焼を前に大車輪繰り返したりわが少年期

テレビなる出撃の景に座を正し暫し手を振る特幹我は（蕭翔文）

一首目は多少の解説を要するでせう。「螢の光」は二番まではよく歌はれますが、三番、四番を知る人は現在では極めて少数でせう。明治十四年に作られたこの小学唱歌の四番は「千島のおくもおきなほも／やしまのうちのまもりなり／いたらむくににいきをし／つとめよわがせつつがなく」とあります。北千島と沖縄は日本の防衛の第一線である。どこの地へ行かうと、雄々しく、わが先輩たちよ無事つとめて下さいといふ意味です。恐らく日露戦争以後は「千島のおくもおきなほも」が「台湾の涯も樺太も」と歌ひかへられたのでせう。作者の胸には、今もこの歌詞がなつかしく生きてゐるのでせう。二首目は、飛行兵としての鉄棒の訓練を詠んでゐます。ひたむきな少年の姿が鮮かに蘇つて来るやうです。三首目はテレビで特攻隊の出撃を、坐り直して凝視してゐる姿です。「特幹」とは耳馴れぬ言葉ですが、「特別幹部候補生」の意味です。学生として志願して航空隊に入られた方でせうが、過ぐる戦争への呪咀や怨念のやうな暗い感情がなく、淡々と往時の思ひ出が詠まれてゐて、それがかへつて心に響いて来るやうです。この人には『台湾万葉集』の中に「わが散るは何時の日ならむ僚鷲ともわしの日に日に減るとじつと空見る」の一首がありますが、戦争中に台湾人であつたがための、悲しみや屈辱はきつとあつたに違ひありません。さういふ内的葛藤を超えて、現在の心境に至つた軌跡きせきを思ふと、われわれ日本人にはただならぬ感懐かんかいが湧いてまゐります。

当然のことながら、日本語に習熟し、短歌を詠むことができるのは、既に七十歳前後の方々

で、老いの日常が主要な素材となります。

五年毎の同窓名簿作成を再び手伝ふ日の吾にありや（林美）

杳とほき日は患者溢れし診療室老医師今は新聞広ぐ（林禎慧）

日の本の皇后の眼に止りたるわが万葉の一冊抱く（高阿香）

日本の書籍も演歌も食べ物も全てある台湾国交のみなし（張嘉英）

何と自在でしたたかな詠みぶりでせう。

（『祖國と青年』平成六年五月号）

東歌の美しさ

『万葉集』巻十四には、東国農民の間にうたひつがれたと思はれる二三〇首の民謡的性格の歌が収録されてゐます。その発想の素朴さや、自然との一体感は、個性の鮮明な個人の創作歌とは異質なもので、万葉歌風の裾野すその広さを示してゐます。「アヅマ」とは、当時の文化の中心であつた大和から東の方を指してゐましたが、万葉では「遠江」とほじふみ（静岡県）、「信濃」しなの（長野県）以東を指してゐます。「アヅマ」の語源はよく分りませんが、『古事記』では倭やまと建命たけるのみことが、御自分の身代りに走水海はしみづに入水じゆすいされた弟橘おとたちばなひめ比売ひめを偲おもんで「吾妻あづまはや」と叫こゑばれたところから出た地名伝説を伝へてゐることは周知の通りです。これら東国民謡の収集に大伴家持おほともをやかもちが関与してゐたのではないかと言はれてゐますが、仮にさうであつたとしても、できる限り原型の再現が企図されたことは疑ないことと思はれます。それらの中から、心に残る数首を鑑賞することになります。

多摩川にさらす手作りてづくさらさらになにぞこの児のここだ愛かなしき

「多摩川にさらす手作り」までは、短歌の技巧の一つである「序詞」です。「さらす」から、同音異語の「さらさらに」を導き出す修飾句なのですが、単に形式的な修辭ではなく、農民の生活の実質的表現であるところに注目すべきでせう。「手作り」とは手織りの布を意味します。「さらさらに」とは、くり返しくり返し、どこどこまでもの意味です。「ここだ」は、こんなにも甚だしくの意味です。清らかな多摩川の水にさらす手織りの布ではないが、さらさらにどうしてこの児がこんなにもいとしいのだらうといふのが全体の意味でせう。恐らく農民の労働歌の一首だつたのでせうが、「さらす手作りさらさらに」の部分の韻律がまことに清らかで、恋の心情が直叙されてゐて、忘れがたい一首です。

鳩鳥にほどりの葛飾かつしか早稻わかせを饗にへすともそのかなしきを外とに立てめやも

「鳩鳥」はカイツブリのことで、水に「潜く」ところから、同音異語の「葛飾」を導き出す枕詞です。葛飾は今も残つてゐる江戸川流域の地名です。こゝでも鳩鳥は単なる形式的な言葉ではなく、農民の目に触れる親しい鳥だつたのでせう。今宵は葛飾で穫れた早稻を神々に供へて、新嘗にいひなめの祭りをする神聖な夜です。その神に仕へる私以外の人は家に入れるわけにはゆきませぬが、それでもいとしい方を外に立たせておくことができませうかといふ意味です。稲の神聖性

を保証する禁忌と、それを破らうとする愛情の葛藤が極めて自然にうたはれてゐて、深刻でない大らかさが民謡の特長と思はれます。現在問題になつてゐる「米」の問題は、このあたりまで溯つて考へるべきではないでせうか。「米」は神との関連なしには考へられなかつたほど、日本人にとつて深い文化的意味を持つてゐたといふべきでせうか。

稲つけば輝る吾が手を今夜もか殿の稚子が取りて嘆かむ

「輝る」はあかぎれがするといふ意味、「殿の稚子」はお屋敷の若様といった意味です。身分の違う男女の、女の側からの恋歌です。毎日稲をついてゐるので、すっかりあかぎれのしてしまつた私の手を、今夜もまたお屋敷の若様が取つて嘆かれることでせうといふ意味になります。前の歌が稲の神聖性を抜きにしては考へられなかつたやうに、この歌は米の生産が若い娘たちの激しい労働に支へられてゐたことを、何より雄弁に語つてゐます。そして、こゝには苦勞としての労働を支へてゐたつましい愛情の姿があります。このやうな歌も、娘たちの労働の中で集団として歌はれてゐたのでせう。「輝る吾が手」といふ具体的表現がこの歌の感動の核心をなしてゐます。

信濃道しなのぢは今の壘道はりみち苜蓿かりばね株くわに足踏あしふましなむ沓くつはけわが背せ

信濃道は美濃から信濃へ通じる道で、大宝二年（七〇二）から十二年かけて開通しました。

「今の壘道」は新しく開墾された道、「足踏ましなむ」はお踏みになることもありませうの意味です。「背」とは「妹」の対語で女性から男性への呼びかけの言葉です。信濃道は新しく開墾された道ですから、木の切り株をお踏みになることもありませう。どうか怪我をしないやうに沓をはいていらつしやいなあなた、といふ意味です。何といふ可憐な、いとしみの溢れた歌でせう。短歌といふものの原型を示してくれる一首ではありませんか。

（『祖國と青年』平成六年六月号）

（一）米輸入自由化の問題

芥川龍之介の短歌

七月二十四日は、河童忌かわぼきつまり芥川龍之介の忌日です。彼は、理智派とか、新技巧派と呼ばれて、反語や逆説を駆使する知的な作家といふイメージが定着してゐます。彼は作家であると同時に俳人としても一流で、「明眸めいぼの見るもの沖の遠花火」などの句を読むと、その形式美と感覚の新鮮さが群を抜いたものであつたことがよく分ります。ともすると俳句のかけにかくれてしまふのですが、彼には青年期から晩年まで、短歌形式に対する一貫した愛着が見られます。理論的に処理された粹の底の方には、短歌的な抒情じじょうが息づいてゐたと言つても決して過言ではありません。福田恆存つねあり氏はその秀れた芥川論の中で、それを「日本的優情」と言つてをられます。

佐々木信綱が主宰してゐた短歌結社竹柏会から出てゐた歌誌『心の花』に、芥川が「大川の水」といふ小品を掲載したのは大正三年のことでした。この小品は、彼が自己の幼少年期の感覚をはぐくんだ墨田河かはん畔の風物を、回想的に描いたものですが、執筆は一高の学生だつた明治四十五年のことでした。その感覚的な文体は、前年に出た北原白秋の第二詩集『思ひ出』の序

文、「わが生ひ立ち」の圧倒的な影響の下に成立したものであることは諸家の指摘する通りです。このことは、彼が高等学校の学生だった頃までは短歌においても散文においても、白秋を除くしては考へられぬほど強い影響を受けてゐたあかしであり、全集所収の短歌の中には白秋模倣の多くの短歌が残されてゐます。

やがて大学に進んだ彼は、大正三年夏に、斎藤茂吉の『赤光』との運命的な出会いの経験を持ちます。後年、「僻見」といふ題で短文を発表しますが、その第一回「斎藤茂吉」の中で「僕の詩歌に対する眼は誰のお世話になつたのでもない。斎藤茂吉に於けて貰つたのである。(略)且又茂吉は詩歌に対する眼をあげてくれたばかりではない。あらゆる文芸上の形式美に対する眼をあげる手伝ひもしてくれたのである」と、ほとんど手ばなしの鑽仰の言葉をつらねてゐるのです。これ以後、茂吉への心酔は終生続くのですが、晩年は医者と患者といふ関係で茂吉から面倒を見てもらつてもゐます。しかし、芥川にとつて、茂吉の持つ東北人特有の土着的エネルギーは、所詮異質のものでした。三十歳前後の芥川の短歌には、彼独自の静かな自然回帰の歌があつて、凡そ意識家、逆説家といつたイメージとは遠いものがあります。今、その何首かを味はつてみたいと思ひます。

枝蛙木ぬれひそかに鳴く声のきよらなるかも道細りつつ

即景

手水鉢の水にいささか濁り立ち南天の花は咲きすぎにけり

湯河原温泉

おぼろかに栗の垂り花見えそむるこのあかつきは静かなるかな

閑庭

秋ふくる昼ほのぼのと朝顔は花ひらきたりなよ竹のうらに

朝顔のひとつはさける竹のうらともしきものは命なるかな

椎の木

さ庭べに冬立ち来らし椎の木の葉うらの乾きしるくなりけり

室生犀星君に

遠山にかがよふ雪のかすかにも命を守ると君につげなむ

改めて歌意の説明は要しないでせうが、近代小説の世界が何らかの意味で、エゴとエゴの息苦しい闘争を描かざるを得ないといふ宿命の中で、これらの小さな自然が、どんなに救ひを与へたか、思ひ半ばに過ぎるものがあります。これらの歌の声調は、もはや白秋でも茂吉でもな

く、芥川その人の息づかひが感じられます。

なほ一つ言ひそへておくことがあります。万葉の歌体には、短歌、長歌の外に旋頭歌せどうかといふ形式があります。五七七・五七七といふ形です。芥川はこの形式を使つて、彼の詩心の最高の燃焼といはれる「越こびと」二十五首を『明星みょうじょう』大正十四年三月号に発表してゐます。「越こびと」とは、彼の思ひ人の一人であつた片山広子夫人（歌人・アイランド文学研究家）で、彼女に対する美しい相聞歌です。

あぶら火のひかりに見つつ心悲しも、

み雪こしふる越路こしぢのひとの年ほぎのふみ。

現まし身を歎けるふみの稀になりつつ、

み雪こしふる越路こしぢのひとも老いむとすあはれ。

近代文学の旗手といはれる人の中に、かういふ形が生きてゐたのは驚きの外ありません。

（『祖國と青年』平成六年七月号）

国敗れし日

物ごころついた年令であの日を経験した人たちも、遙かに還暦を超える年になつてしまひました。しかし、それらの人たちは、昭和二十年八月十五日の、あの真夏の紺青こんじやうの空に燃えてゐた太陽と、一瞬日本全土を覆つた深い静寂を終生決して忘れないでせう。

既に七月二十六日には、日本に対する降伏勧告文書であるポツダム宣言が発表されてゐました。広島、長崎への原爆投下に加へて、中立条約を一方的に破棄したソ連軍が怒濤のやうに押し寄せてゐました。さうした絶望状態の中で、抗戦派と和平派が鋭く対立して、御前会議は難航を極めました。昭和天皇の「聖断」によつて戦争終結が決定し、ポツダム宣言受諾が決定したのは八月十四日でした。昭和天皇は自ら「終戦ノ詔書」を録音され、八月十五日正午から、ラジオを通じて全国民に訴へかけられました。若い方には耳馴れぬ言葉ですが、それは「玉音ぎよくおん放送」といはれました。とぎれとぎれのその「玉音」を聞いた時の千万無量の思ひは、今再現することは困難ですが、残された歌は今もなまなましくその一瞬の思ひを蘇へらせてくれます。

雑音のまじるラジオに大御声おほみこ聞きすましめて刻々苦し（井上健太郎）

炎天の焦土に声なし一切のことやみたりとわれこゑをのむ（鹿児島壽蔵）

戦は悲しきをはり告げにけり玉音時にくもらせたまふ（内藤清子）

かすかなる民の一人とつしみて御声のまへに涙しながら（佐藤佐太郎）

歌意は説明の要なく明瞭でせう。流れてゐる時間が一瞬停止し、深い奈落の底に落ちこむやうな当時の思ひを、これら数首の表現の中から追体験していただきたいのです。国が破れるといふ現実が、言語に絶する悲しみを誘ふことは、次の一首などが鮮やかに語つてくれます。

炎熱の道に落ちゐる吾が影のあなかなしもよ国破れたり（森田清美）

子をなくした母や、夫を戦地に送つてゐた妻たちの八月十五日の思ひも、痛恨いたどに彩られてゐました。さういふ母と妻の歌です。

三人の子国に捧げて哭なかさざりし母とふ人の号泣を聞く（二上範子）

征かしめし君のたよりのなきままに今日終戦の報を聞きたり（稲月文子）

これらの無名の女性たちの、戦後の歩みが偲ばれてなりません。歌人の^{しやくちようくう}釈道空は本名折口信夫、高名な民俗学者であることは周知の通りですが、彼もまた同じ嘆きを次のやうに詠んでゐます。

老いの身の命のこりてこの国のたたかひ敗くる日を現目に見つ

彼の歌と学問の後継者であり、彼がこよなく愛してゐた養子の折口^{はるみ}春洋は、硫黄島の激戦で戦死してゐました。「老いの身の命のこりて」の一句には、釈道空の断腸の思ひがこもつてゐるのです。

敗戦に伴つて、各部隊では軍旗の焼却が行はれました。軍旗は天皇が手づからお下しになるもので、軍隊の団結の神聖な象徴でした。「軍旗奉焼」——何といふ悲劇的な体験でせう。

降伏といふはまことか宮庭に昨夜^{よべ}に変わらぬ月照りみてり（松本富治）
御手づから賜ひし軍旗火もて焼くかかる悲しき日に会ひにけり（菊地劍）

内外地併せて約四五〇りゅう旒の軍旗が焼かれたといはれてゐます。八月十五日を境に何か大きなものが音を立てて崩れ去つた感じがしてなりません。国破れて山河ありと言ひますが、囑しよく目の風景は昨日に少しも変わらないのです。

何といふ赤い夕陽ぞ長き長き戦のはてに祖国破れたり（香田寿男）

入つ日は原の尾花を透すかしたりもはやうつつに戦ひはなし（門脇正樹）

かうして戦後といふ時代が始つたのですが、遂に戦から還つて来なかつた息子を詠んだ次のやうな母の歌があります。

玄関に在りし日のまま角帽を掛けて三とせや還り来ぬ子の（山隅福代）

侵略戦争談義にうつつをぬかす政治家諸公に、これらの一首でも読ませたいものです。

（『祖國と青年』平成六年八月号）

両陛下御訪米と短歌

平成六年六月の両陛下の御訪米は、十日の御出発から二十六日御帰国まで、十七日間、その間十一都市を御訪問になり、五十三回の公式行事をこなされるといふ、われわれ庶民には想像を絶したハード・スケジュールでした。御訪米に先立つて行はれた六月三日の記者会見で、皇后様は次のやうに発言なさつてをられます。

言葉を失つたことへの不安と悲しみが日に日に大きくなり、発言や発声や発語の練習に励む一方、回復への希望を失ひかけた時期もありました。(中略)優しくありたいと願ひながら、疲れや悲しみの中で固く、もろくなつてゐた自分の心を恥づかしく思ひ、心配をおかけしたことをおわびし、励まして下さつた大勢の方々⁽¹⁾に厚く御礼申し上げます。

昨年突然言葉を失はれてからの、初めての御自身による御病氣中の御氣持の告白でしたが、なほ一抹の不安を残しての御出発でした。しかし、この不安を見事に克服され、荷はれた大きな責務を見事に果されたのでした。御訪問の最後はハワイでしたが、両陛下にレイを贈つた大柄なハワイ女性は、横綱・曙の母ジャニス・ローウェンさんでした。「皇后さまは、曙は強いで

すね、と息子を褒めてくれましたが、そのまなざしの温かかったこと。思はずハワイの習慣で、皇后さまを抱きしめてしまひさうになりました」と彼女は興奮さめやらぬ面もちで語ってくれたといひます。この小さなエピソードが、御訪米の真の意味を象徴的に語つてゐるのではないでせうか。

御訪米のハイライトは、何といつても六月十三日、ホワイトハウス南庭にしつらへられたお立ち台で、威儀を正した儀仗兵ぎじやうへいに向つて、右に天皇陛下、左にクリントン大統領が立つて始まつた歓迎式典でした。この式典のお二人のスピーチが、いづれも和歌を仲介としたエールの交換となつたのは、誠に心あたたまるものがありました。大統領は幕末の歌人橘曙覧たちばなあけみの歌を引用したのでした。この無名の歌人を初めて世に紹介したのは正岡子規でした。子規は曙覧が詠歌の規範を万葉に仰ぎ、赤貧せきひんの中にも虚飾のない真率な歌を詠み続けたことを高く評価しました。曙覧は、宣長の系統を引く国学者で、松平春嶽しゆんがくの和歌の師でしたが、熱烈な勤王歌人でもありました。「天皇は神にしますぞ天皇の勅すめらみことといはばかしこみまつれ」といふ歌は、戦時中でははやされましたが、今は顧みる人もありません。しかし、大統領の引用歌が、勤王歌人の一首であつたことに改めて注目させられます。曙覧の「独楽吟どくらくぎん」といふ五十余首の中には次のやうなものがあります。

たのしみはつねに好める焼豆腐うまく煮たてて食はせけるとき
 たのしみは銭ぜになくなりてわびをるに人の来りて銭くれし時

子規はこれらの歌の童心と正直さに深く感動してゐます。大統領が引用した一首は、この「独楽吟」の中の一首です。

たのしみは朝おきいでて昨日まで無なりし花の咲ける見る時

大統領はこの一首を「一日一日新たな日とともに確実に新しい花が咲き、物事が進歩し、日米両国民の間の友情をはぐくむ」と解釈したのでした。

これに対して、陛下は答札のスピーチの中で、「当時、貴国に対し我が国が持った関心の深さは、ベンジャミン・フランクリンの十二の徳目を題として、私の曾祖父、明治天皇の皇后、昭憲皇太后によつて和歌が詠まれてゐることからもうかがへます。この歌の詠まれた時期がまだ貴国との国交成立から二十数年しかたつてゐない時のことであることを考へると、深い感慨を覚えます」と述べられました。日米交流史の初期に『フランクリン自伝』の中の十二の徳目について、昭憲皇太后が和歌を詠(2)まれたのは、明治九年、御年二十七歳の時でした。フランクリ

ンはいふまでもなくアメリカ独立宣言の起草者の一人であり、アメリカ建国精神の最も純粹な
體現者でした。

それにしても、まだ西南の役以前の、政情不安な状況の中で若い皇后が、節制、清潔、勤勞、
沈黙、確志、誠実、温和、謙遜、順序、節儉、寧靜、公義などの道德的觀念を、たをやかなや
まところばで表現されたといふ文化力は驚嘆の外ありません。咲き乱れた満開の花はそれとし
て、咲きそめた桜に習ひたしと詠まれたお歌。

温和

みだるべきをりをばおきて花桜まづゑむほどをならひてしがな

〔「祖國と青年」平成六年九月号〕

(1) 皇后陛下は、五十九歳のお誕生日をお迎えになられた平成五年十月二十日午前、御
所で突然お倒れになり、お言葉がお出にならない状態になられた。皇后陛下はお誕
生日をお迎えになられるにあたり、宮内記者会からの質問をお受けになられたが、

週刊誌などの皇室批判記事について「事実でない報道には、大きな悲しみと戸惑いを覚えます」と異例のご感想をご発表になられていた。

(2) 昭憲皇太后の御歌は次のとおり。(『類纂 新輯昭憲皇太后御集』より)

節制

花の春もみぢの秋のさかづきもほどにこそくままほしけれ

清潔

しろたへの衣のちりは払へどもうきは心のくもりなりけり

勤勞

みがかずば玉の光はいでざらむ人のこころもかくこそあるらし

沈黙

すぎたるは及ばざりけりかりそめの言葉もあだにちらさざらなむ

確志

人ごころかからましかば白玉のまたまは火にもやかれざりけり

誠実

とりどりにつくるかざしの花もあれどにほふこころのうるはしきかな

温和

みだるべきをりをばおきて花桜まづゑむほどをならひてしがな

謙遜

高山のかけをうつつしてゆく水の低きにつくを心ともがな

順序

おくふかき道もきはめむものごとの本末をだにたがへざりせば

節 儉

呉竹のほどよきふしをたがへずば末葉の露もみだれざらまし

寧 静

いかさまに身はくたくともむらぎもの心はゆたにあるべかりけり

公 義

国民をすくはむ道も近きよりおし及ぼさむ遠きさかひに

山川京子歌集を読む

去る五月、短歌結社「桃の会」の主宰者、山川京子さんの歌集が出版されました。昭和十八年から平成六年まで、五十年間の全作品が収録された七三〇頁余りの大冊です。不思議な御縁でこの歌集の御恵贈を受けた私は、一読して深い感動に打たれました。

山川さんが中河幹子夫人に入門して、作歌活動を始められたのは昭和十七年のことでした。昭和十八年、折口信夫しのぶ、保田與重郎やすだ よじゅうろう氏などから、その才能を高く評価されてゐた、夫君山川弘至氏と結婚されましたが、婚約、応召、結婚と続いた束の間つかの新婚生活だつたやうです。弘至氏は昭和十八年七月応召、終戦直前には台湾の屏東飛行場の暗号班に勤務してをられました。が、八月十一日、敵機の爆撃のため戦死されました。夫君の入隊によつて離ればなれの境遇におかれながら、お二人は歌と書簡の交流によつて、稀有な愛情を育てて行かれたやうです。この短い期間に育てられた初心が、山川さんの五十年の作歌活動を支へた原点であることを確認したとき、人間の愛の極限を垣間見る思ひがしました。

恋といふめでたきものを知らしめてすなはち君を召し給ひけり
ますらをと仰ぎまつりて契りにしわが背はまこと違はざりけり
をとめにはあらず日毎を夫と棲む妻にもあらぬ吾と知りませ
なべてみなここだ愛しと吾に恋ひしかの日の君が瞳思ほゆ

お二人のいのちが、東の間に触れ合つた時の感動が、これらの数首に歌ひ上げられてゐます。
四首目の「なべてみなここだ愛し」とは、君のすべてがひどく美しいといふ意味でせう。気
品と節度に支へられた美しい相聞です。

よきくと南のたよりにのたまへど恋ひや給はむふるさとの秋
はしきやし君がかへらすときのため残さむいのち吾と愛しみつ

「はしきやし」といふ古語は、いとしいといふ意味です。かうして、ひたすら帰りを待つて
をられた山川さんに運命的な戦死の知らせが届きます。

たまきはる生命まさきくいませかし君が生死をいまきかむとす

さにづらふ丹の頬の君がうつそみはこの世のものにあらざりしかな
やがてゆく日のいたるまでみそらよりこの世の吾にそひて護らせ
いまひとたび呼びびて給ひねうつつなるみこゑもて吾をあが名をやよ君

一首目の「たまきはる」は、いのちにかかる枕詞です。そのいのちが幸であれと祈り続けて
ゐた人の、生死を今聞かうとしてゐるといふ意味です。二首目の「さにづらふ」は枕詞で「紅
顔」の意に使はれます。紅顔の君はすでにこの世の人でないといふ嘆かひの歌です。四首目の
「あが名をやよ君」の「やよ」は呼びかけのことば、「さあ、私の名を君よ」といふ意味です。
今ひとたび、その肉声を聞きたいとは、遅れた者がひとしく願ふ切実な思ひでせう。

かういふ凝縮した夫君への思ひは、集中いたるところにちりばめられてゐます。囑目の花に
も、耳に聴く風の音にも、山川さんはふと亡き人を思ひ出してをられます。

声かぎり呼べばあらはるるひとならば御名も呼ばむ山揺るるほど
うつしゑの君ひたすらにうら若し老のなげきは知りたまふなく

かうして生きて来られた山川さんが、弘至氏戦死の地、台湾屏東飛行場を訪れてその死を確

認されたのは昭和四十七年のことでした。実に二十七年の歳月が経つてゐました。

おんつひの時を思ふに堪へられずありしままとふこの耐爆壕

「おんつひの」とは「御最期の」といふ意味です。その日のままの耐爆壕を山川さんは無量の思ひで凝視されたのでせう。平成五年は結婚後五十年、夫君のこの世にいますやうに、有志の方々によつて金婚式が行はれました。

靖国の宮居にわれらの金婚をこしほ寿きたまふおほけなきけふ

まことに、この世にあらざる如き至純の愛が、五十年の歳月を貫いて成就されたのです。

（『祖國と青年』平成六年十月号）

明治短歌の一側面

日本人の祖国防護の悲願を、底ごもるやうなしらべに歌ひ上げた一首の名歌があります。

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を

これは、昭和二年演習中に沈没した駆逐艦「蕨」^{わらび}の機関長福田少佐の殉職を悼んで作られた連作中の一首ですが、作者三井甲之^{こうし}といふ歌人については一部を除いて殆んど知られてゐないのではないでせうか。

子規没後、根岸短歌会は伊藤左千夫が主宰する『馬酔木』^{あしび}といふ機関誌を持ちますが、そこに短歌を寄稿して同人となつたところから、甲之の歌人としての活動が開始されます。従つて、甲之は子規の直接の門人ではありませんが、その歌風や歌論の強い影響下にあつたと思はれます。明治三十六年創刊された『馬酔木』は明治四十一年に終刊となり、代つて『アカネ』が創刊されます。この『アカネ』に発表した甲之の短歌や歌論が、明治四十年代に抬頭して来る子

規系統の歌人に、いかに大きな影響を与へたかは、幾つかの客観的な資料によつて証明されま
す。しかし、やがて短歌の評価基準などについて、左千夫との間に齟齬を生じ、左千夫や茂吉
は『アララギ』へ結集することになります。甲之は『アララギ』の敵対者として、論難の対象
になります。大正、昭和を通じて、『アララギ』の歌壇に於ける影響力は絶大なものがありまし
たから、それだけ甲之の仕事は不当に貶せられて来たことになります。しかし、この短歌史、
思想史の上で特異な歩みをした甲之については、もつと研究されて然るべきだと考へます。

その甲之は明治四十一年、当時の一流の綜合雑誌であつた『日本及日本人』の歌壇の選者と
なりますが、その投稿者の中に岡田質といふ無名の青年がゐました。甲之はこの岡田質の連作
短歌に強烈な印象を受けたと思はれ、「岡田質兄に」といふ連作四首を作つてゐます。「さねさ
しさがむのくにの鵠沼の海べ忘れじ君のうたゆゑ」といふのが、その冒頭の一首です。岡田質
については、咯血して鵠沼で病を養つてゐた若い人といふ外には全く資料がありません。その
岡田質の連作短歌をあげて味つてみたいと思ひます。

夕べの涙

世のさだめもひて立つなぎさ日の落ちしひととき潮は雪のごとくに

日落つればにはかにさびし波の穂のしぶくわが顔ひえとほらむか

胸とざしこしかた思へこそ黒みゆく海にひそめるいのちの悲しさ
 あめつちのいのちのしるしかあかなしたちどふえくる夜潮よしほのひびき
 眼をとちてうづくまるなぎさしまらくは大地のゆるぎやまぬ思ひに
 ああ吾はかなしき君ゆゑうつし世のいのち追へこそなげきはやまぬ
 眼あぐれば風もつめたし海のもはいよいよくろめどなほさがりに

七首の連作ですが、夕ぐれの打ち寄せる怒濤を見つめて、病者としての宿命と愛する人への相聞の思ひを激しいリズムの中に歌ひ上げてゐます。「アララギ」の標榜する「客観写生」といふ姿勢とは違つた、激情のうちつけの表現があります。「いのち」といふことばがくりかへし使はれてゐることに改めて注意されます。自然のいのちと、うつし身のいのちが交響するところから、独特の悲劇的リズムが生れてゐるやうです。

第一首の「世のさだめもひて」は、自分の宿命を思つて、といふ意味でせう。第二首目には「さびし」といふ感情を表現する言葉が出て来ます。なるべくなまな感情を表現することばは抑制するがよいといふ説を立てる人もゐますが、「さびし」とか「かなし」といふやうな感情の直接表現の言葉が、センチメンタルリズムを越えるか否かは、作者のやむにやまれぬ衝迫の有無にあります。第三首目の「こしかた思へこそ」は、来し方（過去）を思へばの意です。海は作

者にとつて、生き物のやうな悲しいのちを湛へてゐるのです。第四首目の「たちどふえくる」は分りにくい表現ですが、自分の立つてゐる足もとに咆哮するやうな音を立てて打ち寄せて来る、といふ意味です。第五首目は解釈の要はないでせう。第六首目の「かなしき君」は「愛しき君」の意、「うつし世のいのち追へこそ」は、現世のはかないのちを生きついでゐるといふ意味でせう。七首目の「さがりに」は去ることができないで、の意味です。かういふ分析的説明が空しく思へるほど、この連作のもつ生命の生動性は直接的なものです。言葉に対する感覚をとき澄まさなければ、この明治の悲劇的青春のひびきは捉へられぬでせう。

万葉・大伯皇女の悲歌

初期万葉の作者の多くは宮廷の人でしたが、その中でとり分け悲劇的色彩の最も色濃い人は天武天皇の皇子（母は大田皇女）大津皇子といへるでせう。天武天皇が崩御され、正妃鸕野皇女（持統女帝）が後を継がれると直ちに謀反の企てがあつたといふ理由で詛語田の舎で死を賜ります。「賜死」の政治的背景は複雑ですが、皇太子草壁皇子（母は持統女帝）と宮廷を二分する声望があつたといふ理由だけで充分でせう。大田皇女と持統女帝は姉妹の間柄ですから、皇位継承に肉親間の葛藤も絡んで、一層悲劇的な様相を呈するのです。ともあれ、大津皇子は死に臨んで一首の名歌を残されます。この連載の第一回目で簡単に触れたことがあります、「大津皇子被死え給ひし時、磐余の池の陂にて涕を流して御作歌一首」といふ詞書を持つた、自らを悼む挽歌は次のやうな一首です。

ももつた
いはいはれ
百伝ふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ

時に大津皇子二十四歳。この悲歌のいのちに最も深い共鳴を示したのは、終戦直後に自決した少壯の国文学者蓮田善明であり、その蓮田に最晩年最も熱い敬仰の誠を捧げたのが、外ならぬ三島由紀夫であつたことを思ふと、一首の歌によつて示される血脈に肅然たる思ひを禁じ得ないのです。

大津皇子には、血を分けたただ一人の姉がありました。母君の大田皇女は、姉弟が七歳と五歳くらゐの幼い頃に薨こじてをられますから、二人は恐らく肩を寄せ合ふやうにして生きて來られたに違ひありません。祖父に当る天智天皇のもとで、姉の大伯皇女おほくのひめをこと弟の大津皇子は深い絆を確認されたこととせう。皇女は、天武天皇二年の十月、十四歳の少女の身で、齋宮いつきのみやとして伊勢に下られます。齋宮とは天皇に代つて伊勢の大神宮に仕へる重要な任務であり、未婚の皇女を以てこれに当てたことは周知の通りです。以後十二年、皇女は夢多き青春の日を、ひたすら神をいつく任務に捧げられたのです。皇女が伊勢から大和へ歸られたのは弟の大津皇子の「賜死」の直後のことでした。いつの頃か定かではありませんが、大津皇子はひそかに別れを告げるために、伊勢の齋宮をたづねられたことがあつたと思はれます。万葉卷二の相聞の部に、皇女の次のやうな歌がのせられてゐます。

大津皇子ひそかに伊勢神宮に下りて上り來ませる時大伯皇女の御作歌二首つくりまをらた

わが背子を大和へ遣るとき夜更けて曉露に吾が立ち霑れし
二人行けど行き過ぎがたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ

万葉の「相聞」は狭い意味の恋の歌ではなく、もつと広い意味で、人と人が心を通はせる歌を意味することは、既に述べたところですが、この歌の「背子」も女性から言つて「夫」といふ意味ではなく、「弟」を意味してゐます。秘められてゐたとはいへ、決意は姉の敏感な心に届いてゐた筈です。契冲が「身にしむやうに聞ゆる」といつた心が分ります。

皇子の死後、伊勢から大和へ上つて来られた皇女の歌が、同じく万葉卷二の挽歌の部に四首のせられてゐます。

大津皇子薨じ給ひし後、大来皇女伊勢の斎宮より京に上りし時、御作歌二首

神風の伊勢の国にもあらましを奈何にか来けむ君も在らなくに
見まく欲り吾がする君もあらなくに奈何にか来けむ馬疲るるに

一首目の「神風の」は伊勢の枕詞です。二首目の「見まく欲り」は、まさ目に見たいと思ふといふ意味です。「君もあらなくに」「馬疲るるに」と口ごもるやうな言ひ廻しが、亡き弟に對

する哀切な姉の心を的確に表現してゐて、千三百年前の歌とはとても思はれぬ生きた感情を伝へてゐるではありませんか。

大津皇子の屍を葛城の二上山に移葬し時、大来皇女哀傷して御作歌二首

現身うつしみの人なる吾や明日よりは二上山を兄弟いろせと吾が見む

磯の上に生ふる馬酔木あしびを手折らめど見すべき君がありといはなくに

これらの歌が詠まれたのは、皇女二十六歳の御時でした。そしてこれ以後、皇女に關しては一首の歌も一片の記事もなく、わづかに『続日本紀』の大宝元年十二月の条に、その死を報ずる一行を見るばかりです。二十六歳から四十歳まで、この皇女の身辺には空白が残されてゐて、一しほ悲しみを誘ひます。

(『祖國と青年』平成六年十二月号)

れんけつ
恋闕の歌人白井傳 しらみつたふ

白井先生は平成五年十一月二十五日、交通事故によつて七十七年の生涯を閉ぢられました。悲報を受けたとき、天はかくの如き凜烈高雅な人に、かくの如き非情の死を与へるのかと長嘆これを久しうしました。奇しくも憂国忌の日でした。先生は対馬にお生れになり、生涯の大部分を小、中学校長、公民館々長など郷土の子弟を教育する仕事に捧げられました。日教組との戦ひは自らも言はれるやうに「微身血涙の三十余年」であつたのですが、その一方で青年期から『ひむがし』『不二』歌道会などに據つて営々として短歌創作の道を歩きました。昭和五十九年に私家版として刊行された歌集『艸莽恋闕』の一卷は、読む者をして清冽な泉に触れるやうな感動を与へてくれます。歌集の題名は、名も無き民がひたすらにみかどを恋ひしたふといふ意味で、先生の生涯は、文字通りこの四字を日々行ずることであつたのです。

昭和五十八年の新春に當つて、昭和天皇の御製が八首発表されましたが、その中に次の一首がありました。

わが庭のひとつばたごを見つつ思ふ海のかなたの対馬の春を

多少の謹解を加へますと、「ひとつばたご」はモクセイ科の落葉喬木、晩春の候に小枝の先に円錐状の集散花序をつけ、多数の白い花を開きます。対馬の鰐浦の里にはその木の群生した自生地のあることを、生物学者の昭和天皇は充分御承知であつたのでせう。それにしても吹上の御所の庭のひとつばたごの花から、直ちに遙かな国境の島対馬の春を思ひやられるみこころに、草莽の臣白井傳がどのやうに深い感動を受けたか、余人には測り知れないものがあつたと思はれます。先生はその年のひとつばたごの開花を待つて、幾葉かの写真を撮り、昭和天皇に献上されたのですが、その写真の中には怒濤の海に臨んだ岬の山に、白雪のやうな花が咲き満ちてゐる鰐浦の里の一片がありました。そして、御製に応へ奉る渾身の赤誠の表現として「ひとつばたご頌」二十六首の連作が作られました。今、その中の何首かを抄録してみませう。

ひとつばたごみづえさやかにもえいでてみかどのよきひちかくしなりぬ

ふきあげのみそのふおもふすめろぎのめでますはなのかにさきいでむ

ひとつばたごみつつしおもふとたびませるすめらみことのおほみうたはや

はなみつつしまのはるをおもほゆとのらすみうたになみだあふれき

ひとつばたごさきいでましきとおそはるのしまのおたよりささげまつらむ
 すめろぎのめでたまひけるはなぎよとこらにうまごにかたりつがなむ
 やまみながしろくはえける鰐浦のさとのうつしゑささげまつらむ
 はるおそくゆきおけるがにひとつばたごおいきいよいよはなあふれける
 くにのはてしぶくはやてにとしつきをたへてはなさくをしきろかも
 すめろぎのめでますはなよろづよにふやしそだてむかたりつがなむ

白井先生のうたの表記法は、漢字を抑へて一字一音式の仮名書きにしてをられました。これは先生が私淑ししゆくされてゐた会津八一の表記法に倣はれたものと思はれます。短歌の音声を重視するといふ短歌観の表はれでせうか。こゝに抄出した十首は、いづれも歌意に難解のものはありませんが、初学の方もあらうと思つて、少し注しておきませう。一首目の「みづえ」は「瑞枝」の意、「みかどのよきひ」は四月二十九日、即ち昭和天皇の御誕生日です。二首目「ふきあげのみそのふ」は「吹上の御園生」即ち吹上御所のお庭の意です。三首目の「たびませる」は「御下賜下さった」の意です。四首目から七首目までの歌意は説明の要はないでせう。七首目の「ゆきおけるがに」は「雪の積つたやうに」の意、「おいき」は「老樹」の意です。九首目、十首目も問題はないでせう。これらの歌を読むと、「ひとつばたご」の花を媒介として、君臣相

唱の世界が果しなく広がつてゆく思ひがします。この、魂の交響の世界は日本人のみが持ち得る至福の世界ではないでせうか。

白井先生には、自分は国境の島の新防人にひさきもりだといふ強烈な意識がありました。

われこそはにひさきもりよ二十余年ふりし軍靴ぐんかにあぶらぬりをり

福岡の地で不慮の死を遂げられた先生のみたまは、今も怒濤のしぶく対馬の島辺で、祖国の永生を祈つてをられることとせう。

（「祖國と青年」平成七年一月号）

「防人の歌」再読

万葉集巻二十に収録された百首近い「防人の歌」は、戦時中は戦意昂揚のため動員され、戦後は反戦歌として利用されました。古典がその時々々の政治に翻弄された悲しむべき現象でした。今は、さういふ特定の視点を捨てて、公正にこれらの歌に接すべき時と思ひます。

防人とは養老令に「凡そ兵京に向ふをば衛士と名づけ、辺を守るをば防人と名づく」とあるやうに、もともと辺土を防衛する兵士を意味し、語源的には「埼守」「岬守」「関守」などが考へられると思ひます。しかし、万葉の場合にはもつと限定されて、筑紫、壱岐、対馬など、大陸からの侵攻に備へて、海辺防備のために派遣された東国出身の兵士たちを指した言葉です。

この大歌群が結集された天平勝宝七歳（七五五）は、防人の最後の交替期に当る年でした。この時の兵事担当官兵部少輔に、大伴家持が在任してゐたことは何といふ僥倖だつたことではう。東国十ヶ国から徴集された兵士たちは、部領使に引率されて陸路難波津に集結します。兵士達が提出した歌は、国ごとに部領使が一括して家持に提出しました。八十四首が採択されましたが、八十二首は「拙劣なる歌」として削除されました。家持は出来得る限り兵士たちの肉

声を活かさうとして、方言、訛語（東国なまり）を正確に記録に留めてゐます。注意すべきは、これらの歌は一人一人の防人たちが孤立した立場で詠んだものではなく、国ごとの出陣式のうたげのやうな場で集団的に作られたものだといふことでせう。具体的な指摘はしませんが、その発想や修辞を細かく検討すると、共通の場の存在を想定せざるを得ないからです。東国十ヶ国の防人歌群中、七ヶ国までが、「大君の命かしこみ」またはそれに類似した発想詞句を含んでゐることは、国ごとの歌群の中核に、兵士としての天皇への言立て（誓詞）の意味があつたと思はれます。その典型が下野国の歌群の冒頭に出て来る次の一首です。

今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つわれは

「醜」は頑強な、勇猛なといふ意味です。「今日よりは顧みなくて」といふことは、きのふまでは顧みるべき私情の世界があつたといふことでせう。この一首は防人歌群中、最も「公」に接近した歌ですが、かういふ決意の生れて来る背後に、どれだけ広大な「私」の世界があつたことでせう。妻を詠んだ歌二十四首、父母を詠んだ歌二十三首が何よりもそのことを語つてゐるのではないでせうか。

わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘れず

道の辺の荆の末に這ほ豆のからまる君を別れか行かむ

蘆垣の隈処に立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きしぞ思はゆ

ひなくもり碓日の坂を越えしだに妹が恋しく忘れぬかも

旅と云ど真旅になりぬ家の妹が着せし衣に垢つきにかり

ひどい東国なまりの歌ですが、歌意にさうむづかしい点はないでせう。二首目の「道の辺の荆の末に這ほ豆の」までは、「からまる」を引き出す序詞ですが、東国の農民にして初めて詠み出すことのできるやうな実感があります。三首目の「しほほに」は、しほれるほどに、といふ意味です。四首目の「ひなくもり」は「薄日」といふ意から「碓日」にかかる枕詞です。五首目の「真旅」は本格的な旅といふ意味です。いづれも妻に対する絶ちがたい恩愛の情の漲つた作品です。九州への旅が当時いかに苦渋を強ひるものであつたかを思ふと哀切の情が迫ります。続いて父母を詠んだ歌を二首あげてみます。

父母が頭かき撫で幸くあれたいひし言葉せ忘れかねつる

月日やは過ぐは往けども母父が玉の姿は忘れせなふも

二首目の「忘れせなふも」の「なふ」は否定の助動詞、忘れられないなあの意味です。父母を「玉」とか「花」に擬することは極めて自然だったと思はれ、類似の表現が沢山あります。続いて子を詠んだ歌を一首。

韓衣裾からころむに取りつき泣く子らを置きてぞ来ぬや母おもなしにして

取りすがつて泣く母のゐない子ら、それを置いて出で征く人の悲しみ、さういふ私情の存在があつて、「今日よりは顧みなくて」の歌の決意のかけがへのなさがあるのです。

（『祖國と青年』平成七年二月号）

歌会始の儀うたかいはじめ

去る一月十二日、皇居の宮殿・松の間で、新年恒例の歌会始の儀が行はれました。今年のお題は「歌」。天皇皇后両陛下、皇族、召人、選者などの歌と共に、詠進歌約二万一千首の中から選ばれた十人の方々の歌が披露されました。短歌を通じての君臣交流の儀式が、今もなほ古代さながらに厳修されてゐるといふ事実には、今更のやうに衿えりを正さしめられる思ひがしました。

天皇陛下

人々の過しし様を思ひつつ歌の調べの流るるを聞く

皇后陛下

移り住む国の民とし老いたまふ君らが歌ふさくらさくらと

天皇陛下の御製ぎよせいは、歌会始に臨まれた折の御経験を、そのまま、歌に詠まれたものと思はれます。天皇が国を治められることを「知らず」「知ろしめす」などと申しますが、この言葉は「知

る」の敬語形です。国民の生活を知ることが、古来天皇の政治の内容でした。天皇は入選者の歌が朗詠される流れるやうな調べに耳を傾けて、その歌の作者の一人一人のかけがへのない生活に思ひを致してをられるのです。歌に表現された具体的な生活の姿を偲ばれる場、それが歌会始の儀なのです。

皇后さまのおうたは、昨年六月御訪米の折に、ロサンゼルスの日系人施設を御訪問されたとき、老人たちが日本古謡「さくら、さくら」を歌つて歓迎したことを回想されたものです。移住した国アメリカの国民として年老いた人々への限りない御愛情が溢れてゐて、老人たちが祖国への無量の思ひをこめて歌ふ「さくら、さくら」の歌声が響いて来るやうな一首です。

皇太子殿下

人々をへだてし壁はくづれたりベルリンに響く歓びの歌

同妃殿下

夕映えの沙漠の町にひびきくる祈りの時をつぐる歌声

皇太子殿下のお歌は平成元年（一九八九）十一月九日、ベルリンの壁が崩壊した歴史事実を詠んでをられます。このとき、西ドイツでは丁度議会開催中でしたが、与野党の議員は一斉に

起立して、期せずしてドイツ国歌の合唱の音が響いたと伝えられました。「歓びの歌」といふ御表現から、第九交響楽の「歓喜の歌」の大合唱だと思はれます。ともかくも、若い皇太子殿下が、分断から統一へ向ふ民族のドラマに注目され、その深い感慨を一首に表現されたことは感動を誘ひます。

妃殿下のおうたは、昨秋、中東四ヶ国御訪問の折の印象を詠まれたものと思はれます。イスラム教独特の、長く尾を引いたコーランの詠唱に、夕べの祈りを捧げる沙漠の町の人々の上を思ひやられた一首です。続いて入選歌の幾つかを紹介します。

船うたも絶えたる茅渟ちぬの海中わたなかに島生あれていま一番機たつ（大阪府 永井千代）

最年長の永井さんの見事な一首です。「茅渟の海」とは大阪湾の古称です。万葉の卷十一に「茅渟の海浜辺の小松根深めて吾が恋ひわたる人の子ゆゑに」といふ相聞の歌があります。この方の古典の教養が偲ばれます。「海中に島生れて」とは人工島の上に作られた関西国際空港を意味するものと思はれます。かつては、のどかにひびいた船歌の代りに、今一番機の爆音が、新しい時代を告げるやうに轟とどろくのです。古い地名や古語が詠まれてゐるのに、少しも懐古的でなく、一読して豊かなすがすがしさを感ぜさせます。まさに万葉と近代が一体化してゐて、平成の歌

会始にふさはしい作品と思はれます。

卒業のうたはひとりのために流れ今日限り閉づ島の学校（長崎県 溝口みどり）

過疎の島は学齢期の子供たちも減つて、今年の卒業生はただ一人なのでせう。この一人が卒業すれば、長い歴史を経て来た島の学校も閉鎖される運命です。見守る父母や教師の中に、緊張して一人立つてゐる子供、その子の上に流れる卒業のうた、誠に感動的な一瞬です。

ゲートルの下に歌稿を巻き入れて北ボルネオゆ還りきにけり（福岡県 清田則雄）

改めて注釈の要はないでせう。かういふ経験をした復員兵は無数にゐたと思はれます。さういふ人たちによつて戦後の復興が成つたことを忘れるべきではないでせう。

〔祖國と青年〕平成七年三月号

家持やかもちの春愁はるこもの歌

大伴家持は万葉集の実質的な編者と目せられる大歌人です。通説に従つてその没年を延暦四年（七八五）六十八歳とすれば、逆算して生年は養老元年（七一七）といふことになります。彼の歌の中で年代の明らかな最初の歌は、十六歳ごろの作と推定される次の歌です。

振仰よりさけて若月わかづき見れば一目見し人の眉まゆびき引思ほゆるかも（卷六・九九四）

父ちちの旅人たびとや叔母おとこの坂さかのうへ上の郎いらつめ女のやうな一流の歌人の薰陶くんとうの下にあつたとは言へ、このいかにも少年らしいみづみづしい秀作はさすがです。「振仰けて」は視線を遠くに放つといふ意、「眉引」とは眉墨まゆずみで引いた眉を意味します。三日月を見て若い女性の面影を思ひ描いてゐる歌です。少年期から青年期にかけて、彼は彼をめぐる数人の女性達と、風流な相聞歌の贈答を続けてゐます。やがて旅人の没後は、武門の名家大伴氏の族長として、官人としての道を歩み始めますが、彼の背後にゐる常に彼の庇護者ひごしやであつたのは、当時政権の中枢にゐた橘諸兄もろえでした。彼が

二十九歳といふ若年で越中守といふ重職に任ぜられたのも、諸兄の推挙があつたからだと思はれます。

彼は六年間の任期の間、政務の面でも作歌の面でも充実、緊張した日々を過したやうですが、その風流貴公子としての歌風に異質のものを打出して来るのは「陸奥国より金を出せる詔書を賀ぐ歌一首并に短歌」(四〇九四—四〇九七)に於てです。当時は国家的な大事業として、奈良東大寺の大仏の造営が進行中でしたが、その資金が不足して、聖武天皇は心労を重ねてをられました。ところが天平二十一年(七四九)二月、陸奥国小田郡から、黄金九百両が献上されました。天皇は仏恩に感謝し、年号を天平感宝と改元され、群臣に宣命形式の詔を下されました。その宣命の中で有名な「海ゆかば」で始まる大伴氏の「言立て」(誓詞)を引用され、「又大伴佐伯宿弥は常にも云ふ如く、天皇が朝守り仕へ奉ること顧みなき人になれば」と、その功業を深く嘉賞されたのでした。

北辺の国守として、家持がこの宣命にいかにも深く感動したか、前記の応詔の長歌はそれを如実に語つてゐますが、この長歌の中核にあるのは、古代貴族の中心的存在であつた大伴氏の「言立て」にあることはもちろんです。この「言立て」が、家持個人の創作の中にはめこまれた氏族の天皇への誓詞であるとともに、日本民族の集合意識の凝縮された表現であることは、信時のよとき潔きよし作曲の「海ゆかば」の旋律が、今も聞く者の心魂を動かすといふ事実が明白に語るところで

す。

海行かば水浸く屍 山行かば草生す屍

大君の辺にこそ死なめ 顧みはせじ

家持の胸中には、天皇の親衛隊として、山河を馳駆した英雄時代の祖先の記憶がまざまざと蘇つたに違ひありません。彼がこの長歌を詠んだのは推定年齢三十二歳のときですが、翌々年、彼は少納言となつて帰京します。前述のやうに、彼は橘家の庇護の下にあつたのですが、当時は既に新興官僚貴族としての藤原氏の勢力が圧倒的な強さを揮ふ時代になつてゐました。彼には橘氏と藤原氏の間立つて、帰趨を決定せねばならぬ暗澹たる現実が目前に立ちふさがつてゐたのです。大仏開眼のはなやかな祝祭のどよめきがまださめやらぬ翌年、彼は次の三首の歌を作ります。

二十三日、興に依りて作る歌二首

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕かげに鶯鳴くも（卷十九・四二九〇）

わが屋戸のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも（四二九一）

二十五日、作る歌一首

うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも独りしおもへば（四二九二）

一首目の「夕かげ」は夕暮の光、二首目の「いささ群竹」は少しばかりの竹林の意味です。この三首は家持の抒情歌の最高の達成といふ評価がありますが、初期万葉には見られぬ、春愁ともいふべき繊細なよみぶりです。「海ゆかば」の述志の歌とは余りにかけ離れた歌境のやうに見えますが、背後にある歴史の激流を思ふと、これは古代の終焉への家持の危機意識の表現のやうに思はれてなりません。この歌の翌年兵部少輔となり、防人歌の収録に力を尽したことは、前々号（183頁）に述べた通りですが、この歌から五年後には、遠く因幡守として左遷されます。そして翌天平宝字三年元旦、因幡国庁において詠まれた「新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重け吉事」といふ賀の歌を万葉集最後の歌として、以後没年に至る二十六年間、一首の歌も残つてゐません。

（『祖國と青年』平成七年四月号）

大震災を詠む

生と死は紙一重のところ、隣り合はせにあるものだと、人は皆観念としては知つてゐます。しかし、それがぬきさしならぬ体験として認識されるためには、戦争とか天災とか肉親や友人の死とかいふものに巡り合つた時だと思はれます。さういふ意味で、あの厳寒の日の阪神大震災は、戦後の日本人の思考の枠組みを変へるほどの衝撃的な事件でした。宣長は「あはれ」といふ言葉は、事物にふれて発する「あゝ」といふ感嘆の声から来たといつてゐますが、日本人が感動を盛る器として、短歌がいかに大きな機能をもつた詩型であるかが、新聞歌壇の投稿歌によつて証明された感じでした。今、手もとにある朝日歌壇から、その数首を抄出して見ませう。犠牲者の方々へのせめてもの鎮魂の思ひをこめて。

小雪舞う大焼野原に骨片をねんごろに拭き手のひらに置く（神戸市 服部淳子）

恐らく焼死した肉親の骨なのでせう。「ねんごろに」といふ言葉に万感がこもつてゐます。同

じやうな体験が俳句では、「凍土割り子の骨拾ふ母となり」と詠まれてゐて、短歌と俳句の表現法の違ひを示してくれてゐます。

かなしくも四五日分のひげ伸びて怪我ひとつなき遺体掘り出ず（西宮市 岩佐栄三）

歌壇の投稿歌を読んでゐて気づいたことですが、仮名づかひが現代表記であることです。短歌は元來文語定型詩ですから、文語文法に則つて、歴史的仮名づかひを使ふのが当然です。こゝでも「出^いず」と表記されてゐますが、正確には「出^いづ」であるべきで、この表記では打消と間違ひさうです。今は深くは触れないことにします。肉体の死後も髭は伸びるといはれてゐますが、「かなしくも」といふ感情表現から作者は遺体の主に近い方でせう。

きみが遺体の掘り起こされしそのみが瓦礫の中にくぼみていたり（京都市 森本明子）

悲しみの情を表はすやうな言葉は、一語も使はれてをりませんが、客観的な情景描写がかへつてなまなましく、圧倒的な迫力で迫つて来る感じます。

我なればいかなすらむ肉親の焦げゆく傍にすべなく立てば（山口市 山本弥生）

これは震源地から離れた地の人の作ですが、焼死する肉親を傍観するしかないといふ極限の現実が、切実に追体験されてゐる一首です。

しかし、ほんの一瞬の差で、死の手から逃れた人もゐます。人間が一人一人背負つた運命といふものを考へざるを得ません。

さげびつつ倒れくる家具とたたかいつ転がり出でし身のふるえ止まず（西宮市 津田祥子）
箆筒たんすの下を必死に抜けし老妻は一瞬笑い次に号泣す（神戸市 長沼満）

「身のふるえ止まず」と言ひ、「一瞬笑い次に号泣す」と言ふ、いづれも技巧的には稚拙ともいふべき表現ですが、生死の境界線を偶然越えることが出来たときの、衝撃的体験は、かういふ言葉でしか表はし得なかつたのでせう。後の歌の作者は八十四歳、奥さんは八十歳だといふことですが、被災後どんな暮しをしてをられるのでせうか。

思いきや「生きていたの」が挨拶になる日來るとは昨日の我よ（神戸市 岩尾淳子）

昨日と今日は、自然の時間は少しの停滞もなく連続してゐるのですが、文字通り「地獄」を見てしまった作者には、「昨日の我」が全く別人のやうに思へたこととせう。それにしても「生きていたの」がジョークではなく、真顔で言はれる世界があつたといふ発見は、作者にとつて、どんなに大きな驚きだつたでせうか。

未明裂く阿鼻叫喚あびきようかんに遠くいて義援金では済まぬと思えど（調布市 柳沢英子）

「阿鼻」は梵語で、無間地獄むげんの意味です。阿鼻叫喚地獄とも言ひます。「未明裂く」は未明の静寂を切り裂く意味でせう。義援金（義捐金）でしか誠意が表はせない局外者のもどかしさが歌はれてゐます。

アトランダムに抽出したこれらの歌から、個々の表現を超えた終末論的な地獄図が浮んで来ますが、歌はざるを得なかつた無名の人々の叫びが胸を打ちます。専門歌人がこの現実をどう詠むかは、これからの課題と思はれます。

源実朝の歌

『金槐和歌集』の作者として、短歌史上に不滅の名を残した鎌倉三代将軍源実朝は、父頼朝と母政子の次男として建久三年（一一九二）に生まれました。そして承久元年（一二一九）正月二十七日、鶴岡八幡宮に拝賀の途中、甥の公暁くまうの手によつて暗殺されました。享年二十八の惜しむべき夭折でした。

彼から遡つて四代目の為義は、保元の乱に敗れて、子の義朝によつて討たれました。その義朝は平治の乱に敗れて平清盛に討たれました。その子の頼朝は武家政権樹立の過程で肉親の弟範頼、義経を殺してゐます。頼朝を継いだ頼家は將軍職一年余りで、母方の叔父北条時政のために弑ころせられました。そして実朝の死です。為義から公暁まで五代、生命を全うしたのは頼朝ただ一人であつたといふ事實は改めて注目されるべきでせう。

『金槐和歌集』といふ名の「金」は鎌倉の字から来てゐます。「槐」は中国で大臣を槐門と言ひますので、右大臣の意味です。即ち『鎌倉右大臣家集』といふ意味なのです。彼が歌を学び始めた少年期には、京都で『新古今集』が完成してをり、その影響を強く受けたのは当然です。

が、十八歳で当代の第一人者藤原定家から歌の指導を受けてゐます。定家から『万葉集』の写本を贈られ「重宝何物か之に過ぎむや」と喜んだのは二十二歳の時でしたが、それ以前から万葉には親しんでゐたやうです。彼の作歌の大部分は、十八歳から二十二歳までに詠まれたものであり、その早熟の才能は驚くべきものであります。

思罪業歌

ほのほのみ虚空こくうにみてる阿鼻あび地獄行くへもなしといふもはかなし

空一面にほのほが燃えさかつてゐる焦熱地獄、一たびそこへ堕ちたが最後、抜け出すすべはない。人間とは何といふ罪業深い存在であらうか。思へば人間とははかない宿命を生きてゐるのだ、といふ意味なのでせう。聖徳太子や親鸞の宗教観に通ふものを、二十歳前後の青年が、しかと胸に抱いてゐたのです。続いて、海を詠んで世評の高い万葉調の歌を二首あげます。

あら磯に浪のよるを見てよめる

大海の磯もとどろに寄する波われてくだけてさけて散るかも

二所詣にしよもうで（箱根権現と伊豆山権現への参詣）の折の歌といはれてゐますが、動詞を四つ連ねて次第に語調を強めて行く息づかひが、沖からひた寄せて来る怒濤の姿を写してゐて、最後の「散るかも」が飛沫となつてとび散る潮けむりを活写してゐます。小林秀雄氏がこの歌は「壮快」な歌といふより「憂悶」の歌だといはれてゐるのも、一つの読み方でせう。

箱根の山をうち出て見れば浪のよる小島あり。供のものに此うらの名は知るやと尋ねしかば伊豆のうみとなん申すと答へ侍りしをききて

箱根路をわが越えくれば伊豆のうみやおきの小島に波のよるみゆ

これも二所詣の折、鞍掛山を経て伊豆山の方へ下りて来る時の作であらうと言はれてゐます。沖の小島は伊豆の初島でせうか。万葉卷十三に、彼が本歌としたと推定される琵琶湖の白波を詠んだ歌がありますが、万葉の歌が朗らかなひびきを持つてゐるのに対して、この歌には紛れもない実朝の孤独な心の表現があると指摘したのは、やはり小林秀雄氏の卓見であると思ひます。

道のほとりにをさなき童の母を尋ねていたく泣くを、そのあたりの人に尋ねしかば、父母なむ身まかりにしと答へ侍りしを聞きて

いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母を尋ぬる

身は將軍職にありながら、路辺の孤児にそそぐこの愛情は、彼自身が子を持たず、父母の縁も薄かつたことを思ふと不思議な気がします。かういふ率直な表現は、当時の歌壇にはなかつた全く新しい詠みぶりだつたのです。

太上天皇御書下預時歌

山は裂け海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも

「太上天皇」は後鳥羽上皇であらうと推定されます。彼の夫人は坊門宰相信清の女でしたから、後鳥羽上皇には近い存在だつたのです。御書状に対する返答の歌になつてゐますが、青年將軍の忠誠の赤心がさはやかです。

〔祖國と青年〕平成七年六月号

あとがきに代えて

山田輝彦先生には、長年にわたって私ども日本青年協議会は御指導を賜っています。本会の月刊誌『祖国と青年』へのご執筆の他、本会学生主催の合宿にも度々ご出講いただきました。また、国民文化研究会叢書におさめられている先生のご著書『明治の精神』や夜久正雄先生とのご共著『短歌のすすめ』『短歌のあゆみ』は、本会の学生の必読書として読み継がれてきました。ここにまた、先生の単行本を上梓することが出来、喜びに堪えません。

本書『短歌のこころ』は、『祖国と青年』に御執筆いただいた「短歌のこころ」「短歌随想」の二つの連載全四十四回分をそのまま発表順にまとめたものです。

「短歌のこころ」は昭和六十一年の一月から、連載が始まりました。当時、私どもは諸団体の皆様方と共に、昭和天皇の御在位六十年を奉祝する国民運動を進めておりましたが、中でも昭和天皇の御聖徳を描いた映画「天皇陛下」の上映運動には、学生、社会人がそれぞれの場で、出来得る限りの力を尽しておりました。先生は、連載開始にあたって、「日本を支えて来た無名の人たちのまごころを、できるだけ掘り出してゆきたいと思ひます」と編集部にお言葉をお寄せ下さいました。

「短歌随想」の連載をお願いしたのは、昭和六十一年十月の「短歌のこころ」連載終了から約六年後の平成四年夏のことでした。短歌の世界の豊かさを、先生の情意を尽したご文章で再び綴って

いただきたいという願いは強く、お願いのお手紙を差し上げました。お受け頂けるかどうか不安ではありましたが、その後、おそるおそるお電話して、快諾をいただいた時の喜びは今でも忘れられません。

短歌が三十一文字の力で読む人の心を揺さぶるように、先生の連載は毎号二頁でしたが、いつも読者の心を潤し、和ませて下さいました。そして時には、静かな決意をも呼び覚まして下さいました。不学な私どもを文学の世界に誘いざなって下さり、心に沁みる歌の数々を紹介して下さいました。柔軟な心こそが、真に強いものだということを、先生は繰り返し教えて下さったように思います。

連載が終わった時点で、先生に単行本化することの御了解をいただきながら、私どもの力不足で発刊までに大変時間を要してしまいました。発刊作業が遅滞する中、平成八年三月、先生は腸を患われてご入院、手術をお受けになり、私どもは大変驚くとともに、お約束を果していないことに対して申し訳ない思いでいっぱいでした。発刊にあたってのこまごまとした字句の校正や編集について、山田先生に直接お問い合わせすることが出来なくなつた為、同じ福岡にお住まいの国民文化研究会の小柳陽太郎先生に間に立って頂き、私どもの初歩的な質問にお答えいただいたり、また術後の山田先生を度々お訪ねいただいてご相談いただいたり、その他様々な面にわたってご教示を賜りました。また、同じく国民文化研究会の夜久正雄先生も、山田先生のご病状について大変心配され、私どもの刊行作業をお知りになると協力をお申し出いただき、改めて全文に目を通された上での細

部にわたる貴重なご教示を賜りました。お二人の先生方の言葉の端々を通じ、言葉に対する厳密さと、友情の深さとを、改めて感じさせて頂きました。私どもの未熟さを先生方のお力によって救っていただいたという感を深く致しております。

お正月に二度、お伺いした山田先生のご自宅の書齋は、文学関係の本でいっぱい落ち着いたお部屋でした。一度目、二、三時間も話し込んで帰ろうとする私を、先生は少し離れたバス停まで送って下さり、固い握手をして下さいました。二度目はタクシーを呼んで下さいましたが、先生は奥様と共に道に立たれて、私の乗ったタクシーが見えなくなるまで手を振り続けて下さいました。先生が、年若い私どもに向けて、毎月毎月どのような思いで執筆を続けてこられたのか、その真心の一端に触れさせていただいたような気持ちになりました。

本書の発刊を機に、私どもは短歌創作と鑑賞の学びに改めて心を振り向け、「しきしまの道」と呼ばれる豊かな歌の道を、拙いながらも歩んでいきたいと思えます。

平成八年八月

日本青年協議会『祖国と青年』編集部

田中和子

山田 輝彦 やまだ てるひこ

一、大正十年（一九二一）北九州市若松区に生れる。

一、旧制若松中学、旧制佐賀高等学校を経て、九州帝国大学法文学部国文学科を卒業。

一、県立若松高校教諭を経て、福岡教育大学教授、昭和五十九年退官、その後、中村学園大学、九州女子大学教授を歴任。

一、著書『大正の文学』分担執筆（昭和四十四年、桜楓社）、共著『短歌のすすめ』、『短歌のあゆみ』（昭和四十六年、国民文化研究会）、著書『明治の精神―近代文学小論―』（昭和五十七年、国民文化研究会）、著書『夏目漱石の文学』（昭和五十九年、桜楓社）。

短歌のこころ

平成八年九月十九日 第一刷発行

頒価 一三〇〇円

著者 山田 輝彦

発行人 梶 島 有三

発行所 日本青年協議会

東京都目黒区青葉台三の十の一

青葉台上毛ビル六〇二

電話 〇三（三四七六）五七一

FAX 〇三（三四七六）五七一〇

振替 〇〇一六〇一―一八五三二六

印刷・製本 青文社

© Teruhiko Yamada 1996
ISBN4-9900536-0-5

Printed in Japan

落丁、乱丁はおとりかえます。

短歌の

こころ

山田輝彦

